

川柳塔

昭和四十一年一月九日発行（毎月一日発行）
 平成五年五月一日発行（毎月一日発行）
 創刊大正十三年 通卷七九二号



日川協加盟

No. 792

同人特集・男 百句

五月号

全国紙上
りんご川柳大会

「りんご」の句を葉書一枚一句（一人二枚まで）、住所・氏名・柳号・電話番号を明記、9月30日までに左記へ

〒036 弘前市大工町五〇一六
大手門歯科内 川柳塔あおもり
1次選者 波多野五楽庵（あおもり）
2次選者 時実 新子（川柳展望）

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各川柳会（句会）の紙上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口二、〇〇〇円

★団体 次の四種といたします。
（氏名・住所・電話番号など掲載）

① $\frac{1}{3}$ 頁 六、〇〇〇円 ③ $\frac{3}{4}$ 頁 一二、〇〇〇円

②半頁 九、〇〇〇円 ④一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 5月25日

〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

第17回 全日本川柳愛媛大会

日時 6月13日（日）午前10時開場

会場 愛媛県民文化会館 真珠の間

参加費 3000円（昼食・記念品代共）

宿題 第一部（事前投句・5月10日締切）

「澄む」 塩見 草 映選

「秘話」 波多野 五楽庵選

「少年」 吉岡 龍 城選

各題2句、無記名、封筒に住所氏名を明記し、
投句料1000円を同封のうえ、左記へ

投句先 〒530 大阪市北区天神橋2丁目北1-11
ステッブイン南森町702号

全日本川柳協会大会係

宿題 第二部（当日出句・正午締切）

「雲」 桜井 豊 泉選

「線」 住田 英比古選

「海」 石原 伯 峯選

「全（詠込み可）」 大木 俊 秀選

〈市内観光〉

日時 6月12日（土）午後零時半集合

参加費 3500円

〈前夜祭〉（式典・祝宴）

日時 6月12日（土）午後7時〜同8時半

会費 8500円

初 恋

西 尾 葉

テレビの皇室アルバムの一齣に、紀宮さまの日本舞踊が放映された。おもしろいとも、健気とも、何とも言えないお可愛さであった。この度の皇太子さま、先の秋篠宮さまのお二人のお兄様方が恋愛結婚に入ってゆかれたので、もうそろそろと二十三歳の春を迎えられる紀宮さまに、記者は無駄にも、初恋のご経験は？」とおききすると、「どの程度のものが初恋と申しますのかわかりませんが、人にあこがれたり、そういうような感情をもったことがあります」というお答え。

何と賢明なコメント。皇室に育っても私も同じ人間、あらわに出さぬだけのこと、そういう感情をもったことがあるという木石ならぬ身をそれとなく表現されたことは洵にたのもしい。それを伝えた紙面に一時のういういしい風がたち、その風に甘すっぱいフリージアの香りがあつた。啄木の歌に

「砂山の砂に腹這い初恋のいたみを遠く
思い出する日」

時は正に花開く季節で、春愁の季節でもある。卒業や入学による、愛別離苦のシーズンでもある。心も高揚したり、昂奮もする。矢張り啄木の歌に

「やわらかに積れる雪にはてる頬を埋む
るとき恋してみたし」

雅子さま、紀子さまと二人のお姉様をもたれる紀宮さまは、行く先頼もしい日を迎えておられることだろう。

同人吟を選してみても、とみに句のよくなっている方は句に艶がある。きっと恋をしている人かも知れない。短詩文芸のどの道にも、歌や句の落ちた時は恋せよ、恋すれば歌が詠め、句が生れる、とはよく言われる言葉である。明治・大正時代と違って、現代は大手をふって恋の出来る時代である。「恋はハシカに似ている。年をとってからかかると重病になる」と言われているのに、閉鎖的で孤立的である。所謂、感覚的に肉体的に早熟である。「早熟ヤングに晩熟アダルト」と言われる時代である。明治の二葉亭四迷はロシア近代小説を言文一致の日本語に翻訳したとき、英語のアイラブユーを「死んでもいいわ」と訳した。こんな恋をしてみたいと思いませんか。

座右の句

燈台の夕陽神話を抱き寄せる

(尼 緑之助)

私の句

早春の花は私を温くする

富田 蘭 水

川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 初恋

新婚列車

川柳塔(同人吟)

自選集

川柳の群像 小西無鬼

■古川柳 柳籠裏二篇研究(十七丁)

■同人特集「男 百句」

水煙抄

秀句鑑賞 同人吟

水煙抄

大空のこころ (29)

銀河系

西尾 栞 (1)

黒川 紫香 (2)

西尾 栞選 (4)

東野 大八 (44)

黒川 紫香選 (54)

波多野五楽庵 (48)

山田 高夫 (75)

橘 高 薫 風 (39)

河内天笑選 (76)

新婚列車

黒川 紫 香

春に先駆けて開かれた鳥取県川柳大会に出席した帰途、栗主幹らと倉吉駅発十六時すぎのエーゼル鳥取に折柄、新婚さんを見送りに来たいいくつかの集団を掻き分けて乗った席は一号車の一ノC。

正に展望車の最前列。幸運と喜んだのも束の間、列車は後ろ向きに走り出した。つまり上りと下りは逆方向になるので、展望でも走り去る景色を見送る形になった。でも大きなガラス戸を隔てて運転席があるだけで全体が広く見やすかった。

発車間際、大歓声とともに見送られた新婚さんが乗っていると、車内は一度に明るくなった。隣のAとB席に青年のお孫さんを連れたおばあさんが「ウアー華やかになりましたなあ」と立ち上がったにこやかに笑った。

間もなく着いた鳥取でも一号車に二組、次の浜坂、香住も何組かの新婚さんが乗り、新婚オンパレードになる。

鎧を過ぎ、高さで有名な余部鉄橋を越えた頃は陽も落ちて切角の展望も暗闇になり、時々走り去る灯りしか見えないようになってが代わりに運転席と隔てたガラス戸に明るくな

茴香の花

「熱」

一路集「雑誌」

「練る」

初歩教室「姿勢」

■川柳こぼれ話 色いろいろ

各地柳壇（佳句地十選／榎本吐來）

■ひみこさろん 未知の体験

細く長く

四月本社句会

柳界展望

五月各地句会案内

■編集後記

小出智子選……（80）

藤井正雄選……（82）

小澤幸泉選……（82）

春城武庫坊選……（83）

吉岡美房……（84）

田中正坊……（85）

北山好笑……（86）

野村京子……（99）

……（99）

……（100）

……（104）

……（105）

……（106）

座右の句

天と地のはざまにふわり生かされて（尼 緑之助）

私の句

日向ぼこ話上手がそばにいる

島 祥庵

った車内の様子を反射して動向がよく判る。私達の後ろと云うか前に二組の新婚が並び、その先に温泉旅行の帰りと見える中年男性が三列ほど、その向うに仕切りがあつて先是一般車両と同じ前後に倒せる椅子席となつてゐる。一号車のこの席にも二、三の新婚さんが乗っているらしい。全車五両合わせると相当の新婚さんが夜の丹波路を走っていることになる。

過ぎ行く景色は判らなくても、車内の様子がガラス戸に写し出されるので退屈はしない。はじめは新婚さんを冷やかす眼で喋り、飲んでいた男性達も黙ってしまった。朗らかなおばあさんもトイレに立つたついでに買つて来た缶ビールを一つは孫に一つは自分で一気に飲み干し、この孫にも早くこのような嫁をと言いたげな顔をして眠ってしまった。その孫は大きな体にも似合わず無口で、漫画の本を読みふけていた。倉吉駅で時間待ちをしていた時、主幹の奥さんが「私等も百円（当時の）持つてこの東郷温泉を皮切りに新婚旅行に來ましたが、半分ほどしかよう使わず、帰りましたんや」と現代っ子の派手な華やかさとの違いを述べられていた。

そう言えば私の新婚旅行も最初の宿で妻が病氣になり、早々に引き返した苦い思い出がよぎって行つた。矢張り三月だった。人それぞれ、時それぞれだと思つた。

川柳塔

西尾 栞 選

唐津市 久保 正 敏

水色のワルツに今も酔える幸
勘違いされたら困るチヨコレート
竹光を抜け抜け抜けと国連旗
疑獄処理にかまけて北の島忘れ
オテモヤンで歓迎されている任地
上申書で済む程妻は甘くない

大阪市 西 出 楓 楽

たこ焼が好き人情家かも知れぬ
三角形 俵 おにぎりにも主張
新調で歩けば初夏の風が寄る
ムッシューと呼びたい人がたまに居る
ホワイトデー妻の器量が試される
友達にしようジョークが下手な人
米子市 林 荒 介
友達達の葉書に濡れるたなごころ
風を見て風の言葉で着く便り

包丁はまだ研げないが妻である
色々なものを見過ぎた瞳の色だ
ははを飾る少しばかりの嘘
友達の手の温もりに負けられぬ

竹原市 小 島 蘭 幸

雨が降ったら逢える気がする雨が降る
怒りっぽくなった忘れっぽくなった
恋猫よばくは怒っているのだぞ
恋ひとつ春の電車に飛び乗った
死んだふり眠ったふりをして生きる
卒業証書でのひらにあり芽吹く春

鳥取県 土 橋 螢

サボテンが可愛い花をつけてきた
カメラを携げて春を探しに行ってくる
六十四歳よりもしたたかなる梅よ
私を招く 仏の立ち姿
左利きの人格今日も朝帰り

さすが年功あいさつが洒落ている

鳥取県 新家 完司

元氣出るクスリで束の間の元氣

御主人の留守に上がつて落ち着かず

馬鹿が持つとベンもカメラも恐ろしい

ひとり分の珈琲しずかに沸き上がる

鐘の音あの世この世の中ほどで

わたくしも許してほしい鐘を撞く

松原市 小池 しげお

おもちや箱覗くと二十一世紀

ちりれんげ僕には過ぎた妻が居る

ひとよりも少し早目にお辞儀する

雀取り仕掛けた儘になっている

飲める人には飲んでもらったお命日

警察はどこにあるかと僕に聞き

和歌山市 福本 英子

旨い汁吸って大きい火傷する

お隣の娘と仲が良い途中下車

お札参りする神様の多いこと

腹立たしいニュース一服点てながら

親知らず抜いて一人前の貌

税務署の順番みんなおとなしい

和歌山市 西山 幸

春や春 軽いのちも日向ぼこ

さくら餅すこし悪女になりました

女三人沈黙ごっこなど如何

正確な時計よさむくないですか

鳴ることを忘れた鈴の人嫌い

閑話休題 化粧くずれを直さねば

米子市 野坂 なみ

誕生日 息子へ贈るアデランス

米寿まで生きたい欲が歩かせる

つかい棒 棒はこまめに手を入れる

舵故障 櫓でも櫓でも漕ぎだそう

えらいのが一人冷えこむクラス会

頭割り出来ないもので揉めている

島根県 堀江 正朗

戦盲も桜だよりが春にする

春と聞くだけで眼の明く心地して

お陽さまに話しかけられ爪を切る

雑草の強さで僕も生きてるぞ

指先がまた迷ってる物忘れ

島根県 堀江 芳子

気ぜわしい世だなど桜早く咲く

桜咲くときだけ過疎は人の波

八勺のうたた寝春はのんのんと

春はいいな優しい言葉連れてくる

歳なりの体操ラジオ笑いそう

倉吉市 奥谷弘朗

人の苦も人の情けも病みて知り
生涯学習 色気を出して四苦八苦
ライバルの居る人生に感謝する
仲人の話術に負けてもろた嫁
盃に散る花びらも酒が好き

奈良市 宮口笛生

酒のまぬ取っつきにくい人である
一期一会 辻の地蔵の鼻が無い
一匹で金魚が冬を生き抜ける
吉野のさくら何時でも行けるから知らず
さくらさくら少し汗する缶ビール

豊中市 田中正坊

一日をていねいに生き日記書く
時に敵ときに味方となる男
男にはやはり男のうたがあり
不器用な男いちばん役に立ち
わたくしの名前が載った本を買う

高知県 赤川菊野

鈍痛がロックのリズムで攻めてくる(入院)
鈴付けて助走しようか二十一世紀
歳月が無駄でなかった好い出会い
置き忘れしまい忘れの昨日今日
あの事は忘れたことにしています

岡山市 時末一灯

戦争がないだけという国何処へ
棲みついた病に間借りさせてやる
消費税どころか五億も風化する
もてたかな そうか財布がもてたのか
ボール蹴る子供がいない街冷える

大阪市 北勝美

春彼岸お寺さんから案内状
都会とは並ぶの好きないか焼屋
花曇り鐘の余韻が眠くする
狂う世に金の醜さ見てしまひ
病院は死に行くところ薬漬け

羽曳野市 榎本吐来

陽が昇る婦唱夫随に目をつぶる
万歩計隣の犬に無視される
饒舌を帰路のバイクに咎められ
洒落た気のノータイ妻にひっかかり
懐の似た者同士合う歩幅

島根県 小砂白汀

一羽の神経さつと千羽にゆきわたる
雨の宵ことさら沈丁慕いよる
生き恥を曝しておりますカブトガニ
いそいそと下着まで替えクリニク
なんぼかは嘘も吐いたか歯を抜かれ

✓

五十回忌 葬式の日私は戦地です 柳井市 弘津 柳 慶

喜寿過ぎてOB会の多いこと

老人会の人気者です妻無口

不況風関係なしの暮しなり

日本一の若い市長を見守って

寝屋川市 江口 度

仏壇の広告祖母に見せられぬ

祖母さんが乳母車押す石のせて

どたん場で神に念じて通ずるか

ロボットに創る喜び奪われる

温泉に來ても浮世の風は吹く

高槻市 川 島 諷云児

人並みの倅せでよし福寿草

涙腺が脆くなったなあこれも齡

世渡りが下手で乗り継ぐ駅がない

ロボットでないから欲も愚痴も出る

二番手につけて余生を急がない

岡山県 嘉 数 兆代賀

晩学の辞書に手垢が染みている

血縁の重さ痛さよ風の中

長距離の電話で絆たしかめる

どん底で生き抜く笑顔身につける

泣かされた女が彫った夜叉の面

藤井寺市 吉岡 美房

叱ってる孫につこり笑われる

春の雨いつもお前に騙される

春ですな夫婦茶碗が欠伸する

僕に似て内気な犬だから困る

大概にしいや大阪から電話

今治市 矢野 佳雲

ほめられたところから積木崩れだし

パートする母への義理で塾へ行き

盛り塩の白がほのかに暮れ残り

古傷を家内真綿で首を締め

神様の吐息か霧が立ちはじめ

名古屋 越村 枯梢

春の風秘めごと一つ曝け出す

何が無くとも千両万両の実が朱い

誇らしく帰った孫はブービー賞

大器晩成すこし時間が足りなんだ

平穏なくらしに飽きて魔女に会う

松江市 柳 楽鶴丸

皇室の血も四分の一になりました

コンドームも教材になりました

エイズより糖尿病が怖い僕

禁煙とは僕に死ねと言う事か

図書館に馬鹿の標本ありません

松江市 舟木与根一

対等にあぐらもかいて親離れ
老いらくの恋見て見ない振りをする
留年という手で景気待ってみる
ワリサイは札束よりもグロテスク（脱税摘発）
金塊が名誉毀損と怒り出す

松原市 玉置重人

お隣と比べられてる偏頭痛
こわいかに隣の犬に吠えられた
預かった釣書が重い春のうつ
肝心な時に浮かんだ妻の顔
車間距離守って味の悪い話

笠岡市 松本忠三

気位が高いどうしてなんでしょう
感情の動物わたしのことかしら
聞き耳を立てていますよご用心
冗談はよしてその気になりますよ
寛大な処置ってなんのことかしら

廿日市市 林野甦光

針通す糸がミゾまで来て迷い
即答するとヤラセがばれそうで
顔いて後ろめたさもある妥協
世渡りの武器にして来た低い腰
刃こぼれになっても怖い女達

下関市 石川侃流洞

喜寿祝ってやるから来いと子の便り
馬の足くらいに勲章振り向かぬ
広辞苑繰って答はまだ出ない
お隣と競うてからの火の車
御尊顔拝してなどとほめ殺し

鳥取県 松下たつみ

どの声も信用出来ぬ闇のなか
人災のひとつに仲人口があり
入知恵の次の言葉が自刃めき
かくれんぼ一休さんの知恵を借り
水呑場好きな男とのみに行く

奈良県 田中紀美代

満山を春の楽譜で埋めつくし
お隣と同郷なおらぬ国なまり
自惚れを助長しそうな水鏡
二三日かるい風邪ひく予定たて
ほほ笑みをバックミラーでチェックする

美禰市 安平次弘道

性善説いつまで神をだます気が
ホルテージを一気に上げたスベアキー
ラストシーンあくまで白を切り通す
四コマのマンガに夢を侵される
忘れてはくれぬ他人のうす笑い

米子市 林 瑞枝

駆け巡る想いは森の一本杉
遍歴を語りやさしくなる河口
木守柿ヒント発見して落下
ちちのペン生涯かけて虹を追
雪見障子開けて見ました鶴の舞

和歌山市 松原 寿子

全身に包み鼓動をたしかめる
迷わずに一途な想い守り抜く
受け止めてほしい心の毬を投げ
春の譜がわたしの部屋をあたためる
とある日 記憶を正す便り解く

香川県 松村 迷観子

野菜では季節を学ぶすべもなく
ご先祖の足跡を見る連子窓
吹く風にまかせていればよいススキ
ゲートルを知らぬ世代の国平和
天秤にかけると主婦の座が重い

西宮市 門谷 たず子

都忘れの無口が好きな春の風
鉢植の木の芽で足りる老いの膳
欲すこし減らせばもつと眠れよう
今日は過去花咲く明日を信じたい
逢おか止めよか点減してる信号機

八尾市 内海 幸生

一冊の本で始まる失語症
雪国の男に雪見酒は無い
平熱が一度上っただけなのに
地球自転それも忘れておりました
鴨食うた口で同情論をぶち

八尾市 宮西 弥生

花に風 女に風だつてある
出直しが出来ればあれこれ好きなこと
ふりむいた分だけ他人に越されそう
他人のこと言うまい聞くまい花の下
若いきれいな鏡の中のひとりごと

大阪市 津守 柳伸

頼母しい背中に家族の彩がある
株分けの蘭に花芽が出たニュース
一泊を話し尽せぬ糖衣錠
体裁をかまわぬ母のLサイズ
謙虚さがあれば変っていた事情

寝屋川市 稲葉 冬葉

初恋はレールの如き車間距離
網タイツ女の視線意識する
コンタクト必死に探す女のヒップ
嫁姑ありがとうが生きてきた
ひとり鍋誰かを呼んで見たくなり

富山市 舟渡杏花

東大阪市 森下愛論

敵の敵に塩を送ってみたくなる
余白まだ相聞歌でも埋めようか
アクシデントに飢えてると言う怖さ
そんなこと照れずに答えられますか
弾まない鬼の太鼓に加勢する

加古川市 吐田公一

他人のめし食べて解ってきた世間
絞られて今日のこの身にある果報
すらすらと嘘が出てくる日の恐さ
買物の女の眼真剣だ
フィアンセに試験されてたとは知らず

島根県 榊原秀子

葬送の二月にまれな青い空
冬苺風邪をやさしく慰める
病人を叱り私も叱ってる
ふくらんだ蕾約束ごと近い
心全開ストレス捨ててきた笑い

堺市 高橋千万子

咳が出る電話に風邪がうつりそう
おしかった人にされてる通夜の席
新築を祝うジュース軽くふむ
寄り切られそうな新人の名刺
花冷えに寄り添う人が居て温い

不意に来た客へパツパと胸算用
打ち解けた心へ杯寄って来る
悪くとも良くとも酒なら旨いもの
タイミング合った本音のコップ酒
喜寿傘寿エンマの予約はまだ早い

大阪市 河井庸佑

そつのない男にしては遠回り
平常心揺らいだ隙につけ込まれ
さりげない仕草に見せる温かさ
義理人情絡みししぶ手を添える
奥の奥読んで即答ひかえとく

香川県 木村明人

ライバルが光って見える昨日今日
幕を引く時まで夢は放さない
仏縁に縋って今日も生きてゆく
駅まで歩いて三分心引く
沈黙は抗議の一つかも知れぬ

香川県 成重放任

三ヶ月早く日取りと聴診器
ことごとく失敗続きの三りんぼう
湯上りのほてった妻に惚れ直し
長寿国喜んではかりおれません
一夜明け温灰を見てはつとずる

香川県 川崎 ひかり

へそくりの僅かな定期に税がつく
ラッキーマッキー青色続く交差点
光るものなにも無かった母の指
小百合ちゃんやっぱり小じわ出来てきた
ふる里に飾る錦がまだ織れぬ

尼崎市 春城 武庫坊

ほんわかと温い風吹く鈍行車
新語辞典がすぐ古くなる世の流れ
悲劇にもならず二人の五十年
近道が早く行けると限らない
離まつりすむとこけしが喋り出す

尼崎市 春城 年代

ストレスを溜めて三月もう半ば（眼底出血で螢光検査を受ける）
おそれたりみくびつたりの日が流れ
うす墨いろの暗いまなうら見開いて
向い風病院を出てまともなり
目をつむる行く方知れぬ旅の果て

島根県 松本文子

乗る人あり降りる人あり病院前
義理チョコが欲しかったとは知らなんだ
パスポート次の出番を考える
怨み節ばかり唄っている女
指折りかぞえて燈台の句碑が待つ

岡山市 川端 柳子

刻まれた歲月誰にもゆずれない
望遠鏡遠くばかりをみる安堵
こわれた時計の居場所を探す面倒見
どこでみた夢だか古日記はしゃべり
そして今日も流れて止まぬ旅心

島根県 西村 早苗

胸ボタンかけ違えてるすれ違い
淋しさをかくすジョッキの飲みっぷり
あたり前のように女房も風邪をひき
いずれ消される伝言板は女文字
絵ハガキも五月の絵なら旅に出す

鳥取市 両川 洋々

罪一つ一つ十字架から外す
飢餓の子の涙袋は空っぽさ
農政コロコロいつまで稲を泣かすのか
骨っぽい男に賄賂など効かぬ
汽車は空でもああ枕木よ泣くでない

大阪府 本間 満津子

自分にあまい私を叱る独り言
してもせんでもだいじな一日減ってゆく
ミス赦す大きな声に救われる
雑音は聞かぬすこし遠い耳
ええ恰好したらあちこち痛み出し

京都市 松川芳子

足元を見つめて歩幅確かなり
納得がゆくまでプランコ漕いでみる
人生の記録がらくたまた溜まる
また一つ不義理重ねて病んでいる
やっぱり女辛抱強いなと思ひ

堺市 楊井二南

細ズボンさぞかし脚も細からう
メモ書きで良いから日記続けたい
逮捕とは言うが手縛る訳で無い
冗談口たたき馴れてる世間擦れ
手作りの雛には描かぬ目鼻だち

西宮市 奥田みつ子

しだれ桜うなだれてなお美しき
トイレ拭く姑とおなじ拭き方で
幸せの身にも占うものがある
体ごとぶつけるものが欲しくなる
臆病な人だと思ふ歯科の椅子

姫路市 大原葉香

齒列矯正少女は夢を賭けている
開発に山彦さえもそっぽ向く
脳軟化凝結剤を飲もうかな
一生をピエロで終る幸せよ
痛恨の一球となる結果論

奈良市 天正千梢

明日の苦勞持ち寄る集い茶をすすり
快適に暮らして居ます酒の量
矢ガモがかわいそうだと焼き鳥屋
「参考までに」と下じきかしてくれ
自分を騙すたつぷり涙出し

京都市 都倉求芽

春の庭へやさしいやさしい天の如露
子や孫が来るから三回忌と雛飾り
カタカナが消化できずにとばし読み
てのひらの二三の筋にしばらく
頭あげたら女房はまだ拌んでる

岡山市 二宗吟平

酔い止めを飲んで七福神詣
説教を聞くストープをとり囲み
接待のお茶で腹から暖をとり
訪問販売人情ずくめで置いて去に
イエスノーきっぱり言えぬ気の弱さ

米子市 小西雄々

パチンコの調子鴉は見えて回る
鮮やかに胸に棲む人まだ老いず
煩わし他人も同じこと祈る
過去帳の予定の場所を逃げだそう
パートでは金庫に入れる暇がない

米子市 石垣花子

歩け歩けと未練がましい万歩計

石段の中途で年を思い知り

裏側の炎を小面は悟らせぬ

一つだけ納まり切れぬ玩具箱

一羽ずつ巣立たせ巣箱広くなり

米子市 田中亜弥

風船のヒントが音もなく漏れる

飽食の生命線がちぢみだす

置き去りの枕へ慕う児が二人

主婦の顔でこと細やかに主張する

うれしくて開きっぱなしの顔になる

米子市 菅井とも子

沈丁花 亡母の笑顔を思い出す

大山の見える墓場を買っておく

何時かはゆく墓場二人で掃除する

城山ではじめて逢ったうちの人

蓮池の下の闘志は見ぬけない

米子市 青戸田鶴

小さい雛出して一人の雛まつり

明日をまた軽い気持で待っている

窯出しの陶器の響きあう言葉

無造作にめくってしまふ日めくりよ

烈しい色少なくなった私の画布

米子市 寺沢みどり

鉢植えの梅ちらほらと部屋も春

霧晴れてぽっかり湖面あらわれた

あやまちを包む風呂敷さがしてる

ころよい寝息枕に聞かせよう

一ランク下げて生き生きした生活

米子市 政岡日枝子

いい年齢だから少し小言は控えよう

騙されやすいものが疑似餌に寄ってくる

兄弟だから兄の涙がよくわかる

ひたひたとサーカス小屋がたたまれる

首領にはふれずに鶴の恩がえし

米子市 澤田千春

焼け落ちる音が耳底はなれない

折り返し点ここから軽い靴をはく

私は心にいつも海をもつ

地藏さんのよだれかけにも春の色

灯を消せば想ひひたひた寄せてくる

米子市 中井ゆき

春一番とんでもない時吹いて来た

シャガールの窓から見える青い空

よもぎつむ母の想い出拾うよう

ろう梅が昼の銀河になって咲く

失意の日母のことばがよみがえる

青森県 田中 叶

宿明けの時によく遭う霊柩車

友達に火災報知器押した人

寝る前に食べると僕のようになる

誰もいないところを妻と歩いてる

タクシー代女が払い別れたり

黒石市 相馬 一花

七掛けでいつもヤングの仲間入り

先生をゆで蛸にする謝恩会

通リゃんせエンマも好きな袖の下

会社では嬬天下を匂わせぬ

裏口の鍵はあなたにだけ上げる

十和田市 斉藤 昴

白鳥も争うことがあるらしく

プロポーズ昔りんごの樹の下で

馬術部は馬に頬擦りして卒業

誉めようの上手に種が貰われる

酒蔵に酒を作るも芸術や

十和田市 阿部 進

のんびりとしての暇ない趣味多彩

かばい合いゆつくりのぼる夫婦坂

欲しいもの買った積りで小金ため

巢立たせてやっと心にゆとりでき

精いっぱい生きた証はすわりだこ

弘前市 村田 善保

綻びた蕾の動悸聴いている

匿名のペン先なんと良く滑る

哲学を持たない風は風となる

正論を吐けば空気も重くなる

点字読む指に心の灯を点す

弘前市 真喜内 實

ふるさとの雪灯籠の迷い道

にくまれて雪知らぬ間に消えて行く

早春のエアポケットで友と呑む

入学が親孝行に一区切り

小鳥来て春だ春だと翔びまわる

弘前市 小寺 花峯

反撃の妻に私は一寸法師

プライドの鼻が拾えぬ一円貨

散り際を椿から貰っている見事

剃刀が視線に入り目をつむる

全員が揃った今日のめでたい灯

弘前市 肥後 和香子

絹ごしのやさしさよりもがんどき

ガリック ペツパー次々足す会話

賞味期間過ぎてうまみを持つ男

手を抜かぬ良妻悪妻手本とす

猫までがモンローウォークしてる春

弘前市 佐治千加子

天晴れて千体仏となる樹氷
街角の批判の風を肩でさる
湧き水の無音無限の愛ならむ
暖冬で凍らぬ滝の水しぶき
脱皮する蛇のころを抱いて逢う

五所川原市 對馬一閃

会者定離無縁仏は雪の中
口軽な男が部下にいて疲れ
後退を知らぬ男の向う傷
古曆あの日の罰はうけている
人生の岐路で聖書を読みあさる

和歌山市 堀端三男

押しくら饅頭とかくめんどい民主主義
行く当てはないけど嬉し日本晴れ
偶然の出会い詠りが先に出る
人形は笑ったままでほっとかれ
そのうちにカードで命買えるかも

海南市 三宅保州

自慢したときから値打ち下がります
演じ切ることがピエロの生きる道
時刻表に僕の終着駅がない
ペアルック男の貌が締まらない
無人島へ携帯電話持って行く

和歌山市 牛尾緑良

明日からの話へ妻も乗ってくれ
父だとか子だとか言って酌ぎにくる
祈りもう見透かされてる神の前
みんな来い大きな春をつくろうよ
長寿箸だって 少々早すぎる

和歌山市 内芝登志代

歳甲斐もなくハンサムへふりかえり
餅投げへ美女も本性丸出しに
眠られぬ夜南無阿弥陀仏くりかえし
何のためエスカレーター駆け上る
身を焦がす想いを抱いて白椿

和歌山市 木本朱夏

すり切れた過去巻き戻す虎落笛
裏切った小指が疼くなごり雪
言い勝ってここに風の吹く日なり
呼び鈴を押すためらいとときめきと
友達の主人男と思わない

和歌山市 桜井千秀

ユーモアで切り返されて拍子抜け
身に合わぬものはさっさと脱げばよい
一からの出直しなんて大袈裟だ
受け止めた傷の深さで春炬燵
占いで楽しい明日垣間見る

和歌山市 福井桂香

沈丁花腹の白さも見せるなり

五色豆ころ変りはないつもり

おしゃべりなタオルを吊す美容室

湯上りにポン あなたの抜くビール

山笑うたびに泣きます花粉症

和歌山市 内田結実

妬まれるほど幸せに見えますか

溺れてはならないひとの手が温い

饒舌な雀にもある物思い

秘めごとは聞かないふりのまねき猫

駆落ちのインコに理由は聞かぬまま

有田市 松井かなめ

価値観が合い御婚約した皇室家

ラブレターの代筆吾が意一寸いれ

風が泣き人小走りに冬木立

指荒れた農婦ミンクがよく似合う

退院に贈る三三七拍子

和歌山市 細川稚代

女から女へ届く難あられ

蜜蜂の行方は聞かぬことにする

足袋洗う昨日のことがねんごろに

触れ合いがほしくてスリーブ念入りに

琴線にふれる一言抱きしめる

和歌山県 小倉アサ

三寒四温こはぜ一つが消えたまま

太陽をたまに疑う素手素足

働き蜂に告げぬドラマがたとある

慰めてあげよう海も風いでいる

ほどほどのほどが手足に絡みつく

大和高田市 岸本豊平次

心の痛み分かる人をと皇太子

喉元を過ぎたか戦禍忘れかけ

子と離れ妻に逝かれた同窓誌

桃の花添えてばあさん変り雛

この堀で環濠聚落敵防ぎ

姫路市 人見翠記

百二歳生活しつつ学びつつ大往生(百二歳の翁逝く)

偲ぶ会思い出は只徳高きことのみに

見るもよし見ざるもよしと我は咲く

我の育てし水仙の香を満喫す

春日射し花壇の花芽は背伸びする

箕面市 坪田紅葉

満足と思えないけど明日に夢

行ける時行ってよかった春の旅

病む人と目と目で話す走馬灯

お人好しとずばり言われて笑ってた

老人と思わないのは自分だけ

高石市 浅野 房子

日日好日 自己満足をする余生
ときめきもどきどきも無い都市砂漠
身内から飛んだ吹矢はより深く
賞味期限切れたまんじゅう食べている
一応は妥協しておく休火山

寝屋川市 岸 野 あやめ

ハネムーン済んだら強い妻になる
ドクターの指の温い日冷たい日
点滴がや々と済んだよりンゴ剥く
紅梅の姿は源氏物語
お荷物が荷物にならぬ愛の枷

宝塚市 丸 山 よし津

これからも生き生き生きる花ごよみ
歓声と走る木馬に駅が無い
不意にあふれて涙は熱いものと知る
たんぽぽの黄が咲いていた駐車場
忘却と言う事あって救われる

出雲市 金 村 青 湖

少年の瞳に限りなく海ひらく
春の陽の甘え許さぬ日本海
四季の海へ漁師はならぬ好き嫌い
旅の夜の潮騒 窓へ来る過情
亡父亡母の翳がたゆとう渚の灯

出雲市 園 山 多賀子

只会釈交わす目の位置だけの人
結局は画餅に過ぎぬ浅い夢
几帳面過ぎて呆けると言う怖さ
人を指す指が傷つく自己嫌悪
造反の手中切り札持っている

出雲市 吉 岡 きみえ

許そうか許すまいか春一番
大臣が出た街肩身のせまい街
人生はいろいろあつて石やきいも
秀才を育てた自信小うるさい
横糸が邪険にからむ縞模様

出雲市 久 谷 まこと

後ろから付かず離れず他人の影
人一倍欲があるから汗もかく
日脚のび風の噂もさまざまに
行きずりの会釈田舎の春素直
言い分はそれぞれあつて無言劇

出雲市 板 垣 草 丘

ここで飲みここで語れと句碑が立ち(日御碕 三句)
灯台の雲の流れを見て飽かず
ウミネコが雛抱く頃に会うえにし
デリケートほめて笑われ花粉症
彼岸まで打てた畑で機嫌よい

出雲市 伊藤 寿美

電話口から孫のハーモニカ聞かされる

黄梅が咲き内定を取り消され

裏切った人がスボット浴びている

櫛の歯が折れしのび逢う日の惑い

花売りの木の芽花の芽島訛り

出雲市 岸 桂子

姑危篤すでにカラスは鳴いていた(姑の死)

断腸の思いとぎれた脈の音

九十四歳苦難のドラマ今終る

しろじろと短い通夜が明けて来る

善人の姑の柩は軽かった

唐津市 田口 虹汀

義理堅く街練り歩く労働歌

鵲の巢に九電の頭痛薬

釈尊の徳が煎じてある甘茶

リモコン等出来て足腰弱くなり

来る所へ来たなと牛の白い息

唐津市 仁部 四郎

モナリザに負けぬ微笑の辻仏

お父ちゃんが持つて待つてる綿帽子

卒業の夜に初耳父の疵

紋どころそのまま社名をカタカナに

肩書きが取れて判った風の向き

唐津市 山口 高明

お見舞の女将へ妻の目が光る

顔色を読まれて妻に茶をつがれ

百獣の王もわたしの愛に負け

獄舎から見ても十五夜まんまるい

捜してる物は額の老眼鏡

岸和田市 福浦 勝晴

春の海朝のオゾンを吸いに行く

申告を済ませのんびりパチンコ屋

ネオン街火花を散らす嘘と嘘

終電車妻にはすまぬわが家の灯

慰安婦に激励されて生き残り(大戦回顧)

岸和田市 高須賀 金太

定年後は熱い目の湯につかりたい

帯に短し息子の嫁の候補たち

新緑のように輝けたらいいな

電気ガス円高差益吐きなさい

不況風吸うても泳ぐ鯉のぼり

貝塚市 行天 千代

カーテンを花柄に替え気が晴れる

口下手が人の話を聞くばかり

皇室のおめでたに遇える老いの幸

ペランダでバラもおねぎも芽を出して

日溜りは老いの小言の捨てどころ

岸和田市 島崎 富志子

六月九日あやかり族が多くいる
我田引水己が器量をさげている
ぐつときた言葉三段腹で受け
腰痛に歯痛胃痛と敵が増え
友の計で順番一つ繰り上がり

岸和田市 古野 ひで

もたもたの蜘蛛掃除機に吸込まれ
好きだからすべてを知っておきたいの
人間の弱いところをつくお金
目を病んで優しい心になってゆく
ライバルへつくり笑いをしてみたい

岸和田市 原 さよ子

合格の孫へ通帳カラになる
コンサートの余韻を抱いてレモンティー
お水取り今年もやっぱり雪が舞う
ロッキングチェアで優雅にゆれてみる
磨崖仏もやさしく濡らす春の雨

八尾市 宮崎 シマ子

二度と買わぬ悪い実のなる売言葉
老人会賢い知恵をもちてくる
男の気性男のすること気に入らず
私が泣くと仏壇の母も泣く
愚弟賢兄八十歳になろうとも

八尾市 山下 美津留

競り勝って反省会の席に居る
合格をしたなと思う洒落を聞く
豪邸をゴキブリそつと覗いてる
摩訶般若自然に帰る滝に立つ
天才へまわりの風が冷た過ぎ

八尾市 高杉 千歩

公園で話し足りずにモカの店
いま置いたところがないと呆けはじめ
計がつづく互いに優しくなっている
検査まち病人じゃない紅をひく
約束の場所を忘れたカナリやよ

八尾市 吉村 一風

かろやかに絵筆も走る雲ひとつ
忘れ物とりに来たのかもどり寒
横切った猫を眼で追う孫の守り
春くれる見知らぬ人のニューモード
花便り母は帰れと言うてくれ

竹原市 三宅 不朽

距離を置く手順のひとつ誉めておく
睨まれたような気もする望遠鏡
落ちついたらしい花が生けてある
床ばなれしばし掌にあり桜餅
菜の花のはるかはあるかある秘密

竹原市 森井 菁居

光陰の早さよ嫁ぐ日が迫る
幸福駅行の切符を親も買う

ハネムーンはアメリカはぐれないように

父親の役目を果たすモーニング

お祝儀を出せばタンス屋素直なり

竹原市 岡本 清水

笑顔には魔力と仇の裏表

ないはずの意外にあつた古貯金

粗食した終戦頃の健康さ

言いたい事八分に止めて丸く生き

神仏にすべてを委ね生きる幸

竹原市 岩本 笑子

花曇り卒業式の涙かな

悪いこととしてませんけど税務署よ

雨の日は雨の日なりの洗い物

追い越しておいて母さん小さいね

小手毬も昔話もゆれている

羽曳野市 田中 透太

はんなりの言葉も添える京料理

ときどきは逢うてゐるらしい女傘

春爛漫 女盛りを競い合う

一度では済まない金の要る話

脇役が主役になった酒の席

静岡県 藺田 漠 脊

派手にやる夫婦喧嘩に愛がある

停年後やつと覚えた遊び方

成功者卒業式に招かれる

きっぱりと断わる返事妻がする

小便小僧アベックの痴話みんな聞く

大阪市 藤田 頂留子

地球儀の歴史いずこも戦好き

自分だと誰も言わない雨男

なぜなぜと親を困らす知識欲

マンションにいわし見たいな鯉のぼり

初辰のくじで客引く商店街

寝屋川市 柴田 英壬子

魚の目の錐がのこっている痛み

聞くだけは聞いてと相談持ちかける

両隣 情けが厚いお墓だナ

杖かりてあと一息の花の坂(月ヶ瀬の梅)

心臓がむずかる気圧ミリバール

大阪市 神夏磯 典子

風邪ひかずありがとう冬を片づける

入り口はすいすい出口で行き詰まる

少々の風に負けない血統書

姑の悟りの裏にある歴史

旨い話へのる人相をしています

岡山県 小林 妻子

ニコヨンと呼んでもいいよ太い指
腰 脛 オイル交換する頃だ
パチンコもゴルフも知らず呆け始め
炬燵から抜け出て見れば桜咲く
定型論そろそろ元の鞘がいい

岡山県 矢内 寿恵子

一行詩人生ドラマ我が歴史
人も水車もまわりはじめた春の彩
美しい過去美しく抱く未練
芒野に人間哀史広がりぬ
女の業梳ききれませぬツゲの櫛

尼崎市 田中 薫

限りあるいのちが今日も昏れてゆく
順風に乘れぬ男がひげを剃る
垢じみた言葉が積んである机
千年の風の声聞く磨崖仏
はぐれ雲 母逝きてより五十年

鳥取県 森山 盛桜

言外を匂わせておく月の下
野に生きて天にも地にも物申す
鬼に角贈って胃痛強くなる
正夢が見たくて解熱剤を飲む
月想うそんな一夜の下足番

奈良県 長谷川 春蘭

ふところ手あえて無策に甘んずる
凍解の径たしかむ老いの杖
早春の庭にときめく鼓動あり
愚痴の無き余生のひとつ日春苺
心で聴く風鐸の音春を待つ

今治市 野村 京子

割り切れぬ端数を許す句読点
正直な答えをくれる鏡持つ
合わせ鏡古い火種が住んでいる
逃げたとして釈迦の手のひらだけのこと
葉ざくらは人の情けに飢えている

富田林市 片岡 智恵子

あせるなと風が耳打ちしてくれる
詫びずともいつか許している老姉妹
冬の命真綿につつま風邪を引き
シートベルト少し緩めて行く旅路
元氣な金魚今日も納得して眠る

広島県 藤解 静風

文芸の michi を甘えてならぬなり
焦るまい月が上がれば潮満ちる
世を捨てた訳ではないが藪椿
気の抜けた風船玉の一人留守
向い合う席で天気しか言えず

鳥取県 土橋 はるお

水虫飼つて社長の足も忙しい
母からの手紙の釘は錆びかさぬ
ロボットも名刺交換会にいる
不景氣を他所に変わらぬゴミの山
恋風にすみれの花がゆれている

鳥取県 林 露 杖

ふる里の峰にオレンジ色の月
自分史の書けぬ件に突き当り
死神が覗き舌打ちして去ぬる
健啖に老妻が二杯目加減する
明鏡止水献金ごそつと証券に

岡山県 山 本 玉 恵

八起き目で少々難あり心電図
手枷まだゆるめぬ姑の束ね髪
一すじの手相に夢を追いつづけ
のみ込んだ嘘が無口にしてしまふ
生き上手仮面一つの使い分け

大阪府 上 田 柳 影

這い這いの孫とこつんして楽し
合格の声が半分泣く電話
相談は些細飲み口実にして佗し
起きてきた朝の娘に眉がない
もう櫛のお世話にならぬ頭です

吹田市 栗 谷 春 子

思うこと思いどおりになり過ぎる
鏡から受ける訓えは手きびしい
彌生子の老いてかしこし学びたし
名園の梢は余裕ある動き
今日ひと日寒い寒いと暮れました

吹田市 山 本 希 久 子

行間に父の声あり古日記
木の芽どき最前線で病んでいる
髪型を変えてみました春うらら
燃えつきて女の髪が白くなる
波高し活字の海を泳ぐ身に

東大阪府 崎 山 美 子

無造作な包みでへそくりくれた母
札束の包みに良心ゆれている
コラムから世相をのぞく老いの朝
円高の噂パートの妻からも
銀世界せせらぎだけがひびく村

鳥取県 江 原 と み お

竜巻きの尻尾に左右される運
気がかりなのはお隣の高笑い
信楽の狸と肚のさぐり合い
あれはきつと聞かせるための独り言
一攫千金そそのかすのは海だ

姫路市 丁坪サワ子

想念の渦の中で溺れそう

空転国会血税費うもほどほどに

世帯持つ息子へ壁が少し出来

コードレス風呂場で孫の話す声

税務署から老齡寡婦へ呼出しが

今治市 越智一水

畑打てば土に声あるくだけよう

耕して土の香がするほどに晴れ

どこまでも誘惑せよと春の宵

草色の雨へ傘などささず出る

落ちつかぬ時は風呂屋の風呂に行く

岡山県 荻野 鮫虎狼

内祝済んで内定取消され

虫籠の中で飛躍を試みる

モンタージュの方が若干男前

午前様妻の寢息は確かなり

遠慮する事が取柄で五十年

西条市 片上明水

鼻風邪のことを長々書くカルテ

ポロシャツの赤着て春に気が疲れ

まんざらでない酒に遇う山の宿

詩人にはなれぬがすぐに血が騒ぐ

お茶漬は周りが焦る音で食べ

堺市 黒田真砂

時季くれば花は花咲き実ほみのる

胸にぐさりささる言葉や冬落葉

着ぶくれて落葉はくのも日課なり

月見れば月に花見れば花に亡母恋し

事々に亡母想い出す茶の間の灯

岡山市 井上柳五郎

悲しみへ忘却という神の慈悲

泥かぶりつつ覚えた処世術

すくすくと元気に育つこぼれ種

子離れしベット飼うとてバート出る

ふところに切札深くいれておき

大阪市 北山悟郎

転んだら起きよとタルマに睨まれる

美しい別れに涙こらえてる

人生を一口に言えるはかなきよ

底抜けの笑いが呆けの顔となる

危険物背中合わせに人が住み

鳥取県 津村八重子

夢を追う私の旅はまだ続く

気の強い姑にもあった涙つぼ

肩書きは抜いて綿菓子食べている

消すものは消して一から出なおそう

似た者夫婦いまだうだが上がらない

鳥取県 羽津川 公乃

春眠の頭なかなか始動せぬ
福運を拾うに腰が高すぎる
まっ白な骨成仏と見届ける
白髪の似合う老女に憧れる
郷愁に菜の花畑玉子焼

広島県 田村 新造

脱走の戦友がゲリラで攻めてくる (興安嶺逃亡記)

階級順に銃殺刑になる不安
シベリアへ戻る噂に怯え切り
里程千キロ逃げねば生きる道はなし
軍服を売って購う豚の肉

羽曳野市 吉川 寿美

忙中閑ひと刻狂う桜花の下
曖昧な笑いでここは逃げておく
肚割って話して友に背かれる
分身の眼鏡がいつも行方不明
お湯の出る蛇口に慣れてゆく恐さ

鳥取市 春木 圭一郎

君の胸空っぽだとは知らなんだ
空っぽの財布拾えば届け出る
火の車うちへめ組よ来てほしい
僕と妻ケンカもするがいいコンビ
探るのはよせよ私も傷がある

伊丹市 山崎 君子

春の彩絵皿多彩にうめてゆく
ついて来た小犬がくれた暇つぶし
卒業式老婆も終る孫の守り
追伸に寒餅送れと書いてある
きれいい好き自称掃除魔母老いず

大阪府 榎山 隆

さくら満開ころの凍る死もあらん
さくら咲く昔兵舎のあったとこ
だんだんと勝負は捨てる父の背な
営々と矢じり城郭月の石
うす造り先ずは伊万里の皿をほめ

尼崎市 奥山 美智子

誰彼と人なつかしむ花便り
一合の酒で足ります春の宵
好きですと猫に言わせたことにする
旅だよりポストは春の音たてる
待ちわびた返事がこない春の冷え

大阪市 板東 倫子

孝養は五〇%OFFの羽根ぶとん
老ボスが金塊抱く大魔窟
空に海に男ざかりが散った事故
半世紀へだてた孫と口喧嘩
天長節があつて地久節もあつた

豊中市 吉田 あずき

姫路市 中塚 遊峰

脱ぎ捨てた上衣こんなに軽い肩
ちぐはぐをつなぎ合わせる母の糸
靴すべり今日の答を持て余す
真相を知りたがりやのねじ回し
孤独感 南京豆がやめられず

大阪市 榊井 落児

雪祭り旅人は皆着膨れて
春の午後手持ち無沙汰な象の鼻
ぶきっちょな男結びも愛である
春うらら裸婦像無毛たちつくす
老妻の重ね返事が胃にたまる

藤井寺市 福元 みのる

心では決めかねたのか旅に出る
洋薬と漢薬が胃で渡り合い
政治改革言葉も声も錆びてくる
七光だけでは後継者になれぬ
モーニング吉より凶の用が増え

松山市 谷 真風

かっぱれを見て踊りたくなってきた
男なり平気な顔をして居よう
ウーロン茶をビールのように飲んで足る
老人の胸もふくらむ紅椿
心臓はまだ動いている句も出来る

誕生日入院となる古希の新春
病室のベッド荒野をかけめぐる
あれやこれ皆因縁の仕業かと
台本のない人生の過去を悔い
老いてなお父知らぬ息子の膳作る

大阪市 中西 兼治郎

観光バス今日は葬儀の人を乗せ
学歴は問わずパチンコ屋の募集
蛇の目傘お芝居だけに使う傘
神天にいますとクリスチャン思い
クイズ狂ついにクイズで詐欺に会い

鳥取市 西原 艶子

みかん色ありて温もる冬の部屋
月が見ているから涙拭いておく
目覚めるとふつと哀しくなってくる
一過性の過熱であれば冷めもする
一鉢のいちご育ててみたくなる

島根県 石飛 水煙

貧乏が幸い子供よく育ち
路地裏に内助に輝く人がいた
悪代官国家を論じ金をため
こと欠かぬニュースにドラマ見ることし
揺れ動く世界へ変らぬ陽がのぼる

遺産分け仏の嫌な奴も来る

大阪市 神保拓生

ストレスも洗ってほしい洗濯機

テレパシー持つてる妻に困ります

うちの孫何時も熱出す休診日

竹原市 時広一路

もう一枚頁を繰れば僕の章

拍手しただけです五人目の祝辞

寝て待てば薬も効いてくれるだろ

一合で済むから休肝日は要らぬ

和歌山市 若宮武雄

政界はどうであろうと咲く桜

蝶の過去などは問わない春の風

そう言えばまともな性の顔でない

不退転の決意で何もせぬ総理

宇部市 平田実男

旧かなで通す俳句の自己過信

春闘もボーナスもない鉄を振る

手八丁口八丁が手から老い

自分より娘の句が抜けたのが嬉し

大田市 藤田軒太楼

すんなりと運んだけれど運がない

傷心の出口を神があけてくれ

古写真八十路の坂を登り着き

皆唄うなかで音痴は独り酌む

自分史を書くには紙が白すぎる

結論を急げと回る換気扇

逃げて行く若さを追うてくたびれる

あきらめか悟りか妻のひとり言

奈良県 中原比呂志

サクラ咲くどころか不況卒業生

エイズ予防雄しべ雌しべでは遅い

疑われそうな姿勢で押し込まれ

おい押すなニンニク香水サロンパス

神戸市 山口美穂

雪がやさしくやさしく枯野を化粧する

春はそこまでそこまで来てますチューリップ

ジャンケンポンあいこで次もグーを出す

思うことあり髪形変えて笑顔する

岸和田市 岩佐ダン吉

陽に干した布団小さな母がいる

白兵戦しばらく見てることにする

せまりくる飢餓は明日の日本かも

熱弁の妻がパートに出ると言う

寝屋川市 平松かすみ

新車ですにこに見せに娘婿

じいちゃんもばあちゃんも兎のダンス

透視術あれば愉快な満員車

古惚けた表札だから親しまれ

大阪市 寺井・東雲

富士宮市 渥美弧秀

旧姓忘れラブレターの主私とは
眼鏡掛け眼鏡を探すボケ始め

穴の前ネズミも入歯ほしくなり

初任地の雪の深さに肌締まる

西宮市 秋元てる

古都京都滲む高雅と底冷えと

親切の怖さ「お年齢だから代る」

捨て切れぬもの皆纏い動かれぬ

おせん立てもう子はそれの先を行き

堺市 柿花紀美女

老犬と日溜り追って四温の日

世の動きどうあれ大地春の音

面つけぬ素顔で生きるゆとり持つ

娘嫁ぎ嫁来て娘また出来る

岡山市 花田たけ志

共白髪趣味の歩幅も揃い出し

食うだけの年金杖に老いの坂

入院もうかつに出来ぬ取り違え

近頃の不行儀嘆くひなまつり

鳥取県 山根八重

捨て石も生れながらの意地で生き

性格について行けないすきま風

耳よりな話をきいた落ち椿

紅椿汽笛の人を待ちつづけ

寝たきりの姉へ手紙の字がうるむ

思春期の孫の扉は春暮色

高校が楽しいと言う孫の文

春うらら回転扉軽やかに

大阪市 松尾柳右子

善人が寄つてもめてる他人事

鯉のほり買う約束の老夫婦

気に入りの服に背すじ伸びている

掌を合わす心に鬼も同居して

河内長野市 植村喜代

お雛様私の歳がまた増える

掌を返したように離れ出し

胸張つてときどき疵を案じてる

困ったものとかぬものはなおほしい

西宮市 瀬尾六郎太

チェコ プラハ友よ分割胸痛む

寒戾り金閣銀閣冬景色

青天の霹靂すらり書けますか

杜に映ゆ内外宮の衣がえ

出雲市 石倉芙佐子

春のゆき騙され上手泣き上手

陽炎にほんとの事はよう言えぬ

しばらくは泳がせておく奴風

逆境に強い貴方と知るほどに

阪南市 坂口 公子

かと言って誰も来ないと口惜しがり
沈黙の中で葛藤する負い目
案の定からっぽだった壺の中
洋上に置く眩しさといとしさと

高知市 北川 竹萌

自家菜園葱は次第に春の色
雨上がる豌豆杖を欲しい顔
顔出して欲しいと人権保護委員
庭造り妻に昼飯急かされる

島根県 藤原 鈴江

朝夢やそは青春の続きかも
苦しさも甘美に思う過去の日々
心機一転身構えて立ちあがり
幸不幸分ける北風南風

岸和田市 芳地 狸村

嫁の荷に二つも出会う村の道(水間路を歩いて二句)
石像の大きな布袋のある旧家
変化球投げて相手の様子見る
好きだから素直にハイと返事する

和歌山市 宮口 克子

おっとっと大事なひとのテレコール
メリットのない恋なんて言うけれど
組板に男をのせて姦しい
趣味のない人にも有休奨励日

寝屋川市 堀江 光子

うっかりと渡したメモが切札に
名画展光と影に時忘れ
白酒をとろりと注いで女の輪
牡丹見る小さな旅は母の為

羽咋市 三宅 ろ亭

唐突の論理は田舎になじまない
新聞よ仮名文字君も判るかね
世の中はどう変ろうと四季めぐる
新入があつて職場の空気換え

島根県 高野 律子

夢を盛るわたしの皿が小さくなる
親一人子一人別れの春が来た
一本の糸も切れない父の風
思想など持たず今日も花を切る

堺市 一瀬 福一

女嫌いと言った男に鈴をつけ
雪山を引っ張り合って行くリフト
汽車過ぎるだけの村なり桃の里
始めからあかんと思う子のカルテ

河内長野市 井上 喜醉

頂上で喉鳴りしてる缶ビール
飾り棚中身は水のナポレオン
永久に残る傷あと邪魔な過去
足元が見えぬ天狗の嫌な鼻

諫早市

原田メイシユン

米子市

新

正子

ヨチヨチの孫と遊んで今日も暮れ
旅に出て女房の愛がよくわかり
消費税喉もと過ぎて忘れられ
家事一切嫁にゆだねて丸くなり

倉吉市

野中御前

香川県

池内かおり

元氣よい嫁で半端なコップ増え
幕が開き七十歳のおてもやん
呵呵大笑祖父の入歯が心配だ
竹踏んで今夜のおかず考える

和泉市

西岡洛酔

米子市

白根ふみ

こんな世もあったのかいなと温泉に浸り
老いらくの旅へいで湯は肌にしみ
雇用保険そんなお世話の昨日今日
定退をまだ職安へ意気を売り

和泉市

岡井やすお

伊丹市

梅田宣司

鶯は餅のことかと団地の子
はよゆけと言わんばかりの雛納め
殿様の所得隠しに指南番

政治家も神ならぬ身よお金欲し

福岡県

横地正好

京都市

山海友熙

脈ありと感じセールス腰をかけ
地球保護高速道路で免待ち
自分史に消火の賞を入れ飾る
組替えの四月だPTAの波

時々夫婦で交わす博多弁
ほんとうに好きかと言えばそんなこと
美人だろうなああのパラソルの品のよさ
大安も仏滅もない手術台
つくばいに花忘れられ氷張る
友やよし甘酒に酔い雛祭り
一杯のコーヒー茶の間のリズムから
せちがらさ夫の釣り籠待つ夕餉

人生はもう飽きたという米寿

仙台市 川村 映輝

立寄れと言われ寄つたらそつけない

テレビからもせきが洩れてる流行風邪

鷗の子孫北方領土で待ちあぐみ

八尾市 鶴声庵 覚然坊

シヨックの醒めるを待てば泣き崩れ

金溜めて義理人情にそつぽ向き

天職で猫背になったを悔いもせず

平凡な名所民話で人を呼び

島根県 石田 清泉

大雪の埋めた故郷なつかしむ

太り気味すぐ悪玉のせいにされ

ジョギングの交わす笑顔にある安堵

点滴へじつくりと見る妻の顔

茨木市 井上 森生

松明が揺れ天界の大散華

啓蟄の掟嫌いでふて寝する

老化かな日記に孫のことばかり

桜なら孤高悠然山桜

米子市 光井 玲子

パートでもいささかの自負持っている

ポシエットに鬼一匹を隠してる

余生なお明日の絵筆をととのえる

カラスにはとても適わぬ濡れ羽色

あかね雲明日はすなおになれそうな

西宮市 西口 いわゑ

紅椿落ちて人も人を振り向かせ

押し花と昔話をはずませる

あの時もミモザの花がゆれていた

米子市 金山 夕子

誰が食べる輸入産のコシヒカリ

考えた挙句に別の答だす

何に触れても響かない小休止

ポチの名義でポチの食費を預金する

倉敷市 田辺 灸六

金借りた夫婦平気で飯を食い

仏間から鉦の聞えぬ日が怖い

脱税をするほど金を儲けたい

主婦の座に昼寝の日課置いてある

静岡市 安本 晃授

沈黙の中で渦巻く見栄の風

精算をすれば零です掌を洗う

しがらみを組んで浮かべる他人舟

主導権わたすと踊る妻の腕

町田市 竹内 紫鏑

すいとんから機内食への国民史

英会話以外は婦唱夫随にて

ファックスで検査を急かす回診医

近づけば爺の百相警備服

大阪市 大野 武太

箕面市 中嶋 田実子

ときどきに阿呆陀羅經を口ずさむ
塗料屋の好好爺にもなりきれず
税理士のおでまし妻を呼んでくる
老いのしみ老妻気になることを言う

箕面市 椎江 清芳

無人駅ツバメ気楽に巣を作る
二次会を言い出す男先に酔い
鶴の恋ズームレンズが伸びて来る
酔った振りして本心を確かめる

守口市 結城 君子

一病を天のさずかりものとする
花と虫かかわり合いの深いこと
しやれこうべまで似ていようはらからは
いでゆへの道は水仙匂うみち

吹田市 茂見 よ志子

病室へ友の笑顔が春にする
マスクした目は千両の看護婦長
他人舟だから調子に乗ってやる
再会に達者が幸と手を握り

和歌山市 青枝 鉄治

白酒に酔うてこの娘もいける口
元肩書きを名刺に書いているピエロ
キッチンと言うから鯛おちつけず
何か言わねば濡れ衣を着せられる

予定表ワルツを踊る春四月
嬉しくて母はどっさり皿に盛る
磨いたら鏡に答え見えてくる
私を呑み込みそうな私の影

宝塚市 吉田 笑女

ゆっくりと独りで登る老いの坂
美しい亡母と見た日の夕茜
故郷が舞台のドラマに泣き笑い
もう済んだ事にはふれず毛糸あむ

岡山市 池田 半仙

万歩計躊躇している白い霜
黄塵が来たとか春も遠からず
娘の晴着母は笑顔で取る羨
啓蟄で出た虫百舌鳥に食べられる

岡山市 千原理 瑛

欲の無い手のすき間から幸もれる
白黒も言えずついには失語症
言い訳も出来ず寡黙の日々過ぐす
未練ではないが過去の話に触れたがる

鳥取県 さえき やえ

ゆれる中ほこりを持って米作る
父となる覚悟口ひげたてました
途切れたはなしつないでくれた春の雨
かたくなな心ひらいたふきのとう

不況風余剩人員という落葉

唐津市 浜本 義美

古湯の湯むかしを語る茂吉の碑
活造り胸びれ尾びれまだ死なぬ
花嫁に蛙も亀も浮いて見る

唐津市 浜本 ちよ

仏心には遠いがご先祖さま大事
てにをはにいつも小馬鹿にされており
おしゃれな友黒を上手に着こなして
足るを知る生活に若さ不満あり

出雲市 板垣 夢酔

言葉より文字から心動かされ
嘘つきの札がちらつくから迷い
おいしいと言わせた笑顔腹の虫
仁丹で禁煙努力しています

出雲市 竹治 ちかし

喜びも悲しみもあり季節は春
幸せな人が不幸を口にする
いつの間に親のプランに子が居ない
逆風を斜に受け自分の風とする

島根県 佐々木 鳳笙

末席の青年が持つ歎異抄
桃の花ちらほら恋の薄化粧
癌子告戸惑う葦になって揺れ
ごみの日を街の鳥は知っていた

梅の香に包まれている物思い

大阪市 町田 達子

舞い去りし鳥がとっても大きくて
爛漫の春へ蝙蝠話好き
遠来の客と連れ立つ南の灯

香川県 永峰 伽名子

緋毛氈にだぶる明治の亡母恋し
温暖な風土のどかな暮らしむき
三世代揃う車の初遠出
自画自讃墨の滲みは和紙のもの

和歌山県 西口 忠雄

あときは妻子も田畑もいらなんだ
開発のマンション花粉に取り巻かれ
口約束できぬところに無理がある
音痴です孫の子守りは顔でする

米子市 茂理 高代

陽が昇る何かが解けてゆくように
寒の水吞んで忍の字抱きしめる
春うらら私の魔性背き出す
九官鳥何か言ってる笑ってる

奈良市 米田 恭昌

電光石火横に座ったオバタリアン
お隣に美人が座って肩がこる
センセイの答弁神経逆なでる
名も実も捨てて自分をとり戻す

出雲市 小白金 房子

豊中市 滝北 博史

春耕へ夕陽がせかす牛の声
病院の片隅不安な顔が寄る
叱ったりほめたり今日も孫のもり
執念をもやす男の登り窯

鳥取県 鈴木 公弘

寒風に耐えてよかった海光る
お祝いが積もって消えぬ春の雪
嫁入りを遠巻きにして温まる
榮転の友を見送る戻り雪

岸和田市 三輪 通彦

寝込まれて判った妻のありがたみ
年金の付合い痛い熨斗袋
円高に喜ぶ企業泣く企業
内定を今頃破棄の企業エゴ

吹田市 瀬戸 まさよ

いつまでも二十三足す母の年齢
赤ちゃんに見つめられてるエレベーター
春が来るただそれだけで気も晴れる
フアッションも笑顔も計算して才女

鳥取県 乾 喜与志

土筆取り曾孫を連れて娘を連れて
風邪ひとつ引かず晩酌ついでいる
会席で御先祖さまを供養する
万歩計と歩いて老いの腰が冷え

運命を知るや知らずや但馬牛
靴音が揃いはじめた不しあわせ
黒蜜でとろてん食う西は西
前輪と後輪とどちらがえらい

大和郡山市 坊農 柳弘

葉桜の誘い眩しい鯉のぼり
桜花懷紙の中へ奈良旅情
惚れっぽい女大きなイヤリング
羽根布団有難迷惑喜寿達者

八尾市 片上 英一

空回りばかりしていたボクだった
信濃路へ否応なしのおらが蕎麦
熊の掌をおんな輪になり取り分ける
千日前ライスカレーが生きている

七尾市 松高 秀峰

透析の四月も過ぎてまだ不安
お寒いね浮世の義理の通夜の席
定年の軌道修正遅過ぎる
浮き世とは泣いて笑って電話口

鳥取市 岩原 喬水

健康は自分で磨く宝物
点滴で拾った命医者拌む
戦国の鳥でもないう矢がさきり
梅干しが新薬効かぬ風邪癒す

和歌山県 岩崎瑞穂

常連の支えて生きる細い腕
タグと言う魅力の裏の落し穴
居酒屋の顔は野心を捨てた雑魚
見え透いた嘘を真顔で聞くゆとり

香川県 工藤吟笑

仏頂面してても魅力のあった妻
アレコレの頼みで仏も疲れ果て
下見して置きたい三途の川あたり
観音が見れば不動も男前

吹田市 井上照子

付き添いの私へ温い見舞くる
初恋の彼と似ているご用きき
求められ握手のできる内が華
卒業と入学うれし赤字なる

唐津市 筒井朴竜

松栄え虹の松原防風林
竹林の雪折れ防ぎ笹を打つ
五番街角から地獄八丁目
暮れの街角に防犯灯点り

岸和田市 田中文時

定年の終着駅はガードマン
不景気かなんか知らんがパチンコ屋
パチンコ屋大出血は客の方
時間など気にせぬ犬と歩かされ

守口市 森川まさお

図書室は他人ばかりで音もせぬ
腕組みをしても雑念離れない
せわしない奴だと帰り際言われ
衰えた視力に瑣事が多過ぎる

箕面市 岩津ようじ

元教師だとすぐ分かる元教師
武器売って戦をさせてPKO
遣伝子という神さまの依怙蟲
善根は積まずに願う安楽死

岡山市 松本元江

沈丁花咲いた今年も春が来た
来年は還暦ですよおばあちゃん
一つ捨てひとつ拾うて身を清め
自己に住む魔性が仲々追い出せぬ

鳥取市 美田旋風

軽い嘘ついて丸味を出してみる
肩書きがつくと自分が消えて行く
但し書き多くて福祉見えて来ぬ
あの日から殿下すっかり見直した

鳥取市 西村黙光

嘘つきが何時も湯豆腐冷や奴
言葉尻鉤をかけにやってくる
酒やめる気あるが酒が止めさせぬ
善人と信じ込んでるでかい声

鳥取県 西川 和子

お隣もそのおとなりも孫の守り
花好きの亡姑に供える花が咲き
あやとりも上手になって来たコンビ
たいて見てても渡る自信はまだ出ない

香川県 新川 マサエ

無人駅座布団だけが温かい
手の温みしつかりもらう面会日
握る手があるから今日も逢いにゆく
洗っても土の香残る農繁期

鳥取県 乾 隆風

百姓がどうあれ榎は蒔くことに
逃げ腰になれずコルセットをはめる
如何せん死ぬまで雑魚の群れにいる
妻よりか嫁女の方にうけが良い

豊中市 辻川 慶子

雛壇がことさら光る内裏さま
（皇太子結婚お祝）
桃の花 弥生わたしの誕生日
春爛漫 花屋の前で立ちつくす
円周の中で潮どき見失う

藤井寺市 中島 志洋

のんびりと蟻を見ている無精髭
道ならぬ恋に燃えてるアマリリス
さよならが心に染みるリラの冷え
深水の美人に見せる蛇の目傘

倉吉市 淡路 ゆり子

心臓は誰にも負けぬ二重丸
ひな祭り幼なじみの計報知る
元氣になって花見の帯を撰っている
古里にわたしに馴染む水がある

茨木市 堀 良江

あの声はあの人そっと席はずす
かたくなに綿のふとんで寝ています
見舞う人も派手な咳してやってくる
行けるとこまで行こうやないか二人旅

岡山県 岩道 博友

確定申告不安な気持で席に着く
もう一度石仏見たいが花粉飛ぶ
凡人の脚で自転車漕いで春
我が本家何であつたか資料選る

和歌山市 山田 高夫

裸一貫失うものは何も無い
大ニュース与作に嫁が来るそうな
鉄面皮死の商人が武器を売る
減税を真に受けている四月馬鹿

和歌山市 北山 好笑

虚飾みな捨てて出直す白い足袋
親切に火種を吹きにやってくる
花だより誰かに甘えて見たい宵
ほつぽつと過去が出てくる小ひき出し

確實に命を取りに癌が来る

出雲市 小玉満江

メモ帳に困った事が書いてある

仏様愚痴はいわずに感謝する

中国へ想い遙かにめぐる春

鳥取県 石尾かつ乃

三度目の合格 外は雪だった

申告も入試も済んで春を待つ

ひかえめに申し添えよう好きですと

日は西にパートの嫁の乳が張る

鳥取市 武田帆雀

一瞬耳を疑う記事よおめでとう

名鑑にダンス踊った女がいる

葬三つ出して己の骨壺よ

近寄ってならぬ女とよく出逢う

出雲市 島祥庵

譲り合う心の裳が読めぬまま

自分史の完結篇を書いている

見ぬ振りが出来る仮面がほしくなる

疑いが晴れても春は未だ来ない

川西市 松本ただし

動物にとてまかなわぬ生きる知恵

八起き目に賭けても知れた力瘤

ポケットに何時も入れてる不発弾

好奇心少し変化がしたくなり

満腹になった人から帰り出す

芦屋市 黒田能子

借金のかたに孫達もらつとく

にこにこと忘れられてるお立替

千羽鶴病癒えても捨てられず

鳥取県 石谷美恵子

消防士五日制など言うのとれず

子にかけた虹がだんだん変化する

湯上りのビールへ季節などはない

悪筆の手紙ワープロより温い

鳥取県 黒田くに子

一しずく流したうわき波紋呼び

無我無想指が流れるピアノ線

移された花粉が受胎告知する

童謡のリズムで肩のこりはぐす

茨木市 藤井正雄

酒だけが味方と思う琥珀色

肩書が変わる名刺を妻に見せ

母と子の会話中断父帰る

ちぐはぐなおしやれで里の母が来る

黒石市 千葉風樹

松茸の孤独は王にされてから

そして春 子に渡す片道切符

いろいろあつて広子と月を見ています

火葬場へ作者不明の物語

愛憎の詩を残した青春譜

高知県 小澤 幸泉

亡母のうた聞えてますか山の里

トンネルを抜けて息子の去り姿

和歌山市 田中 輝子

言うともなしに去年と同じ花の下

ちぎれ雲気儘な旅をくり返し

和解した皿に好物盛り上げる

和歌山市 玉井 豊太

やぶ潜りやっぱりお化け住んでます

脈搏を測ってやって妻緩む

裕福でいろんな役をあてがわれ

大阪市 岡田 ふみ

八十に見えぬと言われ機嫌良い

札束で横面はつてくれないか

狡くても鳴くまで待った甲斐がある

大阪市 清水 利武

通り抜け金の小判がピーアール

婆さんが常会してる昼の銭湯

吊橋が揺れて地獄が下で待つ

池田市 岡本 吉太郎

遊園地機械ばかりがめだつ園

寺の鐘たえて久しい過疎の村

押さば押せでは仲間はずれされる世は

梅干し茶飲んで昨日の酔いを断つ

鳥取県 上田 俊路

約束を破ってからの失語症

屏風絵のからくりにある黒い金

鳥取県 幸家 單車

珍しいニュース雀が持つて寄る

嘘に花咲かせて噂撒き散らす

惜しい奴意外に脆く逝っちゃった

鳥取県 太田 幸枝

発言が過ぎれば白い眼に出合う

手の届く所に道具置いている

スッポンを食べても何の変化なく

鳥取市 前田 一枝

消防車車庫いっぱい待つ平和

春彼岸墓石泣かすみぞれ降る

下心探りに行って見抜かれる

出雲市 富田 蘭水

春の軸じつとみつめてなく心

時間勵行人には言わず守り抜く

卑劣だが酔ったふりしてさぐる肚

豊中市 三宅 つえ子

もの言わぬ父と炬燵で春を待つ

春の陽に和む白寿の背がまるい

通り抜け春の帽子は疲れぎみ

豊中市 井上直次

買物のついでに窺く出開帳
娘等を味方に妻の包圍網

どっちでも良いことだったと気付く朝

倉吉市 最上和枝

庭に來た鵜カメラが間に合わぬ

猫の声お前悲しい恋なのか

誕生日齡の上載せもうよそう

倉吉市 野口節子

影法師走り疲れていませんか

職深し腰の弁当まであせる

幸せな夜は地球が丸うなる

倉吉市 米田幸子

三浪にママはシナリオ塗り替える

愛したら土が返してくれました

陽だまりで昔むかしに花が咲く

島根県 加本義良

蜜柑剥く春がそこまで來た炬燵

赤く咲く希望を秘めている蕾

小吉でよし妻が三時でお茶にする

宝塚市 中田純次

梅一輪ここにも仏宿ってる

老化する五官の中で肥える舌

大臣も医者も坊主も若く見え

第5回 時の川柳交換川柳大会

とき 5月9日(日) 午前10時半開場

ところ 神戸市立福祉センター・婦人会館

(JR・高速神戸駅北へ徒歩5分)

講演 「大空のこころ」 橘高薫風

兼題と選者(各題2句)

「学」 赤井花城選

「胸」 寺尾百合子選

「列」 中井みきお選

「靴」 西田柳宏子選

「幅」 田中好啓選

「答」 片岡つとむ選

「貧」 小松原爽介選

特別課題 「男」(1句) 和田光代選

◎席題なし・欠席投句拝辞・正午締切

会費 1500円(記念品・昼食・発表誌呈)

表彰 知事賞・市長賞ほか多数

兼題合点11位まで呈賞

◎当日、平成4年度時の川柳作家賞および
第13回ときせん賞の表彰を行う。

主催 時の川柳社

一行詩これが私の墓だとは

昭和三十七年八月号に掲載の作品である。

路郎はこの年、七月二十日から二十七日まで東奥日報社主催の第十六回青森県川柳大会に出席、青森・仙台・東京各地の柳人と交歓、

十和田湖よみな酒になれ旅人へ

の旅吟を得、九月号に発表している。この十日間の旅には藤村メ女さんと私が随行した。

路郎先生が青森を経て函館へ渡られた最初は昭和三年で、翌年に「私の墓」と題する文章を書かれた。これを冒頭の句に結びつける

と私は心が痛む。以下はその一節である。

「昨年の夏、函館に遊んだ時、花童子の案内で歌人石川啄木の碑を訪れた。碑は立待岬の共同墓地で、すぐ海に臨んだところにあつたが、その碑が予想以上に立派であつたのに驚かされた。東海の渡島ヶ磯で泣きながら蟹と戯れていた貧乏詩人の啄木の碑としては、頗るふさわしくないほどに堂々とした碑であつた。『私が死んだら』と私は花童子に言った。『私の碑は余り立派なものでなくていい。

寧ろ墓は淋しい位がいいと思う。ただこの立待岬の尖端に建てられたら建ててほしい』と言った。『尤もこれは一つの空想に過ぎないが、人間の空想は時に実現せないものでもない。空想さえせぬことが実現することさえあるのだ。おそらく啄木もこんな立派な碑がこんなところに建つとは夢にすら見なかっただろうと思う』というようなことを話した。

花童子も『僕が出来たら建ててあげるよ』と慰め顔に言ってくれた。私は死んでからのいい落ちつき場所が出来たように思った。それは八月十九日の美しく輝いた日だった。啄木の碑は岬の尖端から二丁ばかりの手にあつたが、それから更に二丁ばかり手前に自然石の手ごろの墓があつた。私はそれを指さして『墓はこの位でいいね。あまり堂々とした墓は、しんみりとしたものを持たないからいやだ。これ位な墓なら知らぬ人の墓でも何だか談しかけたいような気がする』と言うと、花童子は、その墓の碑面を眺めて、『これは若原鎮吉の墓だよ』と、彼も不思議なところ

で不思議なものを見たように言った。『若原鎮吉というと?』『鎮吉は新聞記者で、川柳もやっていたが若くして死んだのだ』『そうかね。そういう川柳家に鎮吉という名があつたような気がする』ここで花童子と私は暫くいろんなことを談し合った。

このあと、若くして死んだ小島六厘坊の墓のないことは寂しく、何かの機会に何処かへ建ててやりたい、と述懐しておられる。ロンドンさんを亡くされたあとの神経衰弱症を癒しに海を渡った函館での路郎先生の心が手に取るように見える。そして、啄木は二つ三つ年上であるけれど、同じ明治を短詩型文学に生きた詩人として普通ではない親近感を抱いておられたようだ。(啄木は明治45年死去)

さて、路郎の墓であるが、尾道の福善寺に麻生家の墓を見付けた言詩人藤村亜鈍氏と私の思い出も今に印象深い、その後移転になった。墓の代りに先生の句碑をと、中島生々庵前主幹時代から、尾道市と屢々折衝を続けたが実現せず、句碑は西尾某主幹の代になってから大阪の阿倍野神社に建った。

夕ざくらとんぼ返りがしてみたし
また、高野山霊園には、『川柳塔』なる立派な碑と、『川柳は人間陶冶の詩である』の碑文が刻まれてわれわれを見守っている。

自選集

谷垣史好

新聞を半年読まず飢えもせず

春数日ふわりふわりと日を過ごす

眠られぬ闇を飛び交う糸蜻蛉

地球揺すると難民がこぼれ落ち

内心はバブルを恋しがっている

大矢十郎

お互いに遠慮は要らぬ二子山

カラカラと相哀れみし絵馬の揺れ

傷物を値切れば無傷があるという

議員バッジ金より強き爪と知る

ハイチーズさせて見せには来てくれず

松川杜的

点滴の耳に雑音多いこと

眼帯へ殊更匂う沈丁花

臭覚は未だ確かなり沈丁花

涅槃図にツバメと猫の居ぬ不思議

般若経唱えて無の字の多いこと

月原宵明

墓に水たつぷりかけて不孝者

酔うて出る飯場の訛りみな違い

生き過ぎて戦を語る友はなし

負けて勝つなど老獪になっていく

人間に空奪われた都市砂漠

高杉鬼遊

恋もよし五月しょうぶは男の季

追いかける沖はどんどん逃げてゆく

一時二時三時ねむれぬ人がいる

バリウムを飲んでまだまだ生きてます

夫逝きあの明るさは何だろう

恒松町紅

お節介過ぎて唇風邪をひく

ふむふむと離婚話を聞いてやる

やはり人エゴがちらちらする法衣

大根めしの話お互い年をとり

軍隊の話を面白がって聞く

小出智子

夢なんかなんにもないが生きられる
合格の隣の子にもおめでとう
座布団を二枚持たせて転勤す
大阪に今年も雪は降らなかった
恥を晒ただけで三月も終る

本田恵二郎

停退の心機一転鋏を振り
便利屋と言われ仲人屋とも言われ
相性は吉とみくじが嘘をつき
文筆はすらすら舌はもつれがち
若き日の思い出は佳し春霞

金井文秋

妻逝って早十年の台所
一人ぐらし手抜き料理で今日も済み
大器晩成ものにならないまま萎み
縮みはったなあと久しぶりに逢う
コマーシャル鵜呑みにしたらあきまへん

藤井明朗

生涯教育老いの勉強見せておく
人生は短し長い夢を追う
永田町も変身論理消えてゆく
献金へ欲がからんでくる落日
マスコミの裏番組の勇み足

野村太茂津

望郷や街の並木も若緑
直線を進む一途な気はないか
今更に謙信鼻肩してみても
煮えきらぬ男にやろう唐辛子
石畳なぜか病葉よく似合う

小林由多香

不況風父の笑顔まで奪い
団らんの輪へネクタイが邪魔になる
上役にだけは挨拶する男
入門書買ってはみたが手に負えぬ
春風に遊びのくせが目を覚ます

波多野五楽庵

美しい城の涙を聞いてます
花咲けば一目おめもじ申したく
礼智信ときどき死語になる怖さ
愛酒愛煙 仏の母に詫びている
万華鏡 死者も生者も踊り出し

児島与呂志

春の川すこうし老いを考える
根来塗 小芋のぬめりつつがなし
くもの巣が破れて大門子走り
木の芽あえやわい筈だけを選ぶ
私だけそとと抜けてる根来道

岩 本 雀 踊 子

生きのびる恩がパンの耳にある
苦勞をした父母を知つた二女二男
どちらかが病めば夫婦という絆
闘病のながさを何度も詫びた妻
三途の川 無事に渡つた夢だより

工 藤 甲 吉

賢くて政治家などとはご免です
金太郎飴最後まで押し通す
孝行はしたいけれども金が無い
一年の計とは三度食べることに
表札が無くても用が足りている

遠 山 可 住

団体のいびき上には上があり
九十九の母腹が減る腹がへる
男死す昨日の夢を抱いたまま
ゲートボール死ぬのを忘れているようだ
納豆が好きで話が合うてくる

有 働 芳 仙

今日の愚痴明日へ流して終う酒
上向いて歩く人なし不況風
大安も仏滅もなし呱呱の声
春一番汚れた政界吹き抜ける
雪だけの歌うたい出す露の臺

正 本 水 客

梅見る人の三三五と雪小やむ
行在所梅の香りがたちこめる
うすびして谷になだれる梅の白
梅林をのぼりつめれば海が見え
露天風呂梅の匂いがわたつてき

八 木 千 代

新しい呪文を蜂たちに習う
呪文を降らす鱗を落す蝶になる
大好きなひとから呪文めく葉書
まいにち唱えないと呪文も錆びてくる
一族の呪文 貸金庫にしまふ

水 粉 千 翁

人情のもろさにすがりつくばかり
ぼつぼつと精一杯の齡を踏み
偽れぬものと素顔に書いてあり
ふところの深さが素顔から覗き
父ちゃんと母ちゃんの仲素知らぬふりも芸

植 村 客 遊 子

葉桜へ魅力譲つて花は散り
借電話そのいてとも言えず
用心をしすぎて自転車衝突し
老婆の老妻なりにある魅力
日本がもう見えませんでした富士が晴れ

黒川紫香

長い土堤　犬と一緒に駆けてみる
笹舟を走らす風がある小川
濁声の和尚の経が終らない
むこうより大きい船に乗っている
鳩よりも雀に餌をやりたいね

西田柳宏子

街宣のお願い喧しすぎないか
すみませんそのひと言がひっかかる
新弟子の秤を欺す水を飲む
有頂天になると論ず落ち椿
知る者も居ない気安さホラも吹き

阿
萬
萬
的

無縁墓にも春を知らせるつくしんぼ
残酷史をよそに飛鳥路桃が咲く
海柘榴市を昔に戻す椿山
人麻呂の歌塚風もやわらかく
三輪王朝箸墓何も語らない

橘
高
薰
風

孫抱いて鶯宿梅の気分かな
 ？、這い這いふたり不思議不思議と懺悔懺悔
 水道の洩れ目に止めたみのりちゃん
 風邪熱ののりちゃん桃の花のよう
 寝返りのどっこいしょとはじいの方

小西無鬼

東野 大八

考してのこと」であった。療養中の木陰の藤椅子で蛙をみつめての実感句である」(川柳『わらじ酒』収録・小西無鬼)

「わらじ酒さらばさらばとバスが出る
夜桜に二次会までは行くつもり

私(路郎)は各地の風俗、人情、風習を求める旅が好きであるが、先日デカンショの唄で有名な篠山の川柳大会に招かれて出かけ、数人は一泊して非常に興味ある物に接した。

朝の食事が済んで、さあ発とうとすると、

大きな湯呑みに酒を出された。これは草鞋酒(わらじざけ)と言うのだそうである。篠山は丹波の山又山の中にある町である。昔はどこへ旅立つにしても必ず山越えで行かねばならぬので、元気で行くようにと、草鞋を履きしめてから、グツと一杯やったものらしい。

それが一つの風習となり、わらじ酒の名が生れたのであろう。私のように常にあわたしい都会生活をしている者にとっては、情趣の深いものであった」(一九五五・四・二一『わらじ酒』収録・篠山にて「麻生路郎」)

この『わらじ酒』というのは、丹波篠山の地に見事な篠山川柳会という花を咲かせた小西無鬼、同富士子夫妻の、川雑から塔への一筋道を歩いた三十年にわたる足跡を、いわば

「私(無鬼)が川柳を始めたのは、昭和二年頃である。その動機は、当時の娯楽雑誌(日の出・キング)等の川柳漫画を見て、寸鉄人を刺す人間の感情に訴える十七文字が、自分の性格に合致すると認めてからである。

麻生路郎先生にお目にかかったのは、私が北浜の会社に通っていた頃、市電監督として北浜交差点に勤務されていた橋本緑雨さんに会ってからである。

一度、句会へ来なさいと奨められて、北浜近くの道修町の階上で、おそろおそろ末席に座った私である。出席者は十人あまり。

やがて路郎先生の選句評がはじまり、暫くして大喝一声、「こんな句を作るからいいかんのだ!」どんな句だったか、私はオドオドし

ていて記憶にないが、先生の教えられる川柳の意義を悟らぬ句だったのだろう。ピリツとした私は、それから句会へ出席するようになり(川柳の本質を知りたくて)、会社でも知友を誘った。今橋「丁目の神田ビルに移った会社で川雑「関土地支部」を作り、同好の士と共に終業後に句会を持ち、故福田山雨楼、故松森琴人師に交互の御指導を賜った。

当時、阪大川柳講座の講師も路郎先生がされていたが、長谷川教授やもう一人の教授が川雑近作のトップを飾っていたのを拝見して、僕も一度巻頭を飾りたいと決心した。病気になるって故郷へ帰り、療養中、作句に努めたが、幼稚な私の句は三か月間全没。初めて一句拾ってもらった句は『一ト飛びを蛙熟

顕彰する「小西無鬼遺句集」の刊行名で、昭和56年5月発刊の美本である。

本名小西三郎。明治37年3月21日兵庫県水上郡春日町生れ。大正9年帝国信託株式会社入社、同14年福知山連隊に入隊。除隊後、関西土地株式会社と社名変更した会社へ復職。昭和二年に川柳に関心を寄せ、橋本緑雨から路郎を紹介され、昭和6年旧姓広瀬から小西と改姓。富士子夫人と結婚したからだ。

男子二人をもったが、昭和12年支那事変が勃発。赤紙応召で満州の錦県へ入営。中国広東で負傷。このため昭和15年召集解除。関西電気株式会社に入社したもの、昭和20年7月姫路連隊へ三度目の召集を受けたが終戦職場に復帰。

変電所 猛獣並みに扱われ 無 鬼
配電局電気時計が止ってた 〃
こういう戦後の苦しさの中で、

永遠に育てよ僕の三指会 無 鬼
の句にある日本ボーイスカウト運動にも挺身、日本連盟長から「郭公賞」を受けている。

昭和56年5月26日死去。享年78。賢良院温誉正心真道居士が法名。

戦前・戦後の苦しい生活の中で、彼にとつては川柳はこよなき趣味として精進。昭和29

年1月に丹波地方初めての篠山川柳会を結成して、機関誌「川柳ささやま」を発刊。死去するまでに誌齢三百二十二号を数えた。このため、昭和52年には「兵庫県ともしび賞」（県文化功労賞）を受賞している。

こういう柳熱ぶりから「ささ山の無鬼」として柳界に知られ、生涯、川柳に徹しぬいた。富士子夫人も路郎夫妻の信奉者で、川雑婦人友の会の有力メンバーの一人だった。

「私の作句法は、他の方々と変っている点は、作句もすいこも用便時にあてることが多い。（笑わないで下さい）随ってこの場合は、鉛筆も句帖もトイレ同伴である。要するに、私の川柳への信念は、細くとも、しっかりした、シンのある川柳の綱を握ったら離さないことです。一本のロープに生命をかける、あの登山家のような意気が、川柳にはもっともあるべきことだと自分を戒めています。

高血圧といわれて五年にもなりますが、酒と煙草は人一倍多くたしなみますので、いつ倒れるかしれませんが、倒れて後やむではなく、句帖と共に川柳をあの世へ持っていく、即ち「倒れても離さない」覚悟であります」（「川柳雑誌」昭33刊・私の作句法・無鬼）

「朝からでも冷や酒という無類の酒好きで

ありながら、健康には人一倍気をつかい、胃や肝臓にいいからと、味噌汁と玉子は欠かさなかった」とは、川柳ささ山の遠山可住、酒井ひか平の社中幹部連の追憶記だが、当人の無鬼はつぎのように書き残している。

「私が常に、人に語る言葉の一つに『親は寝ていてもいいから、長生きをして居て貰いたい』というのがあるが、これが率直な私の本心である。養子の私は、両親として四人に仕えたわけだが、養父母は、昭和二十年前後に失い、現在九十歳に近い実父が一人になった。路郎先生ご夫妻は、われわれの親であり川雑の柱である。だからなんとしても長生きして頂きたい。幸いにも路郎先生が古希を迎えられた。とてもうれしいことだ。この先生の御意志に応え、わが篠山支部も大発展を遂げ、月世界へ、今に川柳旅行をするだけの気持でがんばりたい」（「川柳雑誌」麻生路郎古希特集号・祝文小西無鬼）

外交の淋しさ靴に水が沁み 無 鬼
一枚の赤紙生命預けられ 〃
片言の支那語事変の勇士とか 〃
消防車街のラジオは小原節 〃
僕の一生フィルムで見てみたし 〃

▼次回は「阿達 義雄」

柳籠裏三篇研究 (十七丁)

291 亭主と中よし女房とは別して

佐藤 御亭主とは昵懇の間柄、その女房とは格別の仲であるというのか。どうやら間男のことを言っているように思う。亭主にとって、よもやと思う男が女房と通じている。そうした情況はよくあることで、主題句はそれを詠んでいるのではあるまいか。

鈴木倉之助 故岡田 甫

九三

ろけんする迄ハ夫とむになやつ
たびかへり来そうなやつか今に来す

明八礼3

八木 贊。この男、女房と「出来て」いるのだ。

紀内 贊。落語「紙入」と全く同じ趣向。

間男ハ最初てい主がほれるなり

九七4

岡田 同。

292 いっち能イ物を取り摺りにゆすられ

佐藤 摺りは、掏摸のことである。歳の市の大売出しなどで、くじ引きの最高景品を引き当てたやつが、その帰路、掏摸につけられ、いちやもんつけられて、金をゆすられたというほどの意か。格言にいう禍福はあざなえる縄と。

ほと、きす摺りに見込れそうな顔 傍五28

289 科人の舞が頼朝きつひ好き

佐藤 義経の妻、静御前が鎌倉八幡宮で舞をまっただことは有名で、これは頼朝公の御前に於て行われた。また、平家方の主馬判官盛久も鎌倉に捕えられたが、その信仰していた観音の念力によって不思議に命を助けられ、ために頼朝の前で喜びの舞をまっただとある。

主題句は、この両者の説話を踏まえて、頼朝は罪人の舞いが大変好きだと詠んだのであろう。

かまくらハ度々召人の舞た所

九六

主馬でさへ舞ふたとしつかす、められ

一三28

青木 贊。

鎌倉で無理な所望に二人り逢 傍四38

岡田 同。ただし礎稿に、主馬判官は舞の名人の説明が欲しかった。

290 一年のどん尻餅をついている

佐藤 暮れの餅搗きを「尻餅をつく」の俗語にかけて面白く表現しただけの句か。

せわしなき寝耳に餅の音をき、 二五11

餅ハつく是からうそをつく斗 一36

臘月ハてふちんで餅舂いて居る 驚三七

鈴木 贊。礎稿引用の「臘月ハてふちんで餅舂いて居る」と同じ、俗語にかけた。

岡田 同。「どん尻」・最後の意に「尻餅」の話を掛けた句作。

八木 贊。摺りは掏摸の事だらうとは考えましたが、不明でした。「浅草の市」辺りと考えてはいけませんか。

西原 歳としの市で大黒をかつぱった奴がすりにみられて、あとでゆすられたのでしょう。

大黒を盗んで連れにゆすられる 明四礼 11
ぶちのめされるを大黒笑つて 安八礼 11

瀬川 礎稿に賛。「大黒」ではやや弱そう。

鈴木 小生は西原氏と同じく歳の市の大黒説です。当日はすりの稼ぎ時である。

大黒に目をかけぬのハおそろしい

安六礼 4

岡田 小生も同説。「いっち能い」は「一に俵を踏んまいて」云々の大黒舞の童謡をさかせてある。

293 林家の奥張形も忝本ぎり

佐藤 林家は幕府の御用学者の最高權威で、朱子学唱導の本家でもある。孔孟の教えを遵法する倫理学者の一門でもあるから、人倫にもとるような家風はなく、されば当家の奥も二夫に見えずの教えが徹底しているゆえ、張形も一本を遵守し、他に異形の張形のスペアなど持ち合わせていなかろうと、諷したものようである。

八木 贊

二本とは持たぬ林家の長局

一〇六 36

岩田 贊。礎稿に言う如く「貞女両夫にまみえず」である。

岡田 同。

294 けちな竹の子皮斗りむける也

佐藤 そんな竹の子もまれにはあるのか。皮ばかりが多く、身がちよっぴりしかない、というのは、真竹の場合にはありそうに思う。

孟宗竹の渡来は何時頃か。正徳三年刊の「和漢三才図会」には、まだ孟宗竹のことは出ていない。

岩田 贊。小さい頃、よく竹の子の皮をむかされたが、身が大きいのと、皮ばかりむけて中身がちいさいのとあつたようだ。外観の大きさはさほど変わらない。

岡田 孟宗竹の渡来は大分あとだったらしい。随筆索引を見られよ。

295 式十里もふみ出しやざらにされる也

佐藤 江戸から二十里も行けば、口をすっぱくして口説かなくても、やたらに一儀ができる国がある、ということらしい。どうも相模国、その国の女たちをいうのであろうか。相

模下女の本国であるから、というだけの意と思われる。

関は堅いが陰門はするいくに

九八 43

(「ずるい」は「だらしない」の意)

八木 贊。江戸から二十里は小田原のことです。

岩田 贊。但し「ざらにされる」という表現が一寸はつきりしない。「ざらにさせる」か「ざらにできる」、あるいは「ざらにやれる」であればよくわかるのだが……。

しくじつて二十里上へ下女かへり 八 27

ざらにさせるを大通と下女思ひ 末四 15

西原 贊。「させない」という語に対して「される」といつたのであろうか。

青木 礎稿賛。「二十里」は八木説の如く小田原と思います。各宿場の里程を合計すると二十里二十一丁となります。

鈴木 贊。

きついこと二十里新身だらけ也

三二 21

『大山みやげ』の解に江戸から大山まで十八里、大体の数をいって二十里と詠んだのである。小田原も大山も要するに相模ですから相模下女。

岡田 この二十里は小田原を指すのではなく、相模下女の本場、伊勢原・厚木を指すのです。

秀句鑑賞

同人吟

波多野

五楽庵

— 4月号から

川柳塔同人三〇三人の句を読んでゆきながら考えてしまいました。明治の作家、村上浪

六は著書『人間の機微』の中で、『もし川柳そのものの体を取らずして川柳そのものの心を取る人あらば、これ我が友として語らんとするのみ』即ち川柳の『体』を見ずに『心』を見よと言った有名な言葉があります。

浪六の見た川柳は、古川柳から江戸川柳、果ては新川柳創世の句であつたはずである。

浪六はそれらの中から、見かけの言葉の裏の哀愁を見つけて『体』を見ずに『心』を見よと言つたのである。

この言葉を思い出しながら、この沢山のすばらしい一行詩の『心』をえらぶ心も、その日によつては違つて相違ない。今日は人の心を明るくしてくれるあたたかさを探る旅にしようと考えていました。

口語体の軽やかさと、句から流れるそこはかとなほほえみを探る旅は、私に満ちたりた人情と限りないやさしさをあたえてくれました。

なにもせん日があつたかてええやんか

田中正坊

大阪弁の節回しが独特のやけくそを書いていますが、内心はぶうぶう言いながら、ごそこそ動きまわる、動き回らざるを得ない性格を見事にえがき出しています。

よよと泣く女を期待する男

細川稚代

読んでいて思わず笑つてしまいました。女の人がこんなになつた時代なればこそ、よよと泣く女が欲しくなるのかもしれない。期待をしてはいるものの、そうはいかなかつた男の顔が面白いのです。

ちよとよい口実風邪を引きました

三宅保州

私も医者であれば夜中に起こされることがあります。嘘も方便を上手に使うこともありですが、ちよとよく風邪を引く事もまれではあります。さて保州さんの場合は、嘘も承知でおことわりになつたのか、それとも本当だったのか本人の自主申告を待ちましょう。

潮時だ言いたい事は言つておく

茂理高代

そつななんです。言わなければならぬ潮時をはずすと、なかなか言えなくなるし、言わないとストレスが溜まる一方です、上五の力強さが負けずぎらいを見事に表わしています、もし私の奥さんだつたらと思つと、恐い気がします。

ビスケット 古い言葉となりまして

肥後和香子

今までの川柳にない言い回し方の中にだんだん自分も古い方のランクに入つてゆく。そんなやるせなさが感じられると同時に楽な楽しい一面も読みとれる面白さがあります。ビスケットも死語になるのでしょうか。

四時という会合四時に家を出る

成重放任

約束の時間に絶対に間に合わないのが面白い。始めから遅れるのを知つてか、仕度に手間どつたのか。

老骨に鞭打つなんて無茶ですよ

植田英詩

これもまた承知の上で鞭を打っている面白さがある。無茶ですよ、と言っている人も止めないで見ているところがいい。止めない方が刺戟長寿の秘訣となるのです。

もう一度迎えに来たらついてゆく

松下 たつみ

なんと言う駆け引き、もう一度迎えに来なかった時はどうするのか。いやどうしたのか聞いて見たいのです。

糊効いたパンツに降参してしまふ

山口 高明

糊の効いた旅館の浴衣でさえ眠れずにいる私なのに、もしそれがパンツだったら、歩くにも不自由、座るにも不自由、おまけに大事な所がすりむけでもしたらどうしようかと心配になってしまいました。

据え膳だ何をビクビクするもんか

両川 洋々

据え膳を食わぬはなんとか言いますが、さてその結果はどうなったのでしょうか。何をビクビクするもんか、と言いながら、ビクビクしている。その結果は、次回の発表を待つ以外、方法がありません。推測とは楽しいものだとなりました。

こめかみに梅干貼って耐えてみる

西原 艶子

思わず、母の事、祖母の事を思い出しました。梅干には鎮痛効果があるのですが、それを知っていた事がうれしいのです。だんだん家庭救急法が忘れられてゆく淋しさです。

しおらしく川で洗濯しています

石倉 芙佐子

しおらしくに引かれてしまいました。しおらしくしていながらなにかを期待している。川柳は詠んでいる裏になにかがあるから面白いのではないのでしょうか。桃太郎の入った桃が流れて来たらしおらしくしてなんかしておれませぬ。

寢食を忘れたことはありません

野中 御前

ああ、この川柳のうまさ。よさ。寢食を忘れてこのつらい原稿を書き続けている人がいると言うのに、ぐっすり寝ることが出来、食べることにせいを出しているおおらかさ。

友人以上恋人未満という仲で

藤解 静風

微妙曖昧な男女の仲を見事な言葉で表わしてくれました。飲みにつれて歩くにはよいが、恋人と呼ぶにはどうも、と言う人なら私にもいないわけでもありません。

水飲んでからの演説長いこと

福元 みのる

世の中には、演説の好きな人もいるものです。知識をひけらかすのか、自分の名前を売るためなのか知りませんが、しかたなく聞いている人の身にもなって欲しいものです。

混浴で男が値ぶみされている

榎本 路児

顔で、色で、筋力で、値ぶみの条件は色々ありますが、悪びれないで堂々と値ぶみしている女の目を感じてしまいます。見えるものがついているだけに、値ぶみされている男の弱さを感じます。混浴も女の人が多いと強いものですね。

駅前の赤提灯にはつい負ける

米田 恭昌

今日は飲まないで帰ろうと思っているものの、焼鳥のこうばしい匂いが聞こえてくるとつい入りたくなってしまう。つい負けるの中に複雑な嗜好が読みとれます。一杯で止めようと思っても二杯になり、三杯になり、おかあちゃんに怒られそうだと知っているながら足が誘惑してしまいます。

薬清けけこう愉快にやっています

藤原 鈴江

薬を出す側として反省しきりの句ですが、こう達観していただくとうれさを感じます。ただ薬は作用と反作用とがあります。飲まないにこした事はありませんが、どうしても飲まなければならぬ薬もあります。愉快に病気とつきあって下さい。

よい句を沢山、ありがとうございました。

同人特集

男百句

平成二年〜平成四年

同人吟から 編集部

薄情な男 眼鏡を拭くばかり

麻生路郎

記憶がありませんと男の返事なり

西尾 栗

橋立を縦に見下ろすのは男

橋高 薫風

目が動く男に何も任せられぬ

月原 宵明

石つぶて握って男は脱皮する

永田 俊子

怒ったら恐い男を怒らせる

小島 蘭幸

記憶力弱い男に貸した金

小池 しげお

つかえを外せば男たよりない

高杉 鬼遊

好きな事してる男の背の幅よ

河内 月子

うらぎった男の汗をふいてやる

安藤 寿美子

山を抜くように男が風呂を出る

矢野 佳雲

逃げそうな男にゼッケンつけておく

江原 とみお

汗知らぬ男の話聞く疲れ

江城 修史

水飲みに行った男がもどらない

吉岡 きみえ

男なら泣くなど無理なことを言う

石川 侃流洞

ホンネしか持たぬ男がばかりを見る

金井 文秋

気まぐれな風とさすらうのも男

安平次 弘道

男を殺す鉛筆を削っている

柳楽 鶴丸

おろし金 憎い男をすり下ろす

吉川 寿美

吹っ切れて男に冬の道があり

田中 輝子

峰打ちで男の芯を試される

松下 たつみ

けものみち男の足跡を探す

小谷 美つ千

小うるさい男 味方に付けておく

青枝 鉄治

芸のない男がぬるい湯を好む

小林 由多香



つじつまが合うて男はつまらなし

菜種つゆ男が恥をかけばすむ

胡散臭い男がいつも視野にいる

口数の多い男で疎外され

懐手おとこ余裕を持っている

定食のような男でもの足らず

解凍をするのに手間のいる男

策のない男も同じ腕を組む

妥協癖ついた男がすぐ握手

矢面に立つから男らしく見え

太平に馴れておとこが病んで居る

相談に來たのがゼニのない男

三步先あるく男で頼りない

控え目な男でいつも出遅れる

消しゴムが離せぬ男なら捨てる

顔のない男が海に浮いている

瘦せたい女 肥えたい男 夫婦なり

いつまでも男と男は信じ度く

泥酔の男の涙ふと見つけ

アクセルを踏まねば萎えてくる男

正本 水客

波多野五楽庵

谷垣 史好

河井 庸佑

辻 白溪子

赤川 菊野

山田 高夫

吉岡 美房

井上 柳五郎

奥谷 弘朗

山口 高明

岩本雀踊子

稲葉 冬葉

林野 甦光

兩川 洋々

土橋 螢

榎本 吐來

児島 与呂志

藤村 女

玉置 重人

父の日の男に帽子買っている

男なら男の顔をくずすまい

順風に乗れぬ男の縄のれん

ツアアウトからの男が試される

虫すかぬ男に一つある魅力

女脱ぐ一瞬 男の眼を盗む

いさぎよく散るのは男の妄想だ

にえきらぬ男へ雨の日が続く

父さんの男結びは俺が解く

無器用な男が折っただまし舟

女と男 愛するために生きている

男の汗 男はきつと先に死ぬ

のみ屋から明るい男になって出る

腹黒い男のきやしゃな白い指

片減りの靴に男の血が滲む

喋り過ぎ男の影がうすくなる

過疎捨てた男が過疎へ戻る雪

孫と言う若い男がいて笑う

丸木橋渡って男作られる

木枯しに向えば男の背になる

小出 智子

松村 迷観子

岩崎 瑞穂

寺田 裕美

一瀬 福一

大矢 十郎

榊本 露児

田中 透太

土橋 はるお

内田 結実

塩満 敏

遠山 可住

宮口 笛生

高橋 千万子

村田 善保

阿萬 萬的

荻野 鮫虎狼

林 瑞枝

林 はつ絵

松本 ただし

二十一世紀は男が酒を酌ぐだろう

虎刈りのような男の拭き掃除

ブランド指向 男も服も持物も

男には根性欠けて均等法

男には美味いが女に苦い酒

言い訳は言わずに進む男下駄

相席が美男うどんが食べ辛い

合鍵に男の度胸試される

貧相な男スッポンエキス売り

男坂 軌道修正考えぬ

夕立のような男を待っている

ユダキッと一人は混じる男の輪

秋の夜は男の噂から始めよう

救われた男へ切れた蜘蛛の糸

鍵束のひとつひとつに男の絵

自分史の中の男はみなずるい

雑談へついつい男尻尾だす

わたしから見れば男が面白い

男一匹ひとりになってから泣こう

工藤 甲吉

野田 素身郎

西出 楓 楽

恒松 町 紅

有働 芳 仙

春城 武庫坊

木本 朱 夏

川島 颯云児

片上 英 一

森井 菁 居

三宅 保 州

田中 正 坊

宮西 弥 生

吐田 公 一

奥山 美智子

板東 倫 子

田中 亜 弥

新 正 子

住谷 石 舟

男対男 荒い言葉のもつ温床

一隅を照らす男になりたくて

デパートで男ひきずり回される

男泣きしてアムールの闇を越え

男いっぴきパチンコ玉がままならず

チラリズムの雪に男等うらうらら

逆玉を狙う男の細い首

運命線がなんだ男はただ走る

愚痴いっぱい持った男に突当たる

闇討ちを嫌う男の仕切り線

尻馬に一番乗りをする男

欲のない男と遊ぶ森の中

長い髪垂らすと男釣れますの

ダマされて倅せそうなのは男

踊り忘れた男 金儲けにも疲れ

おんなが走る 男が逃げてゆく

倅せにしますと男みんな言い

走り去る男 夢だけ置いてゆき

土壇場の顔は流石に男だな

西田 柳宏子

寺井 東 雲

河内 天 笑

田村 新 造

新家 完 司

肥後 和 香子

奥田 みつ子

加藤 彩 人

山下 美津留

久家 代仕男

本田 恵二朗

板尾 岳 人

相馬 一 花

木村 明 人

藤井 明 朗

藤井 一二三

中西 兼治郎

片岡 智恵子

黒川 紫 香

色いろいろ

川柳こぼれ話

田中正坊

こぼれ話と銘打ちながら、固苦しい話ばかり続いたので、今回は色気のある話を一席。

天明の俳人、蕪村は画家でもあっただけにその句は色彩感に溢れているが、まず、現代俳句の中から、色そのものを詠み込んだ句をいくつか紹介しよう。

夢殿の赤に世の冬永きかな 青々
万緑の中や吾子の齒生え初める 草田男
藍壺にきれを失ふ寒さかな 丈草
寒雷やいよいよ黒き火消壺 器
雷さまが来るきつと来る白牡丹 杏子
かがまると茶色の蜥蜴走り去る 一透
金の芒遙かなる母の袴りをり 波郷
きさらぎや鬼女の袴の銀鱗 蓼汀
白状すると、これは私が集めたものではなく、一昨年初、朝日新聞の「天声人語」に収録されていたものを借用した。

ところで、色は一体どれくらいあるかと言

うと、私が愛用する『日本語大辞典—カラー版』の色名辞典では三五〇色だが、世には五〇〇色えんぴつというものもあって、まず無限と言っている。『日本語をみがく小辞典』（講談社）によれば、古代日本語には色そのものを指すことはなく、明暗濃淡をあらわす「明かし・暗し・顕（しる）し・漢（あお）し」が転訛した「赤・黒・白・青」の四語でスタートした。三原色の「黄」がないが、その語原は分からないとされている。

もともと色名がなかったから、色をあらわすのに、茶色・桃色・橙色・灰色などと物の名を借りた。つまり色の名は、自然の中から生れたわけで、草木染の微妙な色合いにそれぞれ名をつければ、たちどころに数百種の色名ができた。薔薇色の頬、小麦色の肌、狐色に焼く……など、素晴らしいではないか。前述の五〇〇色えんぴつも、「天女の羽衣」「ニッポニア・ニッポン」「せせらぎのカワセミ」など、ユニークな色名を創造している。

中国では古来、四季・方角も色分けしており、四季は青春・朱夏・白秋・玄冬、方角は青龍（東）・朱雀（南）・白虎（西）・玄武（北）としているが、何となくイメージがびっぴりしている。そこで色彩が持つイメージについてみると、白＝平和・純潔、赤＝勇氣・

情熱、青＝自由・誠実、緑＝繁栄・希望、黄＝充実・肥沃となり、それぞれ雪・太陽・海・森・土をあらわし、一般に赤は慶事、黒は弔事に用いられるというのは、『色の博物誌』（朝日新聞社）から学んだ。

ついでに世界の色彩感覚について言えば、国民の好きな色の順位は、日本は白・青・緑・赤・黄、アメリカは赤・青・白・緑・黄、フランスは青・緑・白・赤・黄、イタリアは緑・白・青・黄・赤、トルコは白・緑・青・赤・黄と、微妙な違いがみられる。なお、国連旗はご承知のように緑である。

どうやら色談義で紙数が尽きたが、川柳では、青い鳥・赤い爪・白い杖など、結構、色が多用される。私の所属するもくせい川柳会では、昨年の課題の一つに色名を入れたのでその中の秀句と思われるものを紹介して結びとしたい。例によって作者名は省略する。

朱唇に朱の色残る伎芸天
白寒行の僧一列に白息
青自画像のバックは青く青く塗る
黄人はみな孤独を抱いてゴツホの黄
紺指先を染めそゝ茄子の漬かり頃
赤紀行文 赤い夕陽でしめくくる
黒還暦へこころ貧しく黒人霊歌
緑 白秋忌 銀杏の実は緑なり



黒川紫香選

熊本市 宇野照代

待望の太郎泳がす鯉のぼり

富山県 高島五月

ダムになる知ってか知らず蕎麦の花

家族旅行リズムが合わぬ三世代

魚屋が心得顔で魚籠に入れ

フルムーンやっぱり世話の焼ける人

富田林市 池森子

指輪を先にはずして置いたのは女

久しぶりのお酒にまたも気を許す

一枚の絵に会いたくて逃亡者

愛がこぼれて風に揺れてる耳飾り

吐く息の深さにしあわせが落ちる

広島市 流奈美子

遊歩道五月の風はときめいて

亡母とした約束がある花のみち

自我少し覗いて馬鹿になり切れず

そうだそうだと影が大きく合点する

一つ咲き一つ散りゆく輪廻かな

吊り橋の揺れを気にする村長さん

富山県 高島五月

公園の裸婦見上げてる男の子

元役場と書いてあります里の地図

老婆の肌に触れますサロンバス

頼りない部下うまさうに飲んでいる

名古屋 藤井高子

来る来ない老いのベンチの恋もどき

神さまも時々忘れなさるらし

遺伝子がかんはなはずではないと言う

オアシスに着いても走る独楽ねずみ

もうおわりそうで終らぬ御祝詞

和歌山市 辻翠子

せめてもの笑顔で風を除けている

逢いたいのに大切な日に杉花粉

約束の指切り指が痛いほど

イントロの長さに岸が遠くなる

触れた掌の温みハートが揺れている

宝塚市 永田 曉風

処刑する手紙を縛るリボンの赤
妻を亡くして七年 肌着の肌ざわり
トンネルのまん中辺で気が変わる
会議室に居るさまざまな伎楽面
歩幅違うていつしか見失う女

今治市 越智 青園

伝言板貴方を待つて日がくれる
夫のこと何でも知ってる自負がある
水掬う指から春がこぼれ落ち
寝転んで金丸さんを批判する
ステーキの薄さ言うまい我が嫁ぎ

松山市 宮尾 みのり

悔んだら負けきつぱりと涙ふく
十三忌 結び直している絆
上天気 洗濯までのいいリズム
三步下ったところから妻が消えていた
見られてるから美しくなる女

尼崎市 児玉 歌子

指切りをあちこちでする胡麻擂り器
来ぬひとの気配読んでる花時計
健康に感謝 雑役婦の日誌
青春のギター 晴れたり曇ったり
挑発をしてる疵だらけの起伏

広島市 森田 文

花便り 今年は母の十七忌
一本の櫛にランナー一人旅
手折るのは止めようあした咲く蕾
花開くわたしもちよつと便乗す
笑い過ぎの花でないしよを聞きもらす

熊本県 大川 幸子

消すことの出来ぬ命の火を燃やす
鉢植にされて負けてはいられない
季節はずれの小さな風が温かい
水漏れに気づいていない話し合い
気楽とはいえどひとりの夜は淋し

藤井寺市 高田 美代子

文珠堂 絵馬も静かになって春
七人のこびとも踊る春の森
桜前線やがて日本を串刺しに
笑い上戸と同席をしたあほらしさ
価値観の違い無口になってくる

富山市 島 ひかる

里ごころつくから電話掛けられず
餌をまいて撒いて雀とかくれんぼ
石を積む賽の川原にいるように
一本の筋が緩めばまるいひと
山男 山の楽しさ分けてゆく

出雲市 原 章 峰

よその子の受験発表桃が咲く
渡り廊下のひと言を聞き直す
渴いた言葉で出向を告げる
旅人に春を重ねた割子そば
まなうらに去年のさくら降り頻る(父一周忌)

静岡市 沢 田 き ん

明け方の夢が私につきまとい
親切のように振る舞い思を売る
青春の心で返事書いている
巻き戻し出来ない歳が寂しすぎ
花の苗買いに outcomes かけて花談義

久留米市 鶴 久 百万両

神鹿と萌える若草山を訪う
浅はかなカラスが恋の呪文吐く
眠れない夜はアダルトビデオでも
お年齢はと問われて西歴で答え
菅公の哀話を梅が語りだす

砂川市 大 橋 政 良

少しずつ命が動く木の芽どき
いい意味の敵になるほど甘くない
芋粥が吹きこぼれてるインターホン
スーパ―が呼吸している自動ドア
陽炎が揺れて絵になるランドセル

摂津市 木 下 道 子

検温のテーマソングで朝が来る
切りましよう若い外科医の腕が鳴る
手術室のドア無慈悲に閉まる音
霧の中へ麻酔だんだん深くなる
退院を知らず主治医の恵比須顔

尼崎市 森 安 夢之助

天国へ登る梯子がゆれている
歌まねが上手で島の人気者
固い椅子もろて頑張る二度の職
汗を知らぬ金が胡坐をかく金庫
孫と会食うれしい話続いてる

尼崎市 的 場 十四郎

つぐないの悔いをさとらす鉄の窓
出歩いて噂の風邪をもちかえる
口車かるく裁いた角ボトル
赤い薔薇咲くと古疵目をさます
生き甲斐の幸せ運ぶ夫婦箸

尼崎市 長 浜 澄 子

朗報の気配シャンペン用意する
自閉症の窓開かせた黄水仙
小うるさい老母が時にはかすがいに
まだ父に内緒にしてと電話口
将来性買って冷たく突き放す

鳴門市 八木芳水

私を労りたくて遍路笠
生きていることのあわれさ手を合わす
無我夢中そんな言葉の通り老い
戯れの酒に一生囚われる

松山市 白石春嶺

すき焼きの肉だけつつくずるい箸
窓際の椅子でさっぱり芽が出ない
特大になって夕陽が染める海
原稿を書き終え妻の茶がうまい

尾崎市 尾宮弘治

サングラスとれば素直な顔になる
無職でも気長に待てぬ遅れバス
記念句碑歩くコースに組み入れる
一言が過ぎて垣根が高くなる

尾崎市 野瀬昌子

殺される前に一刺し虫の意地
無人駅ポツンと迎え待っている
注文を聞くオバサンの耳たしか
幸せは酒一合でたりている

尾崎市 山本すみ

カーテンは引いたまんまの風邪ごもり
良い仲間旅の相談すぐ決り
雀が来て籠の小鳥を唆す
潔白を信じてくれる青い空

東京都 山口新子

追う人へ踏み切りの鐘鳴り止まず
返信封筒お返しくださいわたくしに
病身の父に元氣かと問われ
惜しいかな「終点です」に句誌閉じる

松山市 丹下美津子

餌くれる場所を知ってる渡り鳥
お隣とすぐに比べる団地ママ
美智子様の時と比べる雅子さま
どの子にもこぼさぬように愛を盛る

西宮市 山本義子

悪口でかばい合ってる老夫婦
春近し落柿舎あたり風あわく
不況でも年金きっちり振りこまれ
寺拝観 苦手な筆がおいてある

熊本県 岩切康子

賜わりし雛の色紙と入れ替える
幸せそう湯舟に浮かぶ夫の顔
いい明日約束してる大入日
魚取る鳶を見守る橋の上

西宮市 岡本道子

化粧したぶん負けている女の目
簡単な文字の続いている手紙
焦げついた話へまわす換気扇
予定などなんにもないが春がくる

河内長野市 大西文次

往生際どうあれ生きるだけ生きる
息止めてみてもだあれも慌てない
路地裏の匂に慣れた住み心地
例えはの話に女乗って来ず

旭川市 朝倉大柏

手のひらの土が農政こきおろす
一寸の虫眠らせぬ五分の意地
定退をして風邪ばかりひいている
反抗をしなくなった子怖くなる

静岡市 小木久子

ある決意 男の眉の凜々しくて
怒鳴り合う愛情だつてあるのです
恩売つておいて早速利用する
涙流してたくましくなる女

堺市 宮本かりん

逆らつた蟻もいつしか群の中
達筆へ返事 敬語になる電話
嬉しさを響かせてくる靴の音
菜の花が線路の土手で生き残り

西宮市 菊池トミエ

丘に立つ室津の海は梅咲いて
日溜りでする立話長くなり
不動さん餅供えてもこわい顔
いそいそと蛭を洗う朝の味

京都市 本荘福子

調教をするかのように子を育て
それからは甘くも辛くもない食事
塾帰りカルチャアの母と待ち合せ
懐かしい土を見たのは植木鉢

和歌山市 森茜

コロンの香残して少年すり抜ける
まだ当てにされてる母の定期券
友だちのおとがいの瘤気にかかり
定退の人とコーヒー飲みわかれ

熊本市 北川一進

薄着して風邪を引くより厚着する
流すには惜しい質屋にある未練
得意気に孫が小さな謎をかけ
出発のぎりぎりに来るご常連

熊本市 黒田緑

もう一步上るきざしの反抗期
終電にひとり酔余を眠りこけ
沈丁の香へ暖かい遍路笠
指折ればなどと余生を数えまい

高知市 桑名知華子

齒磨き粉買うて二人で帰る家
沈丁花お隣さんと仲が良い
髪伸ばし始めた理由は明かさない
深呼吸してから手紙封を切り

鳥取県 土橋睦子
ポイントを軽くおさえて妻が立つ
才能はないが放浪しています

誕生日 農協さんからバラ届く
初孫とモグラ叩きに挑戦だ

岡山市 中嶋千恵子

半生を歟光らせて農に生き
粉々にくだいて見ても残る悔い
騙されてあげたい人が一人いて
愛と憎はぎまで揺れる慕情風

岡山市 福原悦子

或る慕情ひとつの手紙抱いて春
忍の字を亡母が縫い込む袋帯
黙々とバラは君恋う彩にする
ほどほどの幸せ願う凡夫婦

兵庫県 森脇和子

春ですネポケットベルと散歩する
ひとりより二人がいいとパンを分け
年金が入って友と小さな贅
意志表示してあつけらかな呆け上手

西宮市 亀岡哲子

亡母さんのコートで雨の墓参り
屋上庭園飛んだ綿毛が虹越える
六十の手習い赤のレオタード
雑巾になったタオルのパンダ君

鳥根県 菅田かつ子
躍りたい気持ち土筆が伸びてきた
墓へきた鴉をそつと遊ばせる

じいちゃんが頬ずりくれたらこそばゆい
ぶた汁を戴き鼻をすすりあげ

大阪市 今西静子

熱爛のカラシが効いている屋台
嫁の手編みがことさら温い冬の風
駅の表と裏の手違い笑われる
ジパンの舞妓と逢うた京の雨

八尾市 秦正子

サクラさくはいはいはずむ熨斗袋
再会は悔いが残っただけでした
戸惑いは貴方の帰り早過ぎる
黄昏て脳細胞も休ませる

富山市 酒井輝

胃カメラの凱歌癌ではない証
熟年へ地球自転が早過ぎる
定年を過ぎても駅へ急ぐ癖
愛人のままで自立ができますか

香川県 田中ふみ

幕開けに気配り競う裏方さん
三面記事どこか狂った血の絆
握手した温もり胸に握りしめ
人逝けどメロデー幕は永遠に（故服部良一氏）

福岡市 井崎 ミサ子

カギツ子の下校足どりすぐわかり
夫帰りそれではねえと切る電話
子離れも口で言う程やすくない
頼らない声でやる事大胆な

今治市 村上 久美子

これも縁 義母の思い出だけが增え
友情の裏に妬心を見たショック
コメディアン楽屋の隅の涙壺
職退いて家にこもった靴のウツ

尼崎市 吉永 伊三郎

門らしい奥に番犬デンと寝る
よろこびの顔がテレビで泣いている
銀でよいテープを切った子に拍手
怪物の秘書が出入りする銀行

尼崎市 湊 修水

東山裾から春が湧いてくる
不況にも律気に咲いた花だより
目の上のタンコブまやかし者でした
信さんにヤかないまへんと尾上縫

尼崎市 中澤 向西

二女三女 姉の晴着で間に合わす
生き甲斐は年金範囲旅をする
鋭筆の消されたとこに謎がある
恋成就 蜜柑咲く頃嫁にやる

京都市 小林 英子

ひと言が胸に溜っている夜寒
あいこどすえ女にコーヒー奢られる
ネクタイよりループの似合う父が好き
補聴器がなくても判るいい話

貝塚市 池田 寿美子

自動化に無口の日々が多過ぎる
バブルにも拍車をかけるリサイクル
それなりにキャリアウーマンの悩み聞く
窓ガラスときめき込めて拭き込もう

酒田市 永澤 裕子

折角の緑を避ける花粉症
大器晩成 月日は無為に過ぎて行き
善人が皆喘いでる不況風
均等法 男優しくなり過ぎる

大阪市 亀井 円女

不眠の夜亡母なる星を探して
正直で本音を言うてうとまれる
夜の深さに馴染んでしまった不眠症
幸せな犬に矢鴨の話する

和歌山市 堀畑 靖子

五十歳めつきり夜に弱くなる
踊っている場合やおへん不況風
ラジオ体操で弾みをつける朝
すぐ引いてしまう意気地のない右手

和歌山市 田 中 み ね

参ったな聞く耳持たぬ話し合い

自惚れに初めて気付く待ちぼうけ

かりそめにも客におばちゃんないだろう

炊事場に立って一人の昼ご飯

和歌山市 山 口 三千子

宿着に替えて娘と外湯めぐりする(娘に連れられて城崎 二句)

旅館の歴史別棟で見る展示品

どのページくつても愛の彩が無い

自尊心捨てたら老いへ加速する

東大阪市 指 宿 千枝子

お名刺をいただいてから好きな人

千枚田のように家が建って町

先祖には縁なさそうな核家族

うちの庭をトイレにしている猫が来た

西宮市 牧 渕 富喜子

私を捨てれば迷いも消えていた

流し雛腰を落して放つ女

転勤の報せに雑巾縫ってやる

バスで行く練兵場の在った街

和歌山県 岡 本 睦 美

変わろうとすれば本音が邪魔をする

少しだけ母に貰った荷を守る

自分史に白いページが多すぎて

夫婦して負けじと趣味の予定表

米子市 足 立 由美子

足音を響かせ春がやってくる

春一番で私も草も甦る

大声で時に小犬も叱りつけ

羽曳野市 芦 田 絢 子

二時間のパートに自己満足を買う

時間調整 環状線をひとまわり

相槌を打って片棒かついだ気

和歌山市 岩 本 美智子

虎落笛 真紅の薔薇が欲しくなる

待合室 昔話も聞かされる

木々芽吹く山の香りに窓開く

和歌山県 杉 山 精 子

五代目で傘が軋んできた重み

大島がそろそろ似合う笑い皺

落ち葉焚く煙が似合う古都の朝

綾部市 藤 田 芳 郎

故郷の山も小川も話好き

逆らってならぬ一つに妻の愚痴

櫛の齒の欠けた話は老母に伏せ

静岡市 片 平 静 代

金魚鉢猫は覗いて叱られる

地味な彩着ると淋しい顔になる

心配で精密検査まだ行かず

和歌山市 榎原公子

ねぎらいが誤解を生んでからの乱

生きている手ごたえがある好きになる

後ろから歩いて裏を見ている

大阪市 勢理客 トミ子

遠回りした分我慢強くなる

易々と敵が渡って行った橋

タンポポを見つけて転ぶ赤い靴

伊丹市 小熊江美

働くのが趣味だと母さん達者です

悪友と知りつつ笛に踊らされ

嘴が黄色い巡査に諭された

西宮市 古谷ひろ子

プロポーズ粗末にせぬと言ったはず

傷跡のいきさつ聞かす露天風呂

母の背の丸みに添えて編むセーター

唐津市 山口ふさ子

書き残す程の遺言ない独り

六十路越え燃ゆる昏紅を引く

も一人の自分見たさに旅に出る

寝屋川市 籠島恵子

春風にあおられたよう旅支度

荷崩れをおこし始めたような春

ありがとがかえって来ました水枕

唐津市 野田旭恒

命日を暗証番号に亡父偲ぶ

一浪の徹夜に母のカップ麺

啓蟄に蛙と蛇の鉢合せ

鳥取市 植田一京

嬉しい日みなに挨拶したくなる

胸にある絵は描き切れぬまま終る

少年の日のハーモニカ吹いてみる

姫路市 丸尾はる子

お隣の花はあまりに赤すぎる

本心でなくても誘うお付合い

ひたすらに咲いてぼとりと散る椿

枚方市 海老池洋

美しい切手 嫁よりいい便り

景気いい話もたまにしてみたい

盛り場の隅で主役が酔いつぶれ

奈良市 米田芳子

娘と歩く嵯峨野の風の心地よさ

もどかしい一日でした灯り消す

啓蟄の出るに知られぬ不況風

高槻市 芦田静江

点滴二本明日に翔ぶ夢考える

焙煎のビール供えて亡夫の愚痴

巫女の舞い笹の雫は母の海

寝屋川市 宮崎 菜月

ふる里は見渡すかぎり菜のみどり

大根の青首抱いて立話

永田町の同人雑誌を誰が読む

寝屋川市 井上 すみれ

さくら餅 外は不況の寒い風

悔しくて空罐蹴って転びかけ

お互いに悪友と言う仲の良さ

熊本県 高野 宵草

再婚の話にコーヒーほろにがい

底辺の我が家にせめて昼の風呂

体内で劇薬だろが糖衣錠

兵庫県 酒井 靖子

ひらがなは好きよ丸みを持っている

自問自答老けゆく老いのコンパクト

計算をまともにすると乗り遅れ

枚方市 森本 節子

資格とるまでの一途な目の光

生活のわき立つ匂 高架下

色あまた大小とりませ薬のむ

藤井寺市 楠 昭子

もう海へ戻れぬ魚の瞳がうるむ

道草の趣味で芽が出た定年後

気が回り過ぎる夫で落ち着かず

柏市 上鈴木 春枝

春や春 子離れ宣言高らかに

気紛れに宝石売り場寄ってみる

例えばの話で試す愛ひとつ

広島市 中村 要

古希の坂いまだ越えたい山があり

追いつけば追い越してほし親のエゴ

賽銭箱ひねもす口をあけて待ち

和歌山県 藤井 春子

猫も春お洒落している日向ぼこ

縁側は風の想い出通り道

この橋を越えて変らぬ里の風

新潟県 高野 不二

老人の部に俺もなる六十五

酒だけは父に負けない呑みっぷり

鴛を寢床で聞ける幸がある

豊中市 田中 道胤

ざわめきも華やぐづかの中休み

年金を孫と一緒に待っている

一日中ラジオ鳴らして手内職

相生市 中塚 礎石

大見えを切った覚悟がちさくなり

遮断機を飛び越えていく赤トンボ

家を捨て親まで捨てた出世欲

鳥取県 奥谷彩子

芦屋市 根来敬

いい話だけ下げて老母には会いに行く
恙なく夫婦茶碗で朝動く

叶わぬと知りつつ賭ける亀もいる
根も葉もない噂がやたら来て困る

好きだったと冗談めいて同窓会

宴たけなわで消えたお方が気にかかる

静岡市 永倉柳華

岡山県 土居ひでの

漠然と聴いて知識を棒に振り

厄介をかけてかけられ夫婦独楽

船酔いの薬を今日も呑み忘れ

熱燭にうれしい話たんと盛る

部屋中が明るくなった赤いバラ

還暦の句集待つて春の門

高槻市 守先伸子

岡山県 福原辰江

日程表 丸暗記して旅に出る (オーストラリア旅行)

巢ごもりへ風は野性の応援歌

帰りたい帰りたくないパスポート

あの山は父の草笛しっている

外国の脂肪をつけて旅終わる

野性的老母も女の身だしなみ

兵庫県 奥野テル

藤井寺市 菊地繁男

行けもせぬ案内地図を見るばかり

サーカスのジントなつかし母の背で

切れそうな絆へ母の返し針

肩書きの名刺嬉しく出したがり

友見舞う楽しい嘘の彩もまぜ

発車ベル幹事泣かせのあと一人

京都市 高沢栄

米子市 小塩智加恵

ことごとと豆煮る匂い梅二月

消しゴムで消した傷あとまだ見える

ローン済みようやく我が家かみしめる

足腰の達者な妻がいる安堵

春そこに門前茶屋の改装中

几帳面神経質な婿養子

広島市 元林光子

今治市 渡邊伊津志

賑やかな掛け声ばかりチビツ子剣士

やんわりと月の光が肩に載り

披露宴主役でないのが華やいで

海に散った恋が珊瑚に身を変える

年金で春のセーター買いしぶり

波はただ蒼く架橋の槌の音

大阪市 尾崎黄紅

ちさい墓おおい墓よ春の花

莫迦にした粗品が役に立っている

望郷空ろ親亡し友も土地も無し

鳥取県 宮脇銀嶺

美人ではないがえくぼの可愛い娘

空港の別れはあつけなく終り

香水をぶんぶんさせて娘が帰る

岡山県 富坂志重

寒の水仏の齒にもしみるかも

ヒュウヒュウと口笛を吹く枯れた木々

ご亭主の教育らしい黄な声

富田林市 山原昭水

ロンドンで母のみそ汁夢にみる

交番で少女二人が花を生け

ふる里は昔話が大好きで

箕面市 木村天弘

飽食もベツトに及ぶ豊かさよ

飽食で脇役になる玉子焼

ギャル大群男疎開の宝塚

高槻市 執行稲子

ライバルの老いた同士で背を流す

故里の春 重文門の苔も伸び

止り木ですこうしこだわり溶けて春

大阪市 清水絹子

雪平のお粥の湯気に亡祖母の顔

三人目産んでそれから束ね髪

娘を叱り夫に叱られ長電話

羽曳野市 福田悦子

歩こうと言う気にさせた目に青葉

えんどう豆御飯の中にある五月

五月病 母の笑顔が効く薬

岐阜市 渡辺杏村

わがまが着られる鎧つくらせる

折り込みの旅行募集に目が走る

目には青葉心配をする放射能

出雲市 園山かおる

地球儀を回せば何所か砂ぼこり

善人の笑いに学ぶものがある

我が家では孫と喜劇をやっている

兵庫県 倉垣恵美

メルヘンの話題をくれた熟れりんご

裏側をお国なまりで見てもらい

ステップへ一人暮しを踏んでいる

弘前市 岡本花匠

月の暈君も孤独か仕舞風呂

ほろほろ鳥破局はいつかきつと来る

夢うつつ母の背で聞く子守唄

今治市 白石 サダ子

春風が旅の話の聞きにくる

頬杖が一つの答出してくれ

磯の香に今夜の食欲もろてくる

香川県 辻上 よしみ

温かい心に触れたバスツアー

見掛けでは心の温み読み切れず

不器用で荒っぽいけど憎めない

鹿児島県 大山 舞鳥影

見せ場などあつては困る消防車

バブル不況窓際族が消えていた

気温差の大きい冬の死亡欄

寝屋川市 北岡 波留吉

鍬を持つ術も知らずに米論議

下り坂予報気にせず旅支度

煽てられすぐ自惚れるお人好し

明石市 小川 酔月

居酒屋の酒で天下をとっている

孫たちにリングの唄を聞かせてる

冷蔵庫そつと開けてはみたものの

寝屋川市 瀧本 八十八

青春の笑顔メロンの香りする

名優は客も自身も芸に酔う

買うことが楽しい店のある市場

吹田市 馬 光子

増えすぎの川鵜受難の巢落しを

見合い終え開口一番どうやった

毛皮着たロシアの不況ピンと来ぬ

寝屋川市 土井 英明

会うてから成るほどなあと思う人

金婚にはんまかいなあを二度三度

通信簿ママの望みが高過ぎる

兵庫県 西井 つや子

せせらぎの水音春を連れてくる

山も川も冬の話ばかりする

人並に洗濯うれしい回復期

神戸市 岩田 信義

倦怠期座席の間に置くカバン

愚痴言った相手に利息も返される

信念が固くて握った手が痛い

鳥取県 山内 芳江

強かに生きてめきめき腕を上げ

出稼ぎの村に女の消防隊

訓練のようにはいかぬ消防車

島根県 今川 三津江

日溜りへ猫まっすぐに出て遊ぶ

風邪ですかいえ私は花粉症

東屋が建って公園らしくなり

鳥取県 武田照女

暖冬へ少し遠出がしたくなり

露天風呂空の青さをひとり占め 岡山県 大石あすなろ

仕送りにテレホンカード入れてある

涙腺が緩むドラマと昼下り

列島をゆさぶりボスが霧を吹く

どの花にも紋白蝶は立ち止る

鳥取市 近藤秋星

合格はうれしいけれど金が要り

土曜だけお酒たしなむことも意地 福岡県 本田忠男

自惚れを捨てたら残るものがない

梅園は宣伝している程に無く

初恋の人に会った街の角

反省をしては才女の角がとれ

十和田市 阿部喜久江

知らぬ振りして聞いている地獄耳

手も口も疲れの見える牡蠣割り女 大阪市 川原章久

着てもらうだけで嬉しいセーター編む

死んだ犬埋めて無聊の懷手

引け際のよさはめられて満ち足りる

湯の宿に流石老妓の冴えた糸

青森県 荒田つる

調べ室ゆうべの虎がかしこまり

謀りごと秘書の手帳は燃やさねば 和歌山市 山田博章

水割りへ今日は二十歳の仲間入り

檻の朱鷺 原野を飛んだ夢に泣き

適当に寝酒ものんで服喪中

ひと仕事終えて知人がたんと増え

豊中市 みきわきみ

遠く住む留守番電話で孫入園

墓も建て流れ流され此処に住む

バアさんと嫁とが曰く「たかが風邪」

診察の度に腹創尋ねられ

未だ呆けぬ確定申告出して来た

啓蟄や地球の鼓動じかにきく

和歌山市 森口恵子

もう使命終えたと思う独り言

のめり込む趣味が気になる肩のこり 香川県 田中スミエ

古傷を繕いあっている絆

身したくをそろえてからの時刻表

手をつなぐ夫婦鈍行の旅つづく 退院をするなり田圃のことを聞く

八尾市 平川 幸枝
雑音の入ったラジオひっぱたく

粥作る夫を気づかう妻の臥す
葉ばたんの渦高くなり冬終る

兵庫県 北川 とみ子

又一つ重ねる嘘が穴を掘る
正直に生きて日銭の米を研ぐ
それなりの望みもあって馬の脚

鳥取県 丸山 希久代

しおらしく茶の湯の席におさまりて
責任がこわい発言尻ごみし
同封の写真近況ものがたる

香川県 提 くに子

趣味の会心開ける友が出来
番犬も寒さは苦手か顔出さず
人生観変えて世間が丸くなる

静岡県 中西 雅

どん底で受けた情けの人生譜
一病の明日の扉の開くを待つ
かたくなに扉を閉じて自閉症

八戸市 島田 昭治

子離れの下手な妻です直ぐむきに
今さらにカレンダーのいい言葉

悪いことしたのは日記に書いてない

岡山県 江口 有一朗
寂しがってみても世間の戸は開かぬ
幼児みな天才という宝物

太陽を押し上げ里の山静か

枚方市 濱田 良知

若者に花を持たせる処世術
沈丁花僕は川柳妻俳句
青田買いいして取り消した企業エゴ

羽曳野市 酒井 一壺

先生に「一壺」の号を賜わりぬ
孫の芽はいっつ伸びるのか待ち望む
朝粥へ黙然として冬木の芽

岡山県 牧野 秀香

湯の花で我が家の温泉安上り
寒空の星のまたたき胸に射す
ホラ吹きのかく笛いつも同じ色

静岡県 大村 正雄

潮騒が子守唄なり貝の耳
乳牛の声も眠たい春の午後
申告を終えて出て来て深呼吸吸

東大阪市 松山 隆

天寿を包んでやりたい兄の貌（長兄逝く）
面差しにおじさんと言う呼び名あり
ボトル酔いボルカ唄うて過去ばかり

島根県 松本聖子

天井を一晚睨んで夜が白み
白酒に回らぬ舌がよく回る
不況風さか手にとって伸びつづけ

佐賀市 古川かずのり

頼り合う夫婦に小さいかくしごと
ほかかな人で苦労は語らない
春を知り雑草小さな花をつけ

和歌山市 木村親路

うなずいただけで味方にされました
押し通す無理を承知の黙秘権
拝啓と書いて電話をしてしまつ

岸和田市 藪野けい子

悪友に好かれちよくちよく誘われる
せまる受験へはしごの神だのみ
日曜を半日つぶす庭掃除

大阪市 中井正秀

本人を天狗にしている誉め言葉
尾瀬沼の鴨になりたい楽天地
こだわって飲むお茶までも川柳

藤井寺市 川端たかし

向かい風だんだん構え出来てくる
鼻の穴小さくしたい花粉症
今日からは盲導犬と影法師

鳥取県 今本早苗

ランドセルの背がうきうきと弾んでる
散歩して春の足音聞いてみる

藤井寺市 田中孝子

廃線の雑草ひとと春を呼ぶ
五月空 花が緑が呼んでいる

米子市 服部朗子

長病みにやさしいことも出来にくい
口先で急場のがれの嘘を言う

東大阪市 安永暁子

失言に以せて本音が出すぎてる
フルムーンやつと想いの汽車に乗る

静岡市 浅子まつゑ

人前で派手に女房叱り付け
咳一つ残して去った冬の客

鳥取市 田賀八千代

小骨多い人で妥協も苦にならぬ
二つの名刺持つて器用に生きている

寝屋川市 前たもつ

好きな子の靴を隠すも意志表示
この女について行きたい春の風

寝屋川市 後藤黎之助

頂点で火の粉を払う人ばかり
大阪の舌で育てた食いだおれ

ゼロからの出発でした私達
出発へ未練たち切るベルが鳴る
米子市 木村 春枝

先に寝た夫のいびきやかましい
独り居に柱で背中かいている
島根県 小林 延子

ニューモード帽子似合わぬ顔もある
アルバイト流れる汗が時給上げ
神戸市 木村 貴代子

仲良しに淋しい夜は長電話
度々のバーゲンチラシで無駄遣い
川西市 田中 喜俊

順を待つ時の長さに無表情
幸せな今日を日記に書いておく
鳥取県 権代 康女

沢庵がおいしく漬かり宅急便
うきうきと小指と小指からませる
鳥取県 伊吹 富恵

温もりの言葉に消える胸の傷
労りの言葉に孤独の影が消え
静岡県 宇佐美 寿美

よく眠る室内犬よいま平和
町会の役員だから耐えている
檀原市 西本 保夫

七光の椅子がきしんでばかりいる
カスミ草好きで主役に縁がない
香川県 山地 マツエ

夜の部の予定は秘書課だけが知る
右左どちらでも良い便宜主義
熊本市 遠山 夏生

巣立たせて二人に広い家屋敷
高校生北へ南へペダル踏む
熊本県 増田 一乗

宝石の店で目の色七変化
リモコンで動く夫で物足りず
松江市 松浦 登志子

卒論にいのち燃やして巣立つ春
さくら前線動いて早い旅誘う
島根県 三代 朝子

お世辞でもわるい気はせぬご挨拶
菜の花を生けて玄関春匂う
島根県 安部 美恵女

熱戦の山場を見せた初場所
大真面目しどろもどろのプロポーズ
池田市 木村 一笛

慎重に記念切手の封を切り
跡取りを養子にやった覚えなし
大阪市 大河 未佐子

寝屋川市 太田 とし子

台本の通りに犬が走らない

すぐ失礼しますと言うて一時間

松江市 佐野木 みえ

出る前にのど飴一つ口に入れ

初午の赤い幟がはためいた

羽曳野市 徳山 みつこ

ある日ふとガラス戸に見た背の丸さ

また元のふたりの小さな炊飯器

岡山県 山磨 行子

釘一本さされて元気見失い

六十年生きて七癖気にならず

唐津市 山門 幸夫

放たれた矢鴨の感想訊く仲間

水温むメダカの居ない芹の溝

松江市 浦辺 静江

手鏡は私の皺を数えます

おしゃべりを待ってくれない赤信号

松江市 安食 友子

わざとらしきびすを蹴って避けられた

億のこと聞いても所詮奥は奥

豊中市 松岡 久留美

寺詣り墓前にぐちを置いて来る

嫁ぐ日の別れの庭は雪化粧

尼崎市 向井 未貞一

傘寿と金婚も来た二重奏

恵まれて日々を楽しむ仲間たち

泉南市 問屋 啓二郎

四季の絵に原色ふえて国荒れる

生まれつき中間色の顔してる

岡山県 国米 きくゑ

裏表ない親切なボランティア

音たてて障子をしめるわだかまり

堺市 桜井 莊次

振り出しに戻ると山が見えてくる

運命を変えたその日の風の向き

宇部市 中村 三良

仕方なく相槌打って手で笑い

車間距離守って迷路抜けられぬ

大阪市 小糸 昭子

負けてやる孫を相手の相撲とる

手をかけたそれだけ多く蓄つけ

(前月分) 静岡市 大村 正雄

女房に天下譲って小正月

法律をつくりその裏くぐる罪

島根県 武島 ちよえ

かすむ目も人の情けはよく見える

さよならも言わずに桜風に乗り

唐津市 浜本 治幸

一昔前の背広で若返り

老婆の小言ばんやりと聞く昼下り

静岡市 柳沢 たま

手土産が平素の無沙汰詫びに来る

平和とはいいな安心して寝られ

鳥取県 小西 五十鈴

万歩計夫と比べ合う数字

大山の甘酒うまし小雪舞う

鳥取県 中西 智恵子

早咲きのさくらで狂うスケジュール

美しいうそ神様もついている

静岡市 青柳 金吾

挨拶に入試の事はふれず居る

梅の実になって梅園静かなり

唐津市 入江 喜久亭

不況でもはやる店ありパチンコ屋

病床の吾に床ずれさせぬ妻

姫路市 服部 一典

一呼吸してから入る社長室

願いごとある日は神棚水を替え

十和田市 小笠原 敏夫

ぴかぴかが一人入学過疎の村

安売りの卵が栄養足しに来る

鳥取県 橋谷 静江

ときめいてコンビを組んで四十年

親の夢破ってしまった子が育ち

唐津市 江川 青琴

春一番台風並にやって来る

同窓会 補聴器つけて歯の自慢

寝屋川市 坂上 高栄

うぬぼれが顔に出ている言葉尻

日記にも書いてはならぬ胸の襷

鳥根県 岩田 三和

デザインー自分は何もかざらない

紙やけば風のおだてに灰が舞う

米子市 鹿島 松子

大も春 猫も春 野も春なのに

またしても痛む方から風がくる

海南市 谷口 義男

綿々と性格の不和訴える

貧相な面も闇夜が消してくれ

姫路市 福島 姫女

風に耳たてて夫の浮気知る

春の野をひた走るバス眠気さす

吹田市 西岡 豊

気は五十身は六十で歳七十

袖に立つ師匠はらはらしてござる

鳥取県 山本正光

どの地図も冥土の位置が見当らず
ふところの火種不発のままでいる

和歌山市 池永正雄

禁煙へ大煙突もお付き合い

単身者ネクタイのまま夕仕度

和歌山県 吉田武治

ネクタイをはずすと丸いうまい酒
生きている里の小川にほっとする

天理市 飯田昇

打ち消して見ても所詮は撒いた種

邪魔くさい話小皿に盛り合わす

唐津市 福島紀一

花便り吉野の桜が呼んでいる

寝台車今も浴衣のお仕着せで

大阪市 乾哲静

この人にこの歌ありて今日のあり
風邪一つ引かぬ夫婦が何故もめる

兵庫県 中野とよ子

古里の歴史を耳に自負してる
皿洗う指ねむたくてねむたくて

静岡市 三浦つね

土曜日の午後は濃い目に紅を塗る
捨て犬の身上話聞いて飼い

島根県 木村まさ子

聞けば喧し聞かねば淋し孫の声
出発にいつも遅れる同じ人

寝屋川市 豊福路子

み仏もわたしも好きな水仙花
老床へ夫の若さがはね返る

大阪市 出山美津枝

あの時は刺身のつまと今気付き
写真手に同窓会で嫁さがし

吹田市 吉川渉

おろかにも人の心は辞めて知り
御座候みんな知ってる並んでる

出雲市 中村トク子

還暦を過ぎて挑戦五七五
申告のシーズンとなり大慌て

和歌山県 上岡正直

バトンタッチもうこのへんで椅子あける
円熟の女の話題に乗ってみる

和歌山県 村中悦男

昼寝する孫見回してまた眠る
たたく手のリズムに乗って眠る孫

岡山県 伏見すみれ

力瘤頼もしくみる孫二十歳
ホラ玉子産んだと鶏鳴いて告げ

岡山県 杉本 伊久栄
 言うまいと捨てた小言を亦拾い
 雅子さんニツコリ笑顔も板につき

静岡市 増田 扶美
 教え子の癖字が遠い日連れてくる
 好きなだけ持っていきなとねぎ畑で

吹田市 岩鼻 啓三
 春日遅々遊びほうけて脛の泥
 千円で二円お釣りの花を買う

唐津市 木内 ミチ子
 俄雨いつか寄り添う傘の中
 寒椿雪の重みに耐えて咲く

鳥取県 橋本 孝由
 美人妻はめ殺しにし手なずける
 妻に主権渡しコロコロ寝てしまふ

鳥取市 谷口 侑里
 朝のあいさつ夫の機嫌を打診する
 雪囲いの中で牡丹の芽が覗き

羽曳野市 山本 たけし
 雷が春連れて来る雨が降る
 恋芽吹くなんと可憐な胡蝶蘭

泉佐野市 内田 倫子
 鍵かけて行つて来ますと犬に言ふ
 冬の池 鼻赤くして釣天狗

兵庫県 玉田 三重
 ご無沙汰のかしわ手神は笑うかに
 一本橋渡る歩幅がにぶくなる

泉佐野市 大工 静子
 ミニ女房内助もありて開店日
 ややこしい事は棚上げ先ずコーヒー

島根県 福岡 博利
 紙の刃の怖さ知ってる白い指
 切手収集 誰に渡そうあてもなく

ジュニアの部

香川県(小5) 田中 なみ子
 三輪車小さい頃のたから物
 止められない地球の怒り温暖化

尼崎 春の川柳大会

と き 5月9日(日)
 11時半開場・13時半締切

ところ サンシビック尼崎

兼題と選者(各2句)投句拝辞

「ランチ」 原 宣子選
 「影」 西出 楓楽選
 「走る」 尾畑 晴代選
 「旅」 春城 武庫坊選
 「マンガ」 森田 栄一選
 「魚」 黒川 紫香選
 「線」 北浦 牧郎選

会 費 700円(作品集郵送)

賞 各題秀句・準秀句

懇親会 3000円(希望者)

主 催 尼崎川柳協会

水煙抄

秀句鑑賞

— 4月号から

山田 高夫

ジャンケンポン反射神経ためされる

土橋 睦子

後出しはジャンケンのルール違反、ところが近頃、どうも手許があやしくなつて来て、などと作者の嘆きが聞こえてくるようである。メリットを餌に男の骨を抜く

鶴 久 百万両

擬餌鉤にでもかかる世の中、ましてや旨い餌に出会すのだからひとたまりもない。政治改革を口にする族議員氏も骨抜きにならぬよう心して取り組んで欲しいものである。

伊賀九谷備前清水萩で呑む

山原 昭水

呑むとあるからには酒、しかもそこに並べてあるがらくた物でなく、れつきとした銘のある酒器で呑むという、正に男の面目躍如。因に私は底印のあるコップでやっているが、これもまた捨てがたい。

極秘資料ばかり作つていて無口

西村 和成

外部と固く閉ざされた部屋で黙々と新機軸に取り組む一人の技術者、それは作者自身の姿であろう。いつの間にかそれが習性となつて無口になったというのである。

笑つたら損する顔もいる役所

遠山 夏生

何かご不満がお有りでしょうか。それとも偉いと思ひになつているのでしょうか。いずれにしても笑わない人が窓口にいる事だけは確か。私達は真面目に税金を納めているのですから少しぐらいにこりとされたら如何。ブラカード持つ人に聞くエビス橋

指宿 千枝子

雑踏する黄昏の街という背景、そこはかとなく哀愁が漂うその街に、人生の色模様を見ている気がする。感傷が過ぎるかも知れないが生きたため男を叱る冬木立

大平 太一郎

寒風に晒されても毅然として立つ冬木立、軟弱な男を叱咤激励しているようだといふ口実がもう無くなつた定年後

池 森子

仕事にかこつけお定まりのコース。毎日呑み歩きに始まり、休日ゴルフ、釣、麻雀等数

え上げれば切りがない。家庭を省みるなんて暇もない。今は川柳三昧、禅味の日々。

友の計に朝の背骨をピンと張る

朝倉 大柏

思い残して逝つたであろう友。まだこれからというときに、何れは後を追うとしても今は生きねばならぬ私。思い残すことの無いように背筋を張つて友の分まで生きる覚悟

人間が厭て一日海を見る

岩本 美智子

私か、それとも不特定多数の人間がいやになつたのかは詳らかではないが、救いを求めている事だけは確か。重苦しい作者の思いがじんと胸に伝わってくる。

お暇なら見てよとチラシどつと来る

木下 道子

有り余るほど暇はあつてもチラシには目を通したことがない。第一先立つものが無いのだから。少ない資源の無駄使いというほかに。ただし裏紙は作句用に重宝しているが。

春一番隣のバケツ飛んで来た

小林 延子

見付けが大変面白い。軽味のある川柳が少なくなつた中で一際光っている。

父さんの唄に手拍子つけてやる

宇野 照代

銀河系

河内天笑選

西宮市 西口 いわゑ
公園で地球の音を聞いてます
ボタン押すそこにわたしのユートピア

堺市 高橋 千万子
雲流れ一通の訃を受け取りぬ

大阪市 本間 満津子
心底はまだ読みとれず歩を合わせ
財布拾うてとつさに浮かぶ善と悪
沈黙が精一杯の武器でした

和歌山県 福田 和子
傷口を庇うと前へ進めない
だいふくと苺意外なハーモニー

和歌山県 古久保 和子
真心を送り真心かえされる
二重丸つけた行事も無事終り

和歌山県 古久保 和子
知らんぷりして温めていたチャンス
仁王さんあなた疲れて来ませんか

米子市 八木 千代
からくりも拵える神の道具箱
わたくしを仕立て直している途中

富田林市 藤田 泰子
据膳をいただいてから胃のもたれ
菜の花の彼方にみえる青い海

羽曳野市 吉川 寿美
影法師きみもいさか疲れたね
拳の中にいつも自分をとしこめる

米子市 金山 夕子
面白い人を見つけて絵を描こう
ぼーんやりと雨を見ている日曜日

出雲市 竹治 ちかし
夢みんな破れ人間らしい顔
白黒をはっきりさせる他人の口

広島市 中村 要
百罪は忘れ一善鼻にかけ
更年期すぎた女の鼻柱

西宮市 奥田 みつ子
ときめきを覚られぬよう遠く居る
言いたいこといっぱい溜めた夜の鏡

静岡市 片平 静代
美しく燃えようおんな果てるまで
悲しくて作り笑いが絵にならぬ

静岡市 小木 久子
人のよさむき出しにしてよく喋り
慎重な愛ライバルに持つてかれ

和歌山県 宮口 克子
水飲んで蘇ること悔いすること
その方は卒業しましたと 男

米子市 新 正子
五十歳の記念のヌード考える
悟るにはお金を少し貯めすぎた

香川県 川崎 ひかり
脇役が光り過ぎてはなりません
不届きな茶柱立った通夜の席

唐津市 久保 正敏
影武者の涙もろさを危ながり
自然破壊三連水車の水涸れる

箕面市 岩津 ようじ
小賢しいホモサビエンス天に唾
国際化したくないのにコメ エイズ

守口市 森川 まさお
昇格してから口が重くなり
朝市のお国ことばに買い過ぎる

熊本県 高野 宵草
五月病いつか孤独な国説り
新聞で包む胡瓜は美味かった

兵庫県 遠山 可住
しばらくは器と話す京料理
陰口をたくさん持っている名刺

鳥取県 ささき やえ
百姓のほこり米作りは止めぬ
癒えてくるものへやさしき春の雨

大阪市 大河 未佐子

両方に味方しただけ気がとがめ
先祖の名出る頃お経しびれ出し

羽曳野市 徳山 みつこ

スキヤンダルぞろぞろ億に不感症
金バッジはずせばすぐに縄がつく

鳴門市 八木 芳水

墮ちるだけ墮ちて安息手に入れる
前歴を問わぬ飯場で職貰う

羽曳野市 芦田 絢子

TPO時々狂う眼鏡です
有名な店だが支店多すぎる

岸和田市 三輪 通彦

五体揃って出来ないことが多すぎる
貧乏性でまだ捨てきれぬ不要品

鳥取県 新家 完司

杖を持つ人に合わせて景色見る
お誘いを受ける準備はしています

倉吉市 野口 節子

盲目の詩人の声が美しい
大阪市 榎本 落児

十和田市 斉藤 為

どこへ行っても村おこし村おこし
青少年のような大人でたまされる

青森市 工藤 甲吉

傷口をいたわり合ってコンビです

海南市 三宅 保州

抽象画天地無用と書いてある
鶴橋の駅つるはしの臭いする

豊中市 田中正坊

駅前広場で墓を売っている
鳥取県 土橋 はるお

和歌山県 楠見 章子

がたの来た身体縁起をかつぎだす
ホホホホホの中に包んでいいるいじめ

姫路市 丁坪 サワ子

街で聞く時計はどれも忙しい
旭川市 朝倉 大柏

米子市 鹿島 松子

陽炎は土の情念かも知れぬ
波風を立てて老化を防止する

鳥取市 西村 黙光

田を売ったことは卒業まで言わぬ
倉吉市 米田 幸子

和歌山県 田中 みね

内密にそんな話は聞きとない
和泉市 中川 楓

五十五歳天までの距離考える
岡山県 土居 ひでの

どの坂も二人三脚なら越せる
出雲市 園山 かおる

人並に回ればいいさ夫婦独楽
鳥取市 田賀 八千代

名刺には明日の顔を書いておく

藤井寺市 高田 美代子

鼠のある街でどっこい生きている
もうやめたやめたと宝くじを買う

米子市 中井 ゆき

立ち止ることを許さぬカレンダー
砂川市 大橋 政良

名古屋市 藤井 高子

嘘みたいな話本当だから怖い
和歌山県 木村 初子

足音がそこまで来てる決意する
和歌山県 玉井 豊太

指切りをして催眠術にかかります
鳥取市 植田 一京

幸せも試練も神さまから貰う
露見して悔いすることない鉄面皮

海田市 谷口 義男

和歌山県 岩本 美智子

ひび入ったからだを騙す術を知り
実になってから梅園は静かなり

静岡市 青柳 金吾

岸和田市 芳地 狸村

島根県 小林 延子

母逝って敗戦ひとつ遠くなり
天国と信じています痴呆症

藤井寺市 川端 たかし

年金の元をとるまで生きなはれ

島根県 加本 義良

丸丸と育ててもらうて瘦せたがり

箕面市 椎江 清芳

寿命より貯金の方が先に減り

香川県 山地 マツエ

れんげ摘み孫と会話が弾みます

大阪府 大福 留吉

たたきから鰯になった不況風

姫路市 中塚 遊峰

さりげない言葉の裏にある温み

枚方市 海老池 洋

花名刺ここにも源氏物語

大阪府 今西 静子

付録だけ買ったことある夜店の灯

広島市 森田 文

羊飼いいいなと思う大自然

尼崎市 春城 年代

びんずるさんを撫でる亡母がしたように

和歌山市 山口 三千子

長生きをすれば足りない貯金額

八尾市 片上 英一

楼蘭の美女も眠っていた砂漠

仙台市 川村 映輝

伴せの最中雑音寄せつけず

大阪府 藤田 頂留子

道真を今もしたって聞く梅

岸和田市 島崎 富志子

捨てるほど薬をくれる長寿国

岸和田市 古野 ひで

目を病んでとても用心深くなる

大阪府 板東 倫子

モツ鍋を話のタネに食べておく

鳥取県 山内 芳江

つまずいて無神論者の神参り

鳥取県 上田 俊路

ブライドが邪魔で初心に帰れない

兵庫県 中野 とよ子

夢を買う列へまじめな顔になり

兵庫県 酒井 靖子

未練かな忘れられない予定表

弘前市 村田 善保

メビウスの輪を手繰りつつ共白髪

米子市 光井 玲子

梅干しになっても母は頼られる

鳥取県 乾 喜与志

はよ起きて貧乏神を追い立てる

茨木市 堀 良江

人間ドッグ健康だから受けに行く

兵庫県 奥野 テル

手料理に桃一輪を添えて出し

弘前市 岡本 花匠

風花に花便り聞く北の街

和歌山市 和田 美寿子

背のびして一気にうつつを追い払う

大阪府 榎山 隆

木の芽どき石切さんが混んでいる

倉敷市 田辺 灸六

火葬場人生切符精算書

泉南市 問屋 啓二郎

つなぎ粉を足してみるけど遠い仲

阪南市 深日 白光子

ノンフィクション演じる一人かも知れぬ

今治市 渡辺 伊津志

何かもの言いたいように咲く椿

鳥取市 春木 圭一郎

離俗だと力んでみても欲が出る

黒石市 相馬 一花

休火山みたいな母を介護する

姫路市 服部 一典

こんな風に育てた覚えはないと言う

高知県 赤川 菊野

鈴つけた財布の中味たかが知れ

唐津市 山口 ふさ子

口紅を引くと外出したくなり

今治市 越智 一水

前向きに生きよう老いは追わないぞ

松江市 松浦 登志子

窓際のここは現代座敷牢

今治市 月原 宵明

桃の花鮎は釣れよと釣れまいと

唐津市 浜本 ちよ

玄関に立って欲しい仁王さま

唐津市 田口 虹汀

行儀よく土筆が袴はいてくる

寝屋川市 平松 かすみ
紐切ってベツト自由な恋の夢

枚方市 濱田 良知
トレードのきかぬ夫婦が無事にいる

寝屋川市 坂上 高栄
ロッカーに今日の疲れをとじ込める

和歌山市 桜井 千秀
悪の芽を伸ばす大人の無関心

寝屋川市 籠島 恵子
立ち読みで疑問を一つといってくる

岡山県 富坂 志重
八十路来て塩も砂糖も敵となり

岡山県 江口 有一朗
優勝の後は優しくなる笑顔

唐津市 浜本 久仁於
春いくつ巡る噴火の仮住まい

鳥取市 近藤 秋星
散歩がてらに土手の土筆に逢いにゆく

出雲市 島 祥庵
あなたにはとてもやさしい彩で咲き

静岡市 沢田 きん
自惚れを言葉の中に覗かせる

東大阪市 松山 隆
女医さんに弱味しつかり握られる

鳥取市 武田 帆雀
入門書切手不要は異だった

大阪市 松尾 柳右子
鯉のぼり空気の浄化頼みます

岡山県 小林 妻子
風邪引いていても老妻茶を沸かす

尼崎市 春城 武庫坊
押し花に華麗な過去を語らせる

茨木市 藤井 正雄
春の月少し誘いに乗れと出る

八尾市 秦 正子
ゆるやかにまた確実に老いてゆく

唐津市 福島 紀一
セクハラの限界肩に手もやれず

東大阪市 今岡 貞人
ライバルに勝ったは寿命だけだった

大阪市 神夏磯 典子
一心寺ことしも禁酒誓う絵馬

鳥取県 西川 和子
研修会の昼ステーキのフルコース

和歌山県 藤井 春子
春近くささやき合っている裸木

岡山県 福原 辰江
盛衰を秘めて静かな寺の鐘

弘前市 肥後 和香子
雅子さまごっこが流行る幼稚園

唐津市 入江 喜久亭
溜めていた愚痴を一気に吐き出した

有田市 松井 かなめ
納得の行かない顔になつてくる

和歌山市 青枝 鉄治
カルシウム不足したのかよく怒る

岡山市 井上 柳五郎
芸をする猿の悲しい眼に出会う

岸和田市 田中 文時
鳶の子を鷹になれとは親のエゴ

和歌山市 細川 稚代
初鰓今日父ちゃんの誕生日

寝屋川市 前 たもつ
春風の匂いたどれば沈丁花

吹田市 吉川 渉
子も巣立ちようやく好きに日を送る

第45回

西日本川柳大会

とき 9月5日(日)

ところ 岡山県久米南町中央公民館

第一部 事前投句(6月30日締切)

・課題と選者 各題2句

幻 仲川たけし・斎藤大雄・大森風来子

幸 山田 良行・田口麦彦・小林由多香

岸 橘高 薫風・尾藤三柳・浜野 奇童

投句は各題ごとに2句ずつと氏名を書

き、投句料1000円を添え、左記へ

〒709-36 岡山県久米郡久米南町下弓削

弓削川 柳杜

第二部 大会受付

大会要項は次号に掲載します。

苗香のむ

小出智子選

嫉妬かな背広の匂い髪の匂い

妻らしい言葉をひとつずつ忘れ

縄文の女の意志を持つ素足

もののいりがつづく よいことがつづく

あやまちの一つ二つは勲章に

永遠のテーマがあつて嫁姑

鍵束の春の重さをポケットに

一隅を照らす灯りと親密に

さよならと古いコートを脱ぐように

髪切つて逢いに行く日はむらさき

娘には大きな橋を架けておく

螢の光幼い別れたままに

ほどほどが難くなる身嗜み

一瞬嫁は他人と思う時

わたくしを追ひ詰めてくる白い画布

曲り角川の流れに添うてゆく

人間の弱さを衝いてくるカード

花びらを踏んで来し方振り返る

お雛様はつばつ召し上がるあられ

大阪市 北川 弘子

島根県 松本 文子

弘前市 佐治千加子

八尾市 宮西 弥生

大阪市 西出 楓葉

羽曳野市 吉川 寿美

和歌山市 西山 幸

和歌山市 木本 朱夏

羽曳野市 芦田 絢子

東京都 山口 新子

寝屋川市 豊福 路子

寝屋川市 堀江 光子

堺市 山本 半銭

米子市 小塩智加恵

和歌山市 田中 輝子

豊中市 辻川 慶子

富田林市 藤田 泰子

宝塚市 丸山よし津

吹田市 栗谷 春子

パソコンの指で削れぬ竹とんぼ

覚めた目でわたしを見てる紙人形

美しい灰になったと言われない

嘘ひとつ投げた波紋がまだ続く

思いつきにお手玉を縫う外は雪

義理チョコの数もうちの子負けている

潮騒が内緒話を消しにくる

春の陽をちらちらこぼす手水鉢

春一番コートの方が長すぎる

恐いものはないと言ってるこわい人

故郷の味送りつづける恩返し

よく眠る五臓六腑はまだ確か

相撲の出来る体勢いつも保つとく

ぶつかつて叱られたわけ思い知り

こもごもに過去を見送る離流し

天と地の狭間のガラス窓を拭く

馴れ合いで君と踊っているワルツ

他人には甘えてならぬ台所

なまじつか悟ると雲が寄ってくる

春ですよピアスの穴を開けましょか

公園で孫に似た子を探してる

五十歳明日へ明るい色を置く

片足で立つ練習を続けよう

波風は立てまい子不孝だったから

横書のメモにきっちり自己主張

富田林市 片岡智恵子

西宮市 門谷たす子

米子市 政岡日枝子

和歌山市 森口 恵子

兵庫県 倉垣 恵美

大阪市 日阪 秋子

有田市 生馬美美子

京都市 山海 友熙

芦屋市 黒田 能子

和歌山市 森 茜

米子市 光井 玲子

大阪市 鈴木 節子

大阪市 神夏磯典子

大阪市 本間満津子

和歌山市 松崎 幸子

米子市 新 正子

和歌山市 堀畑 靖子

河内長野市 植村 喜代

大阪市 町田 達子

柏市 上鈴木春枝

岩沼市 福士 トキ

和歌山市 榎原 公子

米子市 寺沢みどり

西宮市 秋元 てる

和歌山市 細川 稚代

和歌山市

小川百合子

大阪市

上江洌勝子

倉吉市

野中 御前

米子市

白根 ふみ

兵庫県

酒井 靖子

堺市

小西 小雪

松江市

安食 友子

今治市

野村 京子

岡山県

千原 理瑛

堺市

神原 文

鳥取市

西原 艶子

堺市

桜沢あかり

和歌山市

田中 みね

和歌山市

山口三千子

名古屋

藤井 高子

岡山県

土居ひでの

和歌山市

福井 桂香

和歌山市

木村 初子

松江市

佐野木みえ

鳥取県

石谷美恵子

大阪市

大河末佐子

堺市

近藤 豊子

米子市

中井 ゆき

香川県

辻上よしみ

西宮市

西口いわゑ

和歌山市

福本 英子

京都市

小林 英子

香川県

川崎ひかり

八尾市

向井しづ子

倉吉市

淡路ゆり子

出雲市

園山多賀子

伊丹市

前田しゅう子

出雲市

石倉美佐子

和歌山県

杉山 精子

大阪市

市野 友美

姫路市

丁坪サワ子

寝屋川市

坂上 高栄

島根県

小林 延子

捨てる物なにも無かった亡母の部屋

ようやくに敬老証という峠

春うらら紅など引いて出かけよか

饒舌に過去をしのんで難と居る

歯切れのいい言葉にいつも惑わされ

春の床水仙袴に威儀正す

手のひらに神はレールを描き給う

おぼろ月ふわりと愚痴を聞き流す

華やかに生きて独りの髪を梳く

帰国まで縁起かついだ母の白湯

嫁の良さにふれた日の空コバルトに

花園に迷うて自分見失う

手鏡の中を流れる白い雲

ゴシックの一句目―夫に不信感をもつ一瞬、体中の神経を失ら

せて、まるで犬の如くに何かを感じ取ろうとする。長い夫婦生活

にきれいな事ばかりでは済まされぬこともある。女の毒のようなも

のを内在させながら、悲しいまでの女のころ。二句目―ご主人

を見送って以来、きつと忘れる日とてなかったことであろうが、

七年、八年と経つうちに、妻としての言葉を忘れていることにふ

と気付く時がある。淋しいことではあるが、残された者は早く逝

った人の分までも生きねばならないのだ。三句目―「縄文の女の

意志」という断定にハツとさせられる。縄文時代から延々と続く

女の生き方を素足に見るといふ非常にユニークな一句。

投句先 千544 大阪市生野区勝山南1―18―10 小出 智子

投句先 千544 大阪市生野区勝山南1―18―10 小出 智子

投句先 千544 大阪市生野区勝山南1―18―10 小出 智子

投句先 千544 大阪市生野区勝山南1―18―10 小出 智子

投句先 千544 大阪市生野区勝山南1―18―10 小出 智子

熱

藤井正雄選



悲劇には弱くて胸が熱くなる
 熱い視線感じてますか眠る美女
 何しても三日坊主で熱さめる
 泣きことは言うなと語尾に熱が入り
 以心伝心 言葉はいらぬ熱い仲
 情熱に負けて結婚決めました
 わからせる熱のかけらもない講義
 熱弁へ口癖ばかり気にかかる
 着飾ってさびしくないか熱帯魚
 甘い声余韻を残す熱い耳
 情熱の女がくれる火の匂い
 熱少々用も無いのに母を呼び
 折角の余命歩幅を熱くする
 訥弁の中の熱意にほだされる
 情熱の余韻に揺れるイヤリング
 情熱と情熱 話まともらず
 余熱にも似た預金帳冷めるのみ
 熱病のように愛してすぐわかれ
 熱さめてみれば普通の木偶の坊
 熱血漢槍の四寸角愛す
 傷跡が喋る体を熱くする
 熱狂のファンに乗った不心得

旋風 良江 通彦 虹江 志洋 慶子 英明 あずき 正坊 清芳 時弘 愛論 重人 恭昌 白峰 兼治郎 ようじ 倫子 よし津 英王 友熙 高栄

熱くなり過ぎて私を見失う
 終着駅二人の熱はまだ冷めず
 情熱のままに歩んだ青春譜
 情熱が世界記録の生みの母
 死ぬ生きたる熱い二人がもう離婚
 今日もまた塾休まない微熱の子
 太陽から届くほどよき四季の熱
 恐い程熱い視線が追ってくる
 味よりもカロリーそんな歳となり
 都会への熱がさめない娘に困り
 熱帯魚玄関脇でよく喋る
 再会の余熱を外すイヤリング
 熱燭で治ると俺の医者嫌い
 微熱する情けが欲しいくすり指
 因習の土俵に埋めた恋の熱

保村 洛村 狸史 典子 薛児 可住 とし子 白光子 明水 和枝 諷云児 宣司 敬 正敏 はるお 薫 俊路 洋 しげお 武庫坊 希久子 吉川寿美

保存版そんな雑誌が売れ残り
 何処でどう借りて来るのか雑誌
 飢餓の児の裏にヌードのある雑誌
 たわむれに恋はするまじ古雑誌
 網棚で人の心を見た雑誌
 世の乱れ過激雑誌をあふれさせ
 週刊誌読んで老妻若返る
 雑誌だけ読んだ知識で身を立てる
 受託の雑誌半ばで名を呼ばれ
 雑誌から拾ったネタでぶつ訓辞
 今月号をもう売っている古本屋
 歯科の椅子痛まぬ雑誌ばかり読む
 惚け防止夫婦で雑誌読んでる
 汚れてる雑誌ではやる歯科の椅子
 村長がマンガ雑誌の政治する
 冬籠り雑誌は春を呼んでいる
 お婆ちゃんの知恵を雑誌で手に入れる
 平和だなフアツション雑誌よく売れる
 反戦へ女の雑誌燃えつつけ
 むずかしい漢字は書いてない雑誌
 車椅子旅の雑誌を積んだまま
 呼びとめてドイツシユにかわる古雑誌

雑誌

小澤幸泉選



ただし 愛論 鉄治 薫 アサ 元江 白峰 旋風 明水 正坊 保州 公弘 狸村 正敏 孝由 水煙 正子 希久子 宣司 しげお つえ子 佳雲

眼鏡のいる雑誌から遠ざかる
もの知りの妻の限界週刊誌
雑誌から都会の音が落ちてくる

立ち読みの雑誌空な胸を埋め
ひっそりと時代に消えた主婦の友
若者に日本の明日がない雑誌

キオスクで旅の道連れ選る雑誌
移り気な読者に媚を売る雑誌
主婦雑誌妻に味方をして困る

健康の雑誌を積んで医者通い
雑誌より話がはずむ受診待ち
思い切り雑誌を読んで馬鹿になる

礼節を守れば食えぬ雑誌記者
吊下げの見出しで読んでる雑誌
少女雑誌のままで女は母になる

老眼と雑誌 雨読は昼寝する
ばい捨ての雑誌に僕と同じ顔
知性派の隙間を埋める週刊誌

雑誌に載ると過疎も神秘的旅の宿
失業の暇を充たしている雑誌
雨の日は雨のポーズで読む雑誌

下車駅を慌てて降りた漫画本
天
軸
ルンペンも暴力団も読む雑誌
散乱の雑誌半生しゃべり出し

練る

春城武庫坊選



反論の言葉を練っている枕
蛸壺のなかで思案を練りなおす
練り歩く人人人の花の下

空っぽの壺持ち寄って策を練る
練り歩く稚子行列に邪気がない
土を練る早や陶工の顔になり

遠回りさすがに男練れている
策を練る監督の背が孤独
練りわさび添えたいような人と逢う

兼治郎 喬水 希久子
よし津 有一朗 ようじ
汗かかぬ男の練った机上論
絵の具練るムンク ゴッホになりたくて

練った文からポロツと落ちたバラの棘
土練った人の名はなし志野茶碗
自由化へ農しか知らぬ泥を練る

土を練るいのち伝えるまでを練る
練り上げた土へ祈りの火を放つ
案を練りすぎて玉虫色になる

練った嘘やつぱり妻の目が刺さる
練りに練る軍師に勝った蟻の穴
練り上げた殺し文句を猪口に盛る

練り上げた嘘に多彩な色を塗る
軸
天
練り上げた殺し文句を猪口に盛る

練り上げた嘘に多彩な色を塗る
軸
天
練り上げた殺し文句を猪口に盛る

練り上げた嘘に多彩な色を塗る
軸
天
練り上げた殺し文句を猪口に盛る

練り上げた嘘に多彩な色を塗る
軸
天
練り上げた殺し文句を猪口に盛る

練り上げた嘘に多彩な色を塗る
軸
天
練り上げた殺し文句を猪口に盛る

練り上げた嘘に多彩な色を塗る
軸
天
練り上げた殺し文句を猪口に盛る

練り上げた嘘に多彩な色を塗る
軸
天
練り上げた殺し文句を猪口に盛る

練り上げた嘘に多彩な色を塗る
軸
天
練り上げた殺し文句を猪口に盛る

初歩教室

題 — 姿勢

吉岡美房

毎回のよう申し上げていることですが、作者だけの思い込みが強くて意味がよくわからなかった句が依然としてあったことは残念でした。これはやはり推敲をよくやって頂くことしかないと思います。

また最近、課題を直接句に入れない句づくりがよく見られますが、これは勉強の一方法として大いにお奨めしたいものです。ただ課題の意味をびったり捉えているときはよいのですが、課題の意味の範ちゅうから離れてしまつと、独立した一句としてはいい句であっても、入選句として取り上げられなくなることも、入選句として取り上げて頂きたいものなのです。

それでは添削句から発表します。

君が代は年代別の姿勢して

幸夫

(君が代に年代別の姿勢見る)

七十五日過ぎれば急に高姿勢

義男

(七十五日過ぎて議員は胸を張り)

目が二つ欲しいだるまの腰の位置 芳郎

(目を入れるまでは姿勢のいいだるま)

井戸堀の政治家の姿勢求め得ず 忠治

(政治家の姿勢は誰も信じない)

衿正し不動の姿勢まねている 愼幸子

(衿正し姿勢を正す種も尽き)

領袖の姿勢問われて逡巡す 武春

(領袖の遺憾の姿勢空々し)

高姿勢な相手に損得言つとれず 美子

(日本の弱み握った高姿勢)

肩書きで鼻と姿勢が伸び縮み きぬ

(肩書きで変る役所の高姿勢)

前向きの姿勢でと言うしゃれて逃げ 敬

(政治家の洒落前向きの姿勢言つ)

気がつけば私の背も丸くなり 栄

(背の丸さ気付いて齢を考える)

定年後姿勢正しく空向いて 義子

(定年後会社社の姿勢まだ抜けず)

舞扇持てば背筋がしゃんと伸び あづま

(立姿背筋の伸びる舞扇)

母の背の丸みに添えて編むセーター ひろ子

(丸い背の母に合わせるセーター編む)

姑に似てくる姿勢古稀の春 ふゆ子

(古希迎え姑の姿勢に似てしまふ)

剣道のおかげと姿勢よい老人 節子

(剣道で鍛えた姿勢祖父にあり)

背筋張る姿勢チェックが似合ってる 隆

(春衣装背筋伸ばして若がえる)

前向きの姿勢で歩む余生の日 はる子

(前向きの姿勢が余生支えてる)

カメラの前で反つてポーズの母を撮る 志華子

(反り返るポーズ崩さぬ母を撮る)

おしゃれする人好もしい姿勢です 姫女

(帯締めて老いを忘れる立姿)

姿勢やはり良い警軍隊のメシを喰い 保夫

(生き抜いた姿勢さすがに戦中派)

瞳に浮かぶ直立不動の練兵場 秀香

(直立不動練兵場にある記憶)

姿勢よく暮しているのも味気ない 啓一郎

(かっこよく生きる姿勢で肩が凝り)

身が重く正座の姿勢すぐ崩れ よしみ

(正座して重い体に耐えられず)

毛皮着て猫背劣らぬファッションショー 友照

(毛皮着るための姿勢で疲れてる)

大胆な姿勢鏡は承知する 芳水

(大胆な姿勢に鏡うつたえる)

わがままな姿勢がとれる里の家 三重

(里帰りやつと本音という姿勢)

姿見に写る姿勢が怖くなる 正子

(姿見にお腹へこめて深呼吸吸)

反論へ思わず腰も上ります 章子

(痛いところ突かれて姿勢身構える)

家の中姿勢くずして二人おり 美恵子

(家でしか見せぬ姿勢でいる二人)

賞貰う時には姿勢気使うて 美寿子

(貰もらう時の姿勢を準備する)

他人様のところを値踏みする姿勢 幸子

(値踏みする姿勢になっていた自嘲)

臨時ニュースごろ寝も起きて見るテレビ 春枝

(臨時ニュースごろ寝の姿勢正される)

杜の姿勢従業員に頼られる 忠男

(受付の態度でわかる杜の姿勢)

ライバルの姿勢を少しまねてみる 延子

(ライバルの姿勢へ背伸びしてしまふ)

楼蘭の美女寝姿のさわやかさ 杏村

(寝姿がいいとは限らない美人)

皇太子同じ姿勢で手を振られ 弘子

(皇太子笑顔の姿勢崩れない)

向い風生きたる姿勢を父に見る 彩子

(風に立つ父の姿勢を楯とする)

消費者の姿勢を変える手をさぐる 君江

(消費者の姿勢を変える手をさぐる)

低姿勢さては何かの頼み事 君枝

(低姿勢ならちら見える下心)

低姿勢金借りてから横柄に 侑里

(金借りてからの姿勢の変わりよう)

商人を低姿勢にして不況風 ふさ子

(不景気へ心ならずも低姿勢)

赤提灯姿勢くずして飲むお酒 ますみ

(赤提灯それぞれ好きに飲む姿勢)

無礼講新入社員正座する 一乗

(無礼講正座くすせぬ新入社員)

この味にこだわらうつけ三代目 黎之助

(味守る姿勢貫く三代目)

落ちそうで落ちぬ燕にある姿勢 修光

(落ちそうで落ちぬ燕にある姿勢)

説教を耐つて聞く子の姿勢 志重

(はじめから注意聞く気のない姿勢)

向き合って踊る姿勢の良し悪しを ふみ

(ダンスするムードに酔って来た姿勢)

赤裸々に姿勢が星で貴ノ花 太一郎

(一筋に軌道修正貴ノ花)

伯楽のボスの姿勢に燃えてくる 渉

(監督の姿勢に応え燃えてくる)

袴穿き直立不動土筆坊 タミ

(袴穿き姿勢正して出る土筆)

戦災の父母五十回忌に正座する 暁子

(戦災の五十回忌の父母に座す)

布団入れザコ寝姿勢の難おくり しづ子

(寝姿で難一年を仕舞われる)

世の中に姿勢正してもの申す 松子

(物申す為の姿勢は持っている)

猫と老婆よく似た姿勢で日向ぼこ 幸雄

(日向ぼこ猫の姿勢をうつさされる)

姿勢正しく増々堅くなる夫 円女

(姿勢いい夫だけれど頑固です)

着想・表現ともに立派な句

ライバルに負けた姿勢を見せておく たもつ

意地捨ててからの姿勢にあるゆとり 芳水

本を読む姿勢で舟を漕いでいる 静子

ウインドに猫背の姿勢教えられ 金吾

一年生まるでおもちゃの兵隊さん 美智子

井戸堀の姿勢に遠い永田町 和子

隙のない姿勢が持っている孤独 ひろ子

することが一杯あつてしゃんとする みつこ

着陸の姿勢たのしい旅終る 節子

天と地を指して甘茶を浴び給う 高栄

美しい姿勢に年を読み違え 渉

前に行く姑の姿勢にある重み ますみ

座禅組む心の姿勢から習う 一乗

はめられてそれから姿勢崩せない 絢子

私の句

憲法に無い気を付けという姿勢 妥協する姿勢の僕が許せない



題「和やか」―5月15日締切(7月号発表)

宛先 千583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房



原稿は川柳塔社事務所へお送りください
毎月25日締切・30句以内厳守。所定の原
稿用紙に清記をお願いします。 編集部

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

カーテンが variability 女もまた variability
カーテンは引いたまんまの風邪こもり
産声をようやく聞いて安堵する
主治医からようやく許可が出たお酒
眉だけが出世したよな奴風
太い眉嘘のつけない父の顔
そのときの眉の動きを見逃さず
眉薄い女が辿るけもの道
仁王さん眉の威嚇に春の風
風呂上りうちの女房に眉が無い
あぶな絵の眉が動いて春の闇
入り相の鐘に眉毛がぬれている
メーカーアップ眉に重点置く主役
損をして得をとれとも言わはるが
ボランティア損得越えた喜びが
商法は損して得を取れと言っ
損得の間でゆれる株に泣き

澄子 園歩 尚利 正治 萬代 佳秋 正子 伊三郎 武庫坊 紫香 二南 まさお 早苗 キク子 勇次郎

絶対には損はさせぬと乗せられる
九合目ですつても損をする男
損な役みんな誰かを当てにする
竹割った気性がいつも損をする
カッとなる短気損とは知りながら
もう一度のるかそるかの時がある
だまされたふりしてだますきつい女
ビッグニュースいも知ってるおばあさん
桃の花すぎし日の夢母の夢
頼まない事まで世話をやきたがる
蛸壺のひとつひとつにある孤独
あどけない顔して父を越す背丈
人妻に戻るいつもの曲がり角

川柳化粧槽

植村客遊子報

風邪三日妻の重さを噛みしめる
慶祝のニュースへはしやく初春の風
父に似た人をいつしか追っていた
つんとした女出て来る門構え
蟻の列はなれたいの肥満体
さよならと手を置いた肩がふるえてた
ゆげ立てた鍋へ主役が席着かず
生きて行く術のひとつと思っ嘘
置き忘れ年齢の故にする
同病の励まし明日へ生きる糧
小さい庭梅の木一本満開で
一合の許可が出たのに二合飲む
旬の味教えてくれる路のとう
度が過ぎた洒落うわさの種になり

昌子 正一 渉 女 風云児 行隆 吉太郎 英子 フクコ 白漢子 真柳 鹿太 薰 岳詩 サワ子 朱玉 葉香 礎石 悲子 奮水 雨雀 治夢 遊峰 はる女 美代 嘉 早苗

プリンセス決意新たな父母の顔
死なれたら困る妻だが留守もよい
南南東へ寿司丸かじり鬼笑う
ちぎり絵の顔入れ替えて春を待つ
親切があだ花となり友がへり
道ならぬ恋は人目を避けて生き

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

舞の海飛んで土俵を盛り上げる
平成のことしの風を梅に聞く
思い出の裏町少し回り道
飯どきがそこそこ当る腹時計
水子地蔵に盛ってあるわらび餅
外出のときだけ動く腕時計
静に居て動へる備え忘れない
幸せを盛る皿白と決めてある
八十路まで生きて明日へ夢を盛る
一盛のリングに落とし穴がある
裏町の店でわずかなついで飲む
裏町ではぐれた女それっきり
常連は時計のようによつて来る
逢いにゆく吊り橋今日も揺れている
母さんの時計一番早く起き
青春を盛るシャンペンが天を突く
子を叱る言葉へ愛の盛り加減
集会所の時計合ってたことがない
貧しさに馴れて弱気の虫を飼う
別れたい男の飯を盛っている
義理チョコでせめて無沙汰を詫びて置く

茂章 春蘭 姫女 はる子 一典 客遊子 伸子 森生 一進 一葉 冬葉 彰一 庸佑 ひかり 明人 佳秋 スミ子 波留吉 女 瀧小 恵美子 静江 英一 しげお 薫 正坊 二南

三次会は裏町にあるママの店
すこし遅れる時計でいつも待ち呆け
せめてもの孝行仏の花を替え
主賓座をはずし宴会盛り上がる

子期できぬ明日があるから夢を盛る
待ち呆け同士にらんでいる時計
弁解は止そう惨めになるばかり
諷云児

川柳塔おっぱひ吟社 木村 明人報

天秤にかけると主婦の座が重い
ドン底で秤に掛けている人情
お早うと先手を打って角がとれ
人生の三叉路やっぱり迷い道
古里へ飾る錦がまだ織れぬ
みんな良い句持つて来そうな顔ばかり
美しい夕陽だ明日も晴だらう
勇み立つ心押さえて薄化粧
頂きますこ馳走様で日が暮れる
さしのべし手に縫り来し二歩三歩
此の町に甘えたい人居て嬉し
成否か雲行き見てる第三者
病院を出れば空気を腹一杯
蟹さけて爽やか笑顔の嫁と来る
枯アシよ昨日の友はもう仏
御詠歌をあげつつ遍路の春日和
開発に大地の叫び天を呼ぶ
黄恒に効くと毎日寒蛭
言わずんばかかずに済んだ恥もあり
三輪車小さい頃の宝物

川柳クラブわたの花 片上 英一報

世界中をまわつてみたい車椅子
世界観異なる人と旅に居る
頑固一徹老父の世界に見る美学
井戸端も世界問題論に合い
世界中が日本の財布あてにする
世界広し私の産んだ子は二人
世界からうらやまれても兎小屋
十年後どんな世界に生きるやろ
お小遣い酸欠らしい子の世界
こましゃくれ大人の世界コピーする
今世紀世界平和は声ばかり
輸入米に産直農家狼煙上げ
家出した猫に懸賞金をつけ
春の夜の恋する猫に意見する
猫の手も借りたい時の長電話
不景気でキャットフードも残りのも
政治屋にはおカネ猫にはカツオ節
猿山のルールに似たり永田町
ルール違反記憶にないといひ逃れ
暴走音あまいルールに後断たず
値段だけ輝くタイヤで辛抱し
四季の花あふれ季節のないハウス
寒くとも日々に花咲く庭水仙
水仙の毅然と咲きて喜寿の春
千杜札花の御堂にあるかけり
花びらを交互にとつて夢をかけ
かわりがないようである世界地図

川柳塔あおもり 小寺 花峯報

苦労して育てた子らの口答え
口元がゆるんで愛を創り出す
口元に男なかせの鍵がある
口癖が何とか成るの母でした
芝生あり口先だけのマイホーム
大ばらを吹いた隣の嫁の口
モノリザの微笑を借りてめでたい日
地吹雪に負けぬ男の鼻袋
鼻声で世界歴史を塗り変える
伸び過ぎた鼻毛で遮断機上らない
口許が可愛いくせに生が出る
口止めをされて重荷の石がある

佳句地十選 (4月号から)

榎 本 吐 来

逃亡の男も混じる踊りの輪
初詣絵馬の数だけある願ひ
点字読む指にかすかな灯が点り
終点に着くまで夫婦演じきる
科学者が易者と何か話してた
頭打つ度に男の顔になる
茶畑のみどり絵にする赤だすき
母親が先に決めてた希望校
他人はめる眼鏡にかえている老後
秘書一人消えて真相闇のまま

ぬけぬけと何をおっしゃるその口で
写楽の口不満の粒が飛びそつだ
グラマーを見る目に焦点定まらず
窒息死かまいませぬと目が申す
君の視線でダイナマイトになる私
念仏をまじめにきいた馬の耳
知りすぎた鼓膜が突如石になる
無縁塚鼻骨が一つ見あたらんぬ
ほほえみの陰に夜叉が見え隠れ
野仏のほほえみに修羅遠くする

川柳後楽吟社

従野 健一報

嘘つきはいないか手のひら陽にかざす
結果待つ一日長い胃の重さ
節分の鬼年金で助けられ
鉄塔の影伸びてのび陽が昏れる
身のほどを知りぬき余生をたじろがず
株は値下り退職金は血のしずく
焼酎を注いで今宵の愚痴をきく
すんなりと妻の言葉信じない
又ひとつ唄を覚えたデーサービス
義理だけの黙祷一分長いこと
わが日記週休二日始めてる
失意どん底でも明るさを失わず
おいらくの恋が芽生えるバラの花
芝焼きの煙が春を呼びに行く
冬の酒ひと恋しくて電話魔で
渡る世間にあまりに鬼が多すぎる
ゆらゆらと輪廻の煙何処へゆく

千加子 シネ 堅二 和香子 嵐蝶 一路 黙人 五楽庵 生恵子 久男 草風 拓治 柳五郎 博友 義親 青銅 哲郎 吟平 佐加恵 金吾 桃風 邦季 正秀 道博 健一 照路

いずも川柳会

吉岡きみえ報

木の芽どき忘れた傷が疼き出す
風丸く温い新芽を抱き寄せる
椰子の実の生きているものが流れ着く
父の樹の下から強い芽が育つ
悪の芽を摘み取る鉄見当らんぬ
愛の芽は許す言葉溜めている
老樹なお耐えて小さい芽を育て
裏打ちが効かなくなつて老いてゆく
里帰りの無口な裏を既によむ
裏からの進言的を衝いている
B面に流浪の果ての詩がある
半身赴任男の裏が干してある
裏のない人で誰にも好かれてる
裏道に昔話が落ちていて
裏通りに人情話埋めてある
喝采はいつも舞台の裏で聞く
裏方と心の通う名人芸
裏の儲けは所詮裏でも落ちつかず
秀才に育てて母は淋しがり
飽食で丸々育ちやせたがり
父の背をはるかに越した食い盛り
伸び伸びと育つて親の視野を出る
舟も漕ぎ若布も刈るよ島育ち
妻の舵信じて平和な灯に生きる
国境のない空が病む酸性雨
真つ青な空へ咲阿が通じない
青空に夢がはじけるシャボン玉

寿美 かおる 章峰 リチエ れいじ 祥庵 水煙 美佐子 律子 軒太楼 青湖 雀踊子 蘭水 叮紅 克子 知恵子 満江 明朗 美磯 義良 篤子 ちかし 幸一 房子 多賀子 裕 まこと

少年に汚さぬ空を渡したい
ふるさとの空に女の過去がある
少年に描きたりない空がある

川柳大阪

高須賀金太報

国会はぬくい歳が寝る議員
万歩計帰りはタクシー鍼やいと
出来るだけ真面目で行く今日だけは
相槌に自分の自慢ちよつと入れ
正論をかざし男と言う孤独
ひたむきに生きて絵になる夫婦愛
昨日今日朝の明るさ肌が受け
ひな人形団地サイズが以合う部屋
残業のない父さんひな祭り
さりげなく返す言葉にある情け
返せとは言わずきつちり取る担保
返す矢は俺の急所を突いて来る
なつかしい歌手の涙がつづる歌史
音程のズレは気にせぬ歌手気分
歌手よりもつまみと冗談ほめてやり
孫入試終わる戦争すんだよう
日々戦 血圧今日も攻めてくる
茶柱へ今日の作戦練っている
作戦を練った娘に酌をさる
ほんばりに灯を入れ幽玄に遊ぶ

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

佐吉 文子 代仕男 亮太 柳弘 川童 雅巢 希久志 与呂志 一步 鉄心 美津留 重人 洛醉 余四郎 比呂志 泰宏 しげお 我勝 本蔭棒 まつお 金太 保子 亜弥

コーシヤルの中からヒントわいてきた
今せねば後ろ髪まで引かれそつ

今のままでいい幸せにひたっている
今だから言える話を聞かされる

夜に海誰に語るかひたひたと

ひたひたとノックをくれる春の風

ひたひたと大根の花の咲く陽気

ひたひたと寄せるレリーフ溜めている

ひたひたにつかつた母の子守歌

ひたひたと貧乏神が寄って来る

ひたひたと同じ歩調はSPだ

ひたひたとせまる時間が振り切れぬ

ひたひたと牛井が来る寿司が来る

ひたひたと枕がぬれる口惜しいよ

喜怒哀楽がひたひたと意見する

ひたひたと豆が煮え出すそんな午後

明日のないう活魚が跳ねる箱の底

巢立たせてひたひた波立つ夜の枕

妖怪の足音かしらひたひたと

ひたひたの水に金魚は旅に出る

ひたひたの響く両手で読んでいるはがき

結び目をひたひた濡らし母が来る

ひたひたと迫る鶴との別れかな

ひたひたと背後を水が突いてくる

川柳ねやがわ 高田 博泉報

北の海冷えて四島また霞み

日記帳彼女二十歳のままでいる

子育てが終わってベットの考える

広告のバーゲン商品泣きじやくり

渋滞の道を覗いているベット

とも子 由美子 八重子 玲子 富美子 恵子 晶子 高代 天雀 ゆき 正子 松子 てい子 ふみ 瑞枝 花子 寿々子 千春 夕子 荒介 千代 日枝子 高栄

肩の荷が降りても靴は減っていく

冷え切った心へ旅のなきけ知る

春一番に負けぬ嵐が吹きました

肩肘を張りなさんなと春の風

暗号の日記に男みえ隠れ

冷え切った体にしみる屋台酒

眺望のよいとこに建つ広告塔

空白に愛燃えた日の日記帖

留守番電話が孫にも行儀よく喋る

あと少し届きかねてるホッチキス

停年で己を探す切符買う

求人広告めがねかけて見る

ベットにも読んで聞かせるいい便り

日記焼く炎の中に浮かぶ顔

合格の日から少年とより戻し

金魚の死子は悲しみを土に埋め

人道のように勇気が出せたらな

雪空に広告が舞う大ジャンプ

税務調査のハガキ冷たい文字で来る

広告のこんな所に落とし穴

妻病んで空白ばかりある日記

兎はサクラ猫は寅次郎と申します

甘酒が効いた男の饅頭だ

ボンボリに広告の文字花吹雪

何事もなくて日記の字も静か

城北川柳会 吐田 公一報

折々に自分に試験して生きる

この息子俺と女房の自信作

たもつ 一風 恵子 光子 かすみ 藍子 まさお 静江 あやめ 洋 黎之助 三郎 権太 勝一 時弘 ルイ子 頂留子 良三 速水 庸佑 紫香 菜月 冬葉 英壬子 度 典子 秀夫

焼きもちをほどよう焼いて愛が増し

謎解けぬままの大きな鉛穴

全力で君を守るという自信

叱られて育った子らが父母慕う

一人居の無事を祈りてラブコール

嫁した娘の手を撫でてみるその固さ

叱られる子よりも辛い叱る親

謙遜の影で自信が炎えている

あす試験徹夜へ母も針仕事

花の声よく聞こえる造園師

ハイハイ最後のハイで叱られる

朝市のぬくい老婆の国説り

不器用な友カニングだけ得意

貴りえ破局身内のように気が揉める

白梅の一輪こころの刺を抜く

虫のよい願いが絵馬に書いてある

毎朝を祖母の読経で起こされる

キナ臭い事起こしては国も病み

願かける水かけ不動苔衣

その親を叱りつけた子のモラル

陽だまりに一枝ゆれる影法師

水道のように勇氣出たならな

声だけは元気でいつも病んでいる

あの声にかかってみんな騙される

川柳若葉の会(前月分) 宮崎シマ子報

すし回る一枚二枚お菊かな

節分の端悲しい眼を向ける

となりから一皿嬉し煮豆来る

千世子 史風 寿美礼 八重子 昭子 ふみ 白峰 静子 あい子 春蘭 一枝 政子 登美子 達子 倫子 久留美 仙吉郎 行子 満津子 佐津乃 頂留子 柳影 公一 英一 清芳 暁子

反論は皿を洗つてからにする

団樂の温もり胸に皿運ぶ

灰皿の細めの吸いさし疑われ

お隣へ行つて帰らぬうちの皿

受皿へしぶしぶ呑んだ火付け役

ソマリアの子は皿を紙め皿を紙め

フルコース次のお皿を期待する

皿いろいろメニュー次第で使いわけ

油断するとすぐ灰皿になりかねぬ

お屋敷にいつか割りたい皿がある

フルコース男は皿の教言わす

八尾市民民柳会

宮崎シマ子報

賞め殺しみたいな花束贈られる

咲いたとて花も女も散るものを

通り雨花屋のバラが微笑する

きつと勝つ医者を信じて飲む薬

誘惑に勝つて淋しい夜を過す

勝つた日の鼻が一日上を向く

競り勝つて反省会の席に居る

姑に勝ちをゆずれぬ嫁になる

栄転へ勝利の顔で出る杜宅

人気税虫が刺したと貴の花

タイエットなど考えぬ女王蜂

友達にまだ出合わないかたつむり

悪友が知つての僕の好きな虫

雨一過行くところが有る蝸牛

啓蟄に浮気の虫もそぞろでる

虫の音がピツタリやんだだけの道

慶子

光子

留吉

宣司

田実子

欣史子

能子

千枝子

洋

あずき

薫風

柳宏子

英一

信博

三男

信治

美津留

朝子

外吉

しづ子

度

湖風

重人

覚然坊

隆

弘直

絵日記の虫は横笛吹いている

Uターン里の自然に叱られる

芽吹くものみな美しい大自然

シャネルよりつましく匂う沈丁花

深海艇海の神秘を目の当り

島倉千代子の乳癌伝える春の冷え

不況不況少しニュースのあおりすぎ

ふるさととは桜開花というニュース

内定取消しニュース流れてたそがれる

脱税のニュースが凍る申告期

学校の兎が死んでいたニュース

ニュースは晴れず出発の靴をはく

腹の立つ電光ニュースの寒い駅

過労死のニュース夫の顔を見る

京都塔の会

松川

杜的報

ひたむきな少年の瞳だ裏切れぬ

ひたむきな老父の話へ豆煮える

ひたむきな話へ鍋が煮えつまる

ひたむきに過去を償う墨衣

埋み火のひたむき春の彩となる

怒るのも叱るのもひたむきな父の愛

恩人を真綿は淋しがらせない

綿菓子を持った迷子がいる祭

車窓より見えてかくれて綿ぼうし

糸垂れたそばで大きいのが跳ねる

海を見てのんびりさせる糸を垂れ

幼な子も頭を垂れる原爆碑

カメラアイだらりの帯を追っている

一風

甘平

柳伸

正子

宏子

夕花

春子

シマ子

勝美

美幸

欣之

悦郎

頂留子

透太

百合子

萬的

杜的

英子

真柳

求芽

しげお

白溪子

寿人

庸佑

飛鳥

倫子

栄

お百度の素足見とれる枝垂れ梅

許されて悔いの重みにうな垂れる

粗末にはすまじ私の二十四時

人間をお粗末にする読み違え

騙し舟粗末に折つてたまされる

粗末にはしないと貴方言つたはず

お粗末なテレビへ猫があくびする

外面の割に粗末な台所

豊かさに慣れて粗末が常となる

国会で粗末なヤラセメモを読み

立読みで仕入れた知恵ですぐ消える

お粗末な土産言い訳多すぎる

天寿全う集まる顔に笑みさえも

初春の土手で少し詩人になつて

厳肅に山焼きの火の音を聞く

ひとりだけ入るお風呂をあふれさせ

風見鶏自分の風をみうしなう

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

雨期最中予報信じて損をする

喉我慢無情の鐘が一つ鳴る

除夜の鐘余韻に心洗われる

幸せと向い合つて冬こたつ

鉛空に鳴神走る冬の大

明治の父へ柱時計が鳴る老舗

げんこつで涙を拭いた悔しい日

ウエディングベル鳴らした誓った永遠の愛

出産を嫁はようやく決意する

昌子

向西

澄子

鹿太

六浦

尚利

十四郎

正治

末貞一

勇次郎

水客

笑子

達子

はつ絵

てる

芳子

メ女

キク子

英一

年代

薫

正坊

ただし

欣之

福子

諷云児

修水

子を守る決意馬鹿だと言われても
潔白を信じてくれる青い空
十代の恋潔白のまま終わる
つまみ食い潔白の貌してる猫
獄窓の月へ潔白訴える
寒天の月が潔白見てこざる

西宮北口川柳会

林 はつ絵報

くしけずる母に女がまだ匂い
石女の櫛が迷路に落ちている
カラフルな櫛に心の飢えがある
櫛の歯が欠けてわかれの予感する
亡母の櫛忍の形に減っている
櫛一つにもこだわって舞扇
黄塵万丈騎馬民族の幻か
玉音放送ひまわりの黄はうなだれる
黄金のメダルに勝る老父の汗
嬉しい日卵の黄身が盛り上がる
徳川の黄金伝説夢を撮る
雪の中マンサク春をつれてくる
へリコプター菜の花の風舞い上げる
踊ります過去に悩みは振り捨てて
おどろ疲れているのに芯が眠らない
屈託は見せずネプタの夜おどる
皺幾つ増えて手相が変わり出す
無神論者がみくじ作りのアルバイト
占うて貰うて酔いが冷えてくる
占いの悪い運だけよう当る
鯨小紋占いの灯に沈みがち

弘治 すみ 歌子 夢之助 紫香 いわお
正坊 正一 諷云児 たず子 富喜子 能子 武庫坊
きよ津 江美 早苗 義子 哲子 トミエ 年代 文
ひろ子 白漢子 しげお みつ子

つるの舞終えて旅立つ冬のその
わくわくと数種選んだ花の苗
指切りの好きな小ゆびを持て余す
方向音痴の犬で放す帰らない
まだ脈があるので文句言いにいく
ロボットにあとをゆずって職場去る
春はそこ心の隙で風邪を引き
怒濤のように恋はわたしをおびやかす
隠居所の机においてあった櫛

川柳塔わかやま吟社

宮口 克子報

沈黙の席へ灰皿取り替える
直感へおんなの帯を締めなおす
少年の夢の彼方で光る海
安堵した蝶が舞い立つ父母の墓
あつこの人が私を託すお婿さん
園児らの蝶の絵ホーム春になる
邪な心に光らない眼鏡
花冷えへ沈黙の背な丸くなる
沈黙でどうにもならぬブレッシャー
十字架の前で沈黙破られる
白無垢の蝶よ迷わず翔んでゆけ
沈黙を火消しの壺に入れておく
菜畑へ入った少女蝶になる
おとぎの国で蝶つくしく生き続け
見限った蝶の行方を探してる
老優の沈黙長い台詞だな
蝶よ花よと育てて他家へやる娘
光芒の中で乱舞を見る舞台

涼子 静子 英子 柳影 透太 絹子 春蘭 いわゑ 紫香
英子 結実 アサ 登志代 紀久子 千寿子 稚代 公子 輝子 三枝子 好笑 信子 寿子 栄美子 太茂津 勝 吞天

真実を模索している迷い蝶
直感で二人の仲がすぐ判る
卒業の子と光る海眺めてる
四面楚歌黙って聞いて策を練る
擦れ違ひざま六感にきた尾行
沈黙へ失うものがない余生
道草の相手を蝶がしてくる
初蝶の生きる高さの風に乗る
川底に明日を信じて光る石
直感がずばり当たった一〇番
直感で猫が見分ける猫嫌い
夢叶う日まで毛虫のトボケ顔

倉吉川柳会

渡辺 苦句報

魚屋のおやじ元気な朝をくれ
Gパンが丸いお尻を自慢する
念入りがセツトを乱す風が憎い
元気ですかと声をかけた人がある
念入りに政治のうみを出さう
まだ元氣それでも薬飲んでい
醜聞を喰うマスコミの犬となり
八起き目の首は念入りに洗う
平凡に生きマスコミと縁がない
健康をチェックしている丸の数
肩書きがとれて話が丸くなる
夫婦喧嘩放っておいても丸くなる
マスコミ除けのスプレーを売っている
四世代住んでまあいい語をさがす
カミさんが元氣過ぎて困るんデス
柳風 美智子 喜美子 京子 さかえ 正雄 蛭 御前 美由紀 ゆり子 かつみ 寿朗 とみお 秋女 石花菜

根まわしが念入り過ぎて勘ぐられ
物申したいことが山ほど丸い石
念入りに洗うとボロが顔を出す
念入りにきびの顔の手入れする
元氣なら何を食べてもうまいはず
マスコミに俺も一度は追われたい
風の便りあまり元氣がないようだ
マスコミの笛に雀が踊り出す
夫婦して長年丸を書いて来た

川柳塔とつとり

武田

帆雀報

和枝 節子 幸子 邦俊 秋草 十六夜 加代子 よしえ 独歩

花粉症風が吹かねば医者いらぬ
寒い風吹けば真つ白つるし柿
風邪引いて夫がお粥を炊いてくれ
喚問は馬耳東風で丁寧に
車座の外で反旗の風起こす
若き日の努力老後の風温い
寒風に追われて止まる縄のれん
母の手の温み初心の邪魔をする
歲月が流れ初心を見失う
初心者の癖に理屈は知っている
初心者の無欲ベテラン負かされる
家裁から初心にかえるちぎれ雲
裏口に初心者向きと書いておく
流れ矢に遇って初心に穴があく
子や孫が囲みチャンチャンコで祝う
百までは待って祝いを延ばしてる
祝うのに東京までも出かれます
祝いごと増えて神主はしごする

揚芝 宗吉 侑里 輪多朗 英美 銀嶺 明美 静生 鬼桜 のりゆき 喬水 黙光 公弘 帆雀 多可志 俊路 一行 枝

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

お祝いが続いて眩暈する財布
すばらしい祝辞コピーをしたくなる
恐ろしい話は雪が降る晩に
半日を図書館にいる春の雪
かに鍋がおいしくなると雪がくる
しあわせが仄かに見える雪明り
雪に晒そう女心の裏おもて
美しい花が嫌いな雪おんな

珍客にあわてる妻の苦勞性
珍客へ何もなくてとしじみ汁
珍客のせいにしている二日酔い
珍客の一人に私もなっていた
珍客の都合に合わせる台所
音痴から喉によく効く飴もろた
何んとなく音痴にさせる忍ぶ酒
合唱団からはずされた音痴の子
音痴でも妻のタクトにある和音
音痴だが祝う米寿へ安来節
音痴でも聞く事は好き春の唄
こじ開けるドアに予感がした不吉
待望の眼帯とれて視野開く
五指開く風は温いものと知る
一筆を入れて開眼する仏画
胸襟を開きコップに替える酒
開き直りを覚えて女強くなり
叩いても開かぬ扉もある世相

艶子 圭一郎 山人 一京 由多香 しげる きみ子 螢 清子 軒太楼 ちかし 邦代 雄々 祥庵 秀子 多賀子 房子 みえ 早苗 幾子 寿美子 鶴丸 与根一 太泡 長三

翠洋会

渡部さと美報

不景氣が何時も背中におぶさって
不景氣に女は足を誇張して
不景氣で眉根のしわが消えません
不景氣で休み風邪でまた寝込み
不景氣な顔で売ってる三枚目
訳あって親はライバル子は親友
ライバルの尻尾左に巻いている
ライバルの後ろ姿は見たくない
ライバルが通った道だから曲る
ライバルにバラを一本贈ります
踊りながらライバルに出た弱氣

御成婚平安時代今にする
嫁が来て私の時代線を引く
酒と唄あれば男は花吹雪
酒好きは注油と言つて縄のれん
いいお酒ゆつたり話したい人
人生の勝者を叱る者はない
ネオンきらきら水割りの嘘美しい
酒の席何としてでも都合つけ
なまけ癖私を叱る春炬燵
芯のある部下を叱って氣を解す
時代屋の店に入れば祖父の声
酒飲まぬ役者が酔った真似うまい
冷や酒は男の涙知っている
腕白を叱り元氣をほめておく
婚約時代猫をかぶっていたらしい
はるあきの旅が絆の核家族

米子 畔 友子 草丘 芳枝 静江 章峰 静恵 桂子 登志子 町紅 久峰 友美 英一 拓生 さと美 蛙 希久子 叡子 登志子 佳秋 恭昌 東雲 正坊 正雄 楓楽 千歩

叱られて気付く息子の肩の中
子を叱りながら親父を思い出す
叱られた翌朝湧いてくる感謝
木曾路は春わたしを洗う旅に出る
我が命けずればけずれ好きな酒
大阪弁で叱られたので助かった
平成だ明治の顔でやつこらさ
金箔のお酒いだき二日酔い

川柳たけはら

森井

青居報

手ぶくろはもういらぬよ春ですよ
桜咲いて春の笑顔を見せてくれ
火渡りの眼のやさしさはなんだろう
婚約期七色の虹追い給え
春うらら私一人の仏間の灯
老いしかな柱の傷が高うなり
信用をされたか駅で荷物番
何見ても光って見える老いの春
生き抜いて進む世界に馴染みたい
古時計明治の時を指したまま
春またず逝く人あまたきのうきよう
切り捨てたつもりの義理がついて来る
まだ生きている気でしましむ不要品
ときどきは字引にされて孫と住む
立ち入った事は聞かない冬木立
許せないひとを最後の日に許す
するめスルメとつても苦しうに焼け
言いたいこと言い合い姑とティータイム
白菜の大きなおしり亡母に似る

ひろ子 宣司 光子 みつ子 兼治郎 春子 綾子 鬼遊
小千枝 中史子 蘭幸 菁居 麻代 浪子 愛子 喜久恵 清水 夏喜 一枝 静佳 栄恵 房子 貞子 笑子 千代美 比呂子

だーまっで男が釘つけている
まだ余白ある人生に絵の具溶く
娘を託す青年の手の温かき
酔っているときの答は二つもつ
清貧の思想を学ぶバブル以後
意地張ると風が冷たくなってくる
ぼんやりとしてはおれない血糖値
束の間を詩人にさせる冬景色
南国育ち手も足も出ぬもどり寒
立春が来て太陽の輝きぬ
寄り添って遍路の旅も三年目

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

より添って小鳥はきつといい話
五時からの女デートの紅を引く
霜の朝百舌鳥が高啼く冬木立
ゴミ袋暮しそれぞれ捨てられる
日本の生き方変えなポリ袋
ストレをしばい溜めて籠の鳥
お気に召すも召さぬも皿の所為でない
雲雀あがる陽気へひとり肩が凝り
孫下宿信玄袋さげて見に
七福神笑い袋を下さいな
宣伝はお互いさまよ紙袋
相談をしたなと思ふ慰斗袋
知恵袋嫁へときどき借りに行く
うっかりと渡したメモが切れに
スーパ一の袋男の地位かえる

不 朽 一路 伸子 政己 静風 蝸牛 美佐雄 白狐 明子 八重美 現代

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

懸賞金休むに似ても考える
物真似をしてついでくる影法師
ゴキブリも酒が欲しいか盃の中
降る雪に心何時しか夢の中
今日もまた晴耕雨読は夢と消え
皆さんのご恩を受けて八十を生き
ごめんねと詫びて和やか箸を割る
お目出度が続いて財布泣いている
年金でゆたかな老後とは言えず
今日もまたときめきたくて勝負する
梅の枝切る決心がまだつかぬ
髪型を変えて今年へ身がまえる
農民の足並み狂う米相場
ねこ炬燵うち一軒と母いばる
ビクビクと傷跡かくし生きている
本だけじゃ若い心は読みきれぬ
先輩も後輩もない民主主義
来客は部屋整理のチャンスです
年の瀬に机並べた友が逝き
身にあまる美人めとつてなげき節
来る春を忍んで梅が咲いてくれ

岸和田川柳会

田中

文時報

種明かし仕掛けは人を食っている
豪勢にサラリー飛ばし酔っている
薄っぺらなサラリー僕の値打とは
好きだから素直にハイと返事する

良二 正雄 寿満湖 秀峰 梅朗 野草 八太朗 勝見 孝恵 玲子 佳女 よし江 信子 ひさ子 松盛 小生 玲泉 春帆 幹夫 弘朗 二南 勝晴 ダン吉 狸村

好人物でした遺影を慕われる

好きなことさせて手綱はゆるめない

好きなものとあとに残してみな食われ

目白さん来てはる掃除の手を止める

割当てで溝掃除する隣組

お喋りがまだ弾んでる庭掃除

もたもたの蜘蛛掃除機に吸込まれ

掃除機に昨日の愚痴を吸わせてる

四帖半鳴極楽の耳掃除

板ばさみ妻と母とに迫られる

鬼気迫るアイヌコタンの火の祭り

川柳岩出

小倉 アサ報

夫唱婦随似合いのドラマ演じ切る

初午に動かぬ父の植木市

初午が春の足音連れてくる

色なおし主役不在の披露宴

エプロンの似合う娘でよいマイホーム

力量と風格似合う綱の席

初午へ妻が代理の厄払い

似るも良し似合わないのもこれも良し

餅をまく付き合もない住宅地

帯結ぶ似合わなくても似合っても

円熟の袴姿に似合う人

いつになく似合う家内の髪形

男装が似合う女の背のなやみ

年越えたしゃれた身なりもよく似合う

宝石の似合わない手が頼もしい

出世欲宴の席を注ぎ回る

真直ぐに歩き軍手の似合う父
一人だけ宴たけなわに酒を避け

岩美川柳会

羽津川公乃報

気分入れ換え鶯の声を聞く

春の風めきめき新芽顔を出し

悲惨だなめきめき事故のグラフ伸び

愛のむち耐えてめきめき化粧する

春ですなめきめき梅も化粧する

めきめきと独居老人増える過疎

めきめきとノルマを稼ぐちびた靴

運動不足めきめき骨の軋む音

桐の木はめきめき伸びて娘は嫁かず

めきめきと女の嘘がうまくなる

師の影も踏んでめきめき技磨く

病む地球めきめき軋む音がする

めきめきと自信が壁をつき破る

負けん気がめきめき父を越えてゆく

川柳ささやま社

平野百合子報

気まぐれの旅一度だけ一度だけ

胃カメラに心の秘密さぐられる

気まぐれに咲いた浮気の花一つ

別れた後プランコだけが揺れている

桃の実が熟れて別れが辛くなる

夕焼けと別れを惜しむ道祖神

ときめきを和服に包む古希の春

涙とはさよなら虹が欲しいから

雪しきり父が近頃妥協する

忠雄 与呂志

喜与志

喜久代

嘉津江

美代子

公乃

善幸

美恵子

幸枝

大漁

忠良

單車

照女

螢

とよ子

純子

恵美

つや子

市三

ヒサ子

和子

富美

芳郎

風呂敷一枚こんな用を足してくれ
和服着る女心に四季の彩

勇退へ送別の辞がきれい過ぎ

やがて老いる日へ新しい辞書満たす

着たおれの美をことさらに京舞妓

川柳東大阪

森下

愛論報

結願の数珠に美風がきつとある

美しいニュースが欲しい春の沼

女文字過去美しく住む文箱

窓開けて重い空気を出す会議

皆力合わせてうひとりで持てぬ石

うぬばれと見栄の重たい荷を背負う

子の罪に重い十字架背負う母

スタートは皆一着の面がまえ

スタートに約束事が一つある

仮縫いに客の人柄知る背広

職人の背広巾いかと聞かれ

スマートな背広に着替え退院日

おじん臭い男が着てる三つ揃

サムライの背広正しい方を向く

どて焼きと合わぬ背広の新世界

スタートは急かす慌てぬ長丁場

社会人第一日のカレンダーめくる

酔うほどに重い口元軽くなる

ほたる川柳同好会

井上

直次報

人の倍祈って絵馬を一つ書く

センセイが赤じゅうたんの立話

文平

テル

靖子

可住

百合子

猪太郎

元紀

久子

信久

章久

晋吾

頂留子

勝美

隆

美子

愛論

文秋

湖風

太一

庸佑

恒明

東雲

直次

お隣と差をつけられた立話
死んだ子の仏間で祈る透き間風

運命も祈れば少しかわるかも

帰る娘と出かける母の立話

聞き役で腹のふくれる立話

二歳児が転んで終る立話

ホットニュース仕入れた先はわかつてる

救急車見送りヒソヒソ立話

行先の気になる相手立話

立話今朝の行事が一つ済み

子や夫さきに帰して立話

立話すぐ帰さない人に会い

キリストに祈り釈迦にも手を合せ

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

足跡も可愛いさかり叱られず

初孫が小さな野心持つて来る

甘酒の旗がゆれてる峠茶屋

甘酒にホンノリ老いの春炬燵

甘酒で三三九度のおままこと

あくせくと稼いだ金が死出の旅

田舎から効くと届いた家伝薬

不機嫌な鬼に嗅がせる鼻ぐすり

襟足が父に眩しい娘の晴着

厚化粧した襟足のどき回り

襟足に匂う色気の舞い扇

川柳塔唐津支部

久保

正敏報

敵一人見えぬベンチで眠くなり

虹汀

馬洗

一笛

吉太郎

英子

敵子

喜美子

昭子

しずえ

方郎

眞郎

博史

宣司

薫風

カラオケを唄えぬ妻が批判する

金剛の杖は阿弥陀とふたり連れ

穀は殖え剥き身は細る老いの冬

春一番風邪も巷に吹き散らし

コマーシャルテレビ雑誌に大暴れ

盤盥も隠居の育金屏風

町はずれ夕陽も水をのみたから

還暦の記念柳誌で意気新た

穏やかに一日終り陽が落ちる

礼服を車中で着替へ急ぎ足

金屏風四十億は何処の国

心向く九州人の北帰行

万歩計運動不足を窘める

呆け防止に始めた書道欲が出る

焼鳥にされる哀れな群雀

やわらちゃん技の切れ味群を抜き

子の架けた虹にひと色足してやり

南大阪川柳会

金井

文秋報

ふところの痛さは秘めたのし袋

五百羅漢痛さこらえる顔に逢う

お百度へじんじん冷える足の裏

ダム底の村に今でもある身分

社長室一人ぼつんと居る身分

大輪のバラより立派梅匂う

只今に部屋が冷えてる妻の留守

ブラジャーの威力にバスト美しい

冷える日の木綿豆腐は売り切れで

履歴書に平民と書いたことがある

弘

高明

久仁於

タミ

旭恒

幸夫

四郎

朴竜

ミチ子

義美

紀一

ふさ子

治幸

青琴

喜久亭

ちよ

正敏

楓楽

柳宏子

萬的

作二郎

悟郎

美幸

章久

冬葉

直子

憲太郎

諄うた空気が冷える夜の底

その内に化学が地球つぶすかも

痛い痛い剃刀よりも怖いペン

石橋をたたくたんびに威力消え

立派ではないが私の城がある

冷える日も犬が散歩をやめさせぬ

黙々と働く背中に教えられ

酒の威を借りていうから黙秘され

古傷の痛み気になる戻り寒

世論から沸いて威力の抜けた骨

無意識に歩幅が急ぐ朝の冷え

立派に果した役目を突つくものがある

肩書がついて正座を強いられる

立派ではないがかけがえない夫

目じるしは立派な家となりです

立派だと褒めてる口にあるねたみ

責任を立派にとって職を辞し

涙流し弔辞しつかり読んでいる

身分不相応の金を持って疑われ

贖札と思えぬ出来を見抜く知恵

三幸川柳教室

三宅

保州報

親友に金を貸さない主義を持つ

同じ傷抱いて親しみ湧いてくる

裏長屋裸同士のお付き合

お茶飲んだだけで親しい仲にされ

親しさに馴れて冗談きつくなり

魂胆があつて親しく酌をする

切れ味のよい返答が親しめず

寿美

頂留子

柳伸

度

友美

文秋

千里

凡子

勝美

喜風

シメ子

文子

トミ子

千梢

文江

甫佑

新造

東雲

智久

岩信

親路

三千子

かなめ

保州

恵子

鉄治

信子

一冊の本に親しむ冬籠り

叩かれてから蟻りとれてくる

親しさに溺れ足もと掬われる

目札の仕草で計る親密度

つながりの深さがわかる叱り方

タバコの火借りて四方山話など

膝くずしあえる仲にもある折り目

片道の燃料積んで散る桜

父を越す大きな靴の使命感

使命ゆえ衛兵まゆも動かさず

マリオネットが僕に使命を与けにくる

使命感持たせてうまい人使い

SLの使命まだある遊園地

千羽鶴一羽いちわにある使命

一本のたすきにかかる使命感

使命感俗な男を狂わせる

乗るものも担ぐ者にもある使命

真つ平と言いつつ親の跡を継ぐ

身に余る使命口髭たくわえる

てにをはの一字一字が持つ使命

川柳藤井寺

高田美代子報

嫁ぐ娘の母へ感謝のペンにじむ

突きさしたペンで政治の壁落とす

ペンとれば無口が痛いところ突き

横文字が読めねば顔へ塗るところ

横文字の看板にした質屋さん

お隣に英語のわかる犬がいる

青い目を白黒させている英語

朱夏

茜

孝子

百合子

美智子

和子

靖子

満州子

さち子

美子

博章

正一

勉

桂香

昭枝

高夫

公子

町子

由梨

千秀

戦中派苦しい思いのある英語

親の死も舞台で笑う芸の鬼

アングルを変えてカメラの鬼となる

三途の川の鬼にチップを弾んでる

経営の鬼も沈黙する不況

見所があるから鬼になるコーチ

鬼ごっこわざと分らぬふりをする

千匹の鬼と戦う父の靴

世の中にいろんな鬼がいてもよい

気の弱い鬼で真つすぐ生きている

金屏風裏でうごめく鬼がいてる

微笑みの裏に鬼棲むネオン街

バブル去り毀す旧家の鬼瓦

節分の鬼も食ってる豆ごはん

バブル消え仕事の鬼の肩ぐるま

仏にも鬼にも見える妻といえる

地獄絵に僕とよく似た鬼がいる

円らな瞳鬼千匹にたじろがず

良薬の苦さがやつとわかる齢

恥らえば女が匂う紅椿

人間が好き人の噂を聞き回る

橋の長さに井戸の深さにある情け

花の咲く音が聞える暖かさ

富柳会

池

森子報

したたかな話術で逃げたのはカラス

逃げ込める懐深い母の胸

我が娘例えはりえであつたなら

温暖化人の化石に猿笑う

透太

三郎

寿美子

繁男

みのある

志洋

敬一

悦子

宗一

美房

利武

淑子

きよ子

紅月

寿治

たかし

一屯

吸江

智久

政代

修六

寿美

与呂志

御名御歴化石に値するのかも

例えはぬくじに当れば草津の湯

縄のれん豆から逃げた鬼と呑み

波風を立てて逃足早い奴

シャッターのチャンスが逃げるバスの窓

逃げられた女と組んだ漫才師

化石まだ地球制覇の夢を見る

例題を見落す春のまつり笛

例えはの話隣の赤い花

揺れて風例えは花の芽が育つ

例えはと言つて悪友こきおろし

化石とも言われ重鎮とも言われ

運命の風から逃げる木の舟で

逃げきれぬ絆を抱いてゆれてる

語れない深さに埋もれてる化石

むらくも川柳句会

藤井

明朗報

文明は進むことだけ考えて

五十年きのうのような夫婦箸

合格をしたよろこびに広い空

進まない歩幅へ待つてくれる妻

雪男広い雪原越え還る

進む福祉老いだけ増える世を歎く

知恵袋長い寿命を世に生かす

進むうち予期せぬ壁に付き当り

占いをくさす夫がいて困る

世界は広い戦争してる国もある

日進月歩老いにも夢と希望あり

広い空みんな我がものとのんびの輪

絹子

昭水

智久

伊勇

文次

莊次

美代子

透太

美幸

柳太

美房

維久子

花梢

森子

正朗

芳子

秀子

一葉

義良

はる代

ヤス子

百代

久仁

三喜

定子

林蔵

ボランティア広めて愛を和が囲み
大病に迷う占い西東

商魂のすすめ上手に負けました
極楽の予約へ日毎数珠をくる

お彼岸へ孫とならんで般若経
就職の予約不況の風で割れ

子の問いに困るエイズの受け答え
盃にさくら舞い散る予約席

困ったと言えず上司の頼みごと
めだかの目斐伊川広く見え

無理をして予感が当る血圧計
梅古木花実らせて春を待つ

思い出の数ほど梅の花が咲く
あの広い海とおしゃべりしてみたい

ご婚儀へあやかるブームとなる予感
明

朝

美恵子

藤子

昭子

鶏生

ゆき子

よし美

峰雪

翠晶

幸子

三津江

島子

仲子

幸夫

ボランティア広めて愛を和が囲み

大病に迷う占い西東

商魂のすすめ上手に負けました

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

南天が折れてなるかと雪かぶり

寿と書いて未来を夢に見る

進歩する文化の尻尾にしがみつ

はからずもなんてまっ赤な嘘を吐

娘には娘のくらしがあつて振りむけぬ

官僚の進まぬ頭打首に

やわらかな陽ざしへ喜寿の鳥が翔ぶ

南天の目で何視てる雪兎

せきたてた後はのんびり仕舞風呂

進学の関所抜ければ青い空

はつらつと進む若さがまぶしくて

冬の陽のコタツへとどく風は春

九十の訃報天寿で片づける
列に入り進むほかなき一車線

はびきの市民川柳会 榎本

春の陽を信じて地蔵の花を替え
飼い主の顔に似てきたブルドッグ

同窓会鬼先生に腕を貸す
三味線に使わぬ所為か猫が増え

ナイターの埒場へ若さ取りにゆく
大根も男前から売れていき

七草を買ったお粥の味気なさ
秘境の湯話の落ちは混浴で

刎頭の友もそぞろに疎くなり
大ジョッキ成人式はすみました

血糖値それなら舐めることにする
お洒落忘れた日から女の冬ごもり

お洒落するゆとりが出来て皺が増え
引き際がとて綺麗なお洒落だな

父の日のネクタイ妻が褒め殺す
泣きません浮気の仇はショッピン

一呼吸おいた情けが仇となり
端布も工夫一つで生かされる

日本の端でどっこい生きてる
一銭五厘老人クラブの中で生き

車間距離上手に取ったお付き合い
年金が軋む老後のお付き合い

お手洗いまで付き合っバスの旅
旅土産くばって歩くお付き合い

付き合ひと言えはすみます午前様
吐来報

吐来報

吐来報

吐来報

吐来報

吐来報

吐来報

吐来報

吐来報

吐来報

吐来報

吐来報

清泉

白汀

与呂志

利武

かつみ

美津留

キミ子

たかし

岩信

忠宏

昭平

繁男

吐来

ケイ子

夏秋

美代子

重人

みつこ

晋

シマ子

敏

悦子

絢子

昇

志津江

敦子

お茶を飲むだけの付き合い噂され
下戸二人お付き合いせず凍てる道

付き合ひが良いと言われて損ばかり
新しい住所は書いてない手紙

新しく畳替えて小さい幸
久世川柳クラブ

二宗

吟平報

志重

江山

甫正

秀香

半仙

すみれ

邦人

美恵子

山人

吟平

きくゑ

伊久栄

恒心

賛平

螢報

きみゑ

房子

武子

幸枝

睦子

喜与志

横糸の少しゆるめがあなたたかい
足音も春のリズムに切り替える
白い杖音のひとつも見逃さぬ
足音の聞こえる時刻紅をさす
月曜の足音聞いて飲んでいる
黒光る柱に亡父の汗が沁み
茶柱が立ったと祖母は掌を合わす
一すじの光柱に今日を生き
政治屋の柱が腐れかけている
御柱らしく子育てした乳房
恩人と違う意見で石になる
足音が爆弾抱いてかけ上がる
太陽の恩を忘れて飯ぎらい
老母看取るこれがわたしの恩返し
生きのびて十指に余る恩を受け
まわりから恩をもらって生きて
報恩のころ静かに時を待つ
あれやこれ母の手造り贈りもの
足音で嬉しいことがわかります
春彼岸恩ある人に会いに行く
雪の音水の音など春の足音
生きものたちからSOSの贈りもの
花言葉うれしい花を贈られる
記念品贈って辞めてもらいましょう

豊中もくせい川柳会

田中 正坊報

みさ江 かつ乃 明美 弘子 盛桜 八重子 節子 富恵 隆風 諷人 忠良 実満 きみ子 三千子 和子 公弘 静江 はるお しげる 汲香 孔美子 美恵子 蜚 田実子 早苗 しげお

原色のどこか淋しいチンドン屋
ころ寒き日はゴッホの黄を探す
夕焼けのトランベツは原色だ
原色に戻れば平和な音がする
何かあるうきうきうきなく長電話
理屈抜くうきうきの顔すぐわかる
うきうきと出かけたわりにすぐ帰る
貸した傘が戻ってこない春の雨
不安です靴音揃う自衛隊
本当の友が遠慮をせず叱る
抜け目なくやつたつもの金丸さん
日本がちぢむのぞみなら乗らぬ
うぐいすが迎えてくれた花手桶
原色のような会話がはずんでる
うきうきとしているスキに狙われる
彼岸には少し華や母の墓
いつ来ても隣の墓に花がある
原色の街から洩れる黒人霊歌
無人売場で路の原色買ってくる
南国の土佐を愛しに旅に出る

静岡川柳塔

永倉 僕川報

とく子 薫 路児 悟郎 一笛 慶子 きく子 博史 白漢子 吉太郎 明光 英女 庸佑 正坊 紫香 武庫坊 作二郎 真柳 正雄 たまき つね まつゑ 静代

泣けるだけ泣いて女は強くなる
寿と書けば筆にもある温み

久子 柳華

川柳塔社常任理事会 (4月1日)

▼海老池洋・酒井輝両氏の同人推薦を承認。
▼水府忌句会に野村大茂津氏、茗人忌句会に
諷云児・月子両氏の選者委嘱を決定。
▼職制として発送部を復活、川島諷云児氏を
部長とすること、小池しげお氏を同人部に
配属することを決定。
▼諷云児氏から白鳥町の句碑建立が正式に決
まり、除幕式が9月3日に内定と報告。

第16回 阪神文芸祭 (川柳)

応募資格 阪神間7市1町に在住・在勤
または本部を置く柳社の会員

応募期間 4月10日～5月15日

参加料 1000円 (定額小為替)
選者 和田 光代 小松原爽介
森田 栄一 島本 泰

応募方法 村山勇太郎 春城武庫坊
雑詠2句を便箋に縦書きし、
「川柳」と朱書、郵便番号・
所属会(所在地)を記載。

応募先 尼崎市東難波町5丁目21-8
兵庫県阪神民局県民課内
阪神文芸祭実行委員会事務局



未知の体験

北
山
好
笑

急に家庭から解放された近頃、持前の好奇心から未知の事柄に挑戦しています。

先ず魚釣ります。紀南の海は澄みきり磯の香りが漂っています。竿を持ち眼を皿にして浮きを見ていると、スーッと沈んだので、竿を上げたが、針だけがキラキラ光っています。浮きが沈むと、体がハツ／＼と前に乗り出すだけで、竿の上げるタイミングが合わないのです。お連れの御夫婦は、ベテランなので次々と釣られます。付ききりの御指導を得て私もついに釣れました。嬉しさのあまり「アラッアラッ」と、言葉にならない大変な騒ぎをしました。だんだんにコツも解って楽しみが湧き、ググツと竿に伝わる感触が何ともいえません。

ベラ、ガシラの雑魚釣りでも楽しみは格別。また、磯で呑むビールはテレビのCMではないが、「これがまたウマインダナー」。今年はい

釣りたての魚を串焼にして、賞味する事を樂しみにしています。

次はゴルフです。と言っても本式なものではなく、草の上でボールを打っています。置いてあるボールぐらいと思ってたのに、クラブは空を切り、加減をすれば土を掘るを繰返して、やっと前にボールが飛びました。

去年、女三人で琵琶湖の北への旅をした時、パターゴルフをラウンド。松の木に当たりもしましたが、二十七ホールでバーデー三つ。

「筋が好いネ」と言われ、乗り易い私は思わずVサインで自己満足。今後自然に接した生きがいのある人生が送れて、その雰囲気から川柳が飛び出せば最高ののですが、その余裕を持ってないのが本音です。

細く長く

野村京子

少女時代、親戚にあった文学全集が好きで、借りては読んだものでした。いつかきくと、本を買って読みたい夢が、五十歳を過ぎてかない、昭和文学全集を三十二巻やっと買うことが出来ました。でも仕事優先で、ページを開くことがいまだにありません。仕事と趣

味の両立に苦しんでいます。時間がもつとも
っとほしい今日この頃です。

それでもいい仲間がいて待望の四国八十八箇所もお参りすることが出来ました。日曜囉路です。一カ寺ごとに御詠歌を唱えて番外寺、もいれ一年半くらいかかりました。暑い時、寒い時、坂の多い所、苦しい時もありました。が、仲間につっぱっていただき、結願の高野寺では涙の出る思いがいたしました。こんどは、西国三十三カ寺にお参りする予定で、今計画中です。

川柳への夢も、まだまだあります。十日ほど川柳から離れていると、作句のペースになかなかもたれません。それが恐くて、仕事にも柳誌を持って行きます。開けない時が多くても、持っていると安心です。仕事場で、いつでも書けるように紙と鉛筆はそろえています。いい句が出来たと家に帰って読み返して見ると、つまらない句の時がほとんどです。それでも、川柳の虫が私から離れてくれません。汐風川柳社のいい雰囲気の中で、先輩達に甘え切っている私です。

本を読むことも、お参りすることも、川柳も、中途半端で終ることが、いちばん恐いです。仕事を止める日まで、細く長く趣味を続けたいと思っています。

本社 四月句会

四月五日(月)午後五時半

メンズファッションセンター

桜は七分咲きというのに、寒さが戻って来
たが、定刻の午後六時半に出句が締切られ、
九十二名の出席で四月句会は開会された。

句会にさきだち、平成四年度「一路賞」と
「各地柳壇賞」の表彰が行われた。よろこび
の受賞者は椎江清芳氏(箕面市)と池永正雄
氏(和歌山市)で、栗主幹から賞状と楯が渡
され、所属句会から花束が贈られた。本社句
会初出席という受賞の二人は、祝福と今後の
活躍を祈るあたたかい拍手を受けた。

「おはなし」は高杉鬼遊氏。前回同様に、
氏の日々の暮しの体験や見聞から、琴線にふ
れたこと、腹の立ったことなどの披露。所属
していた連隊の慰霊祭の話、お隣の人の親
から「息子を起してくれ」と、早朝電話がか
かってきた話、近くに建築予定の高層マンシ
ョンに、反対運動を展開していること、松永
すすむさんの法事に出席したこと、東大阪市
の昔なじみの喫茶店の話など…。ユーモ

ア たつぷりの語り口に引込まれている間に、
司会から「時間切れ」のメモがまわって、続
きは次回のためのしみた。き

月間賞は津守柳伸さん(大阪市)に輝く。
(司会賞)柳宏子(受付)シマ子・欣史子
(記録)ダン吉・楓楽(清記)楓楽

席題「両方」 久保田半蔵門選

両方に持たせてあげたい優勝旗
両方の選手に讃辞惜しまない
日本もロシアも揺れている政治
両断にしたい政治の癒着ぶり
表向き応援します両候補

両方の言い分聞いてから返事

両方共 言い分がある痴話げんか

両方を叱ってけりがつくけんか

母さんが両方勝ちと言っている

両方が開き直って強い腰

両方に義理だてをして顔がない

両方を立てて私が孤立する

両方の話をきくと腹が立つ

バランスを崩し両方共転ぶ

両方にわたしを試す椅子がある

両方へ聞えるように言うてある

両方の耳 別々の噂聞く

両方がブツブツ間違い電話切る

両隣とても可愛い奥さまだ

金と力 両方欲しいのが男

両方の噂 小耳に挟んで来

両方の責任を問う事故現場
両方の言葉真似てる九宮鳥
妻と母へ別の言い訳持ち帰る

両方が違うところで待ちぼうけ
猫の好きな夫婦で猫を困らせる
両方の顔色見てる孫の知恵

外面も内面もよいうちの嫁
両方の手いつも空いている無職
左手が右手を叩くつまみ食い

両方の指で足りない職を変え
両方の言い分裁判所も困り

両方の耳で大きくから弱くなる
両方が達者なうちに旅に出る

両方の死角に愛がかくれている
両眼の開く日待っている達磨

左右の掌それぞれ違う謀反する
両方で積木くずしの罪を負う

ジャンケンを手手でしたい三歳児
両方をたてる六法練っている

軸

どちらにもつかず中立守り抜く

兼題「ピカピカ」 田中透太選

アンテナをピカピカさせて撒く噂
ピカピカに弱い女のくすり指

ピカピカした日から孤独になつていく
ピカピカに自慢の自転車磨く孫

ピカピカの車に恋を乗せている
ピカピカの金の延べ棒暴かれる

二南
狸村
希久子

志洋
作二郎
恭昌

正坊
金太

鬼遊
欣史子

吸江
千歩

諷云児
武庫坊

靖子
悟郎

作二郎
かすみ

重人

半蔵門

ただし
敬

文子
章久

昭子

雷音



ピカピカの靴が花見の場所とりに

ピカピカの入社へ襲う五月病

ピカピカの靴で目出度い席に出る

ピカピカが好きで財布と睨めっこ

ピカピカの家にローンがついてくる

ピカピカに磨き直して嫁に行く

ピカピカに女の業は飾りたく

ピカピカの廊下へ妻の手は荒れる

ピカピカに磨く月曜日の鏡

働いた汗はピカピカしています

ピカピカの鍋を焦がしたサスベンス

ピカピカに磨いて誰も寄せつけず

ピカピカの鍍金はいつか生地をだす

ピカピカの服は私に似合わない

にせものの方がピカピカよく光る

ピカピカのちらしに買えぬ家はかり

ピカピカの服で賑う戎橋

ピカピカの初心忘れぬマイペース

本物の恋かも知れぬ稲光

ピカピカの靴で定年しめくくる

ピカピカの椅子だったのはバブルまで

拭き込んだ廊下が冷える禅の寺

ピカピカの本が血となり肉となる

ピカピカと輝いていた父のペン

ピカピカの靴も靴も遠花火

ピカピカの妻の素顔にハッとす

ピカピカに爪を磨いた妻の乱

ピカピカの二人は雲にのっている

作二郎

英子

二南

欣史子

吐来

美房

笛生

文

英子

保州

美智子

稚代

隆

武庫坊

希久子

満州

狸村

希久子

たず子

一風

美津留

萬的

典子

正坊

森子

文

雀踊子

いわゑ

ものの弾みてピカピカにする妻の乱

薬師寺のまだピカピカに西の塔

硝子の馬は駈け出しそに陽をはじく

ピカピカのままでは売れぬ骨董品

ピカピカの女も靴も弾む春

兼題「抜く」

奥田みつ子選

抜こうとすると遮断機が降りる

底抜けに明るい妻で肥えている

六法を繰って抜け道考える

手抜きした料理あつさり口に合う

息を抜くコツを知らない戦中派

兄ちゃんが力を抜いている相撲

大物を抜いてゴクゴク水を飲む

鼻毛抜く年金の日が暮れなすむ

検査は抜く手も見えず斬りつける

追い越した椅子 温い日も寒い日も

雑草の抜けど抜けども春の雨

釘一本 抜けてバランス取れはじめ

善人の地図に抜け道書いてない

桜咲く肩の力を抜き給え

洗われて原色の抜けすぎた画布

ライバルを抜くまで我慢車間距離

抜群のプロポーションに眩暈する

抜け駆けをしてから背中寒くなる

太茂津

笛生

作二郎

狸村

透太

半蔵門

昭子

正坊

武庫坊

保州

ダン吉

しげお

吐来

雷音

吐来

勝美

文

諷云児

美房

房子

章久

透太

靖子

一人抜く相手の背の息遣い

抜けている奴だと油断してしまう

デッド・ヒート抜いて抜かれてまた抜いて

ライバルと抜きつ抜かれつ春の坂

威勢よくビールを抜いて仲間おり

けちんぼの癖にどこかが抜けている

円満な日へ釘を打つ釘を抜く

星が流れたら誰かが輪を抜ける

紅殻の格子に映える抜衣紋

力抜くとすぐ雑草が生えてくる

結婚指輪抜いたらすつとするかしら

栓抜きに呼びつけられている幹事

年金が春の財布をかけ抜ける

おしゃべりが桜並木を抜けてくる

力抜くコツも覚えた馴れてきた

お父さん抜きでまとまる娘の縁談

竹光を抜けばそれまでだと思ふ

手抜きして夫しつける二食の膳

佳

ものはずみで抜いた刀が収まらず

抜かれても亀は自分を知っている

魂を抜かれて軽く生きている

秀

肩の力を抜いてやさしい文字になる

軸

いつの間に追い抜かれたか子の育ち

兼題「引力」

堀端三男選

紫香

文秋

勝晴

希久子

いわゑ

狸村

幸

隆

文子

楓

しげお

正坊

作二郎

柳宏子

絹子

鬼遊

千歩

柳宏子

典子

文子

美代子

みつ子

寿美

引力が毒ある花ほど強いとか
素人にやりんごが落ちただけのこと

腹の子の引力ついに式をあけ
人脈という引力に逆らえぬ

引力へ挑む風船空へとび
宇宙まで来ると引力見えてくる

捨てきれぬ夢が生への引力で
隕石に地球の魅力あつたらし

引力がゆるみはじめた五十肩
引力のように睡魔に襲われる

嫁はんの引力這うてでも帰り
引力に逆らわないうで坂下りる

引力の小さな世界 砂時計
心変りは風の引力かも知れぬ

カエルコール妻の引力受話器から
赤い灯の引力 人生狂わせる

引力に美食の罪を責められる
夜桜の引力 不況風に勝ち

逆上りまだ引力がじやまをする
引力があつて階段踏みはずす

引力へ無駄な抵抗するひばり
ほどほどの引力でよい夫婦の座

引力でときどき嵌まる落とし穴
雪月花みな引力に歩して二人

引力を味方に試歩の杖をつく
モナリザの微笑 引力だと思ふ

嫁方の引力 息子帰らない
二で割れぬ引力 嫁と仲が良い

引力に逆らうなんて不遜だぞ

章久

文時

保女

保州

美房

頂留子

吐来

美代子

笛生

みつ子

吸江

恭昌

典子

武庫坊

一風

引力の強い妻から逃げ出せぬ
いつまでもまだ引力のある君だ

引力が胸のつかえをそぎ落とす
引力に抵抗 逆立ちやっている

引力が簡性か枕二つ置く
乗りついて帰る老母の引力かも知れぬ

引力の届く範囲に君が居る
妻と子の磁場の外には出られない

妻と子の磁場の外には出られない
天 軸

Jリーグの引力怖いプロ野球
兼題「若い」 板尾岳人選

若者の居る明るさで窓がある
失敗もまだ出直せる若さ持ち

知恵熱におろおろしてる若い母
二つ三つ若く見られて春を着る

若き日を探して母の小抽斗
立派な影を欲しいと思ふのは若さ

呆けるのが恐くて若い木をゆする
若者よ平和にはけていませんか

毯のような血潮へ若さ動き出す
若いのに早せんまいが切れたのか

歳をとるのが下手くそでまだ若い

シマ子

稚代

隆

眉水

鬼遊

楓

美房

道胤

寿子

三男

太茂津

文秋

落児

希久子

吸江

いつも空腹なのは若いからだろ
まだ若い親だと思つて無心

六十の男を若いなと思つ
外国を歩いているよう若い街

罪と恥いっぱい抱えている若さ
若者へ残す地球に木を植える

柱の傷は龍馬のように若かった
出直しを図る若さに捻子を巻く

最大の誤算 若いと思つて
春うらら若さが邪魔をして困る

キリンの首 傷つきやすいのも若さ
一瞬の若さを保つ押し花に

七ツ道具を一つも持てない若さ
春爛漫 若さに負けぬにぎりめし

最後には君は若いとだけ言われ
佳

若い日の笑い袋を開けてみる
底知れぬ若さを秘めた海の着

捨てるものたくさん持つて若さ
ハインの詩 読んで若さを取戻す

トンネルを抜けると戻つてきた若さ
いつまでも若さが消えぬ雪女

注目をされてるバラのなお赤く
地

びつくり箱いくつも持つて若さ
天

あの橋の向うに置いてきた若さ
軸

幸

正坊

金太

楓

朱夏

作二郎

清芳

重人

太茂津

みつ子

隆

しげお

千歩

タン吉

いわゑ

引き出しに雪崩を入れている若さ

岳人

兼題「家」

橋高薫風選

だんだんに大黒柱細くなり

(池)正雄

たくさんのお札が貼ってある家だ

文子

色瓦 人のこころのとめどなく

昭子

いつからか猫はわが家と信じてる

森子

我が家までつくお喋りな小径

シマ子

家つき親つきそんな娘に惚れました

美代子

諦めのかたちで庭のない家よ

利武

富士の山 見えて我が家に客が増え

メ女

筈を貰い旧家の愚痴を聞き

岳人

散る桜 生家の間取り想いけり

雀踊子

笠智衆に似た父がいるぬくい家

勝晴

よい家がどどん建って不況なり

愛論

我が家にも派閥があつて会議する

東雲

期限つきでしばらく家出してみたい

三千子

歳時記が京の家並みに生きている

靖子

カラオケも家で唄うとはずまない

一風

外地から戻って我が家の灯が明かい

勝晴

肝腎な時には家に居ない人

希久子

ふるさとの家に他人が住んでいる

靖子

古里の二字 草屋根に捧げたい

(池)正雄

人形の家の春には春の鬱
入形の家で六法線っている
嫁一人増えて花ある家となり
窓一つ増やして家が若返る
家を売る話の中でパンを焼く
花々に囲まれている魔女の家

マイホームそれから僕は鍵つ子に
椿散る「暗夜行路」を書いた家
家出ると優しい顔になる主人
床柱 主婦の器量を知っている
お隣があるから叫ばないでいる

家訓などないが貴くものはある
時々家は家を覗きにくる息子
天 地 人

床柱 背負って妻の下知を待つ
軸 柳 伸
一生に何べん家の番地書く
薫風

京都塔の会 春の吟行句会
とき 5月16日(日) 午前11時
ところ JR神足駅東口に集合―神足神社―
勝龍寺公園―公民館(句会場)

兼題 麦 掘る 習慣
会費 1000円(昼食各自持参)
申込 5月10日までに松川杜的まで

幸 正坊 愛論 美津留 吸江 いわゑ 昭子 作二郎 東雲 楓楽 文 保州 大茂津 柳伸 薫風

鳥取県川柳大会開く

第16回鳥取県川柳大会は3月28日、東郷温泉・水明荘で210人が参加して開かれた。

各題の天位句は次のとおり。

源平絵巻 戦の嫌な人もいる 恒松 衛山
よみがえる術のなし 花いちもんめ

笑顔から笑顔へ花の種子袋 江原とみお
春の風にきりこぶしを開かせる 政岡日枝子

父と書く字の大きさを考える 新家 完司
雉木林の色 私をやわらげる 鈴木 公弘

船は疲れて六畳の海に着く 青戸 田鶴
打楽器が響く闘志が湧いてくる 長谷川博子

農を継ぐ私を妻が押してくれ 天根 夢草
農を継ぐ私を妻が押してくれ 野中 御前

▼訂正とお詫び 4月号のP83に掲載した

平成4年度各地柳壇賞の佳句「身に覚えあつて言訊聞いてやる」の作者は伊藤寿美さんの誤りでした。お詫びいたします。(編集部)

新同人紹介

酒井

紫香・太茂津・幸推薦

輝

柳界展望

編集部

★香川県大川郡白鳥町の白鳥温泉と中央公園に西尾某主幹と橘高薫風理事長の句碑が建立されることが決まった。これは昨年、川柳塔社が川柳塔おっばこ吟社と合同川柳大会を開いたことから町長の発意で建てられるもので、9月3日に除幕式が開かれる予定。

(木村明人報)

★ふあうすとの平成4年度二賞がこのほど決定した。

ふあうすと賞

■設立させた無題珈琲うすくする 安藤まさ代
■手術記念日鯛の味が舌にある 西山 金悦
■寒いかたちに女のにくき袖だたみ なんばまさこ

女にもふたつみつはある仮面 伊藤 定子
△紋 太賞△

雪しんしん胸の奥なるわが微熱 鷹野 五輪
■ビール注ぎ足す女ひとり 児玉 怡子
■の鎮魂歌 酒谷 愛郷
■萍と思いのほかに齡をとる 忌のめぐる疾さ火宅の中 草野 麗湖
■で駆け 麗湖 麗湖
■平成4年度川柳高知賞はこのほど次の3氏に決定。
■涙など武器にはしないハ イヒール 上鈴木春枝
■泥に生き泥に染まらぬ蓮の花 百田 幸

勝ち負けは言うまい余生埋める趣味 岡村 千鳥
★尼崎川柳協会発足記念川柳大会が3月21日、尼崎市中央公民館で開かれたが、本社同人の春城武庫坊氏の次の句が秀句賞に輝いた。
■二人だけの吉日抱いて五十年

★定金冬二句碑建立・第15回記念津山川柳大会は6月6日、津山市総合福祉会館で開かれる。兼題と選者はぼつりー板野美子▽点▽久保田半蔵門▽風▽来住タカ子▽筆▽福村今日志▽まばろし▽金山英子▽面▽小松原爽介▽回る▽西川富恵▽和む▽細川聖夜▽浅い▽ト部晴美▽坂▽片柳哲郎(各題2句)、投句締切午前11時半、会費10000円。なお、句碑除幕式は6月5日午後5時から音の広場、同祝賀会は同6時半から雅城閣で開催される。

★アーバンリゾートフェア神戸'93を迎え、「神戸を詠む」川柳作品の募集が行われている。応募期間は4月1日から6月30日まで、未発表作品1人2句以内で、官製はがきに住所・氏名・年齢・電話と作品の対象となつた場所を明記し、神戸

市中央区加納町6-5-1神戸市教育委員会社会教育課「神戸を詠む」川柳係へ選者は去来川巨城・小松原爽介・平山繁夫で、賞は大賞1・次席3・選者賞3・佳作50点、9月26日表彰。

▽同人消息△
■本田恵一朗氏(本社参与倉敷市)は児島文化連盟功労賞の第一号を受賞、3月7日、児島商工会館で授与式が行われた。

■遠山可住氏(参与・兵庫県)は3月14日、姫路市で開催された第18回兵庫県身体障害者社会学級生のつどいの席上、永年にわたる青い鳥学級川柳教室の講師としての活動に対し、兵庫県教育長から感謝状を贈られた。

■藤井二三氏(参与・堺市)は雑誌『大阪春秋』第70号に「大阪泉南地域に現存する庚申講」と題して四頁にわたって執筆している。

▽出版△

■中野恵空川柳集「緋の衣」(B6判112頁・700円)天根夢草序文・289句収録。

■春日井五月作品集「春の天気図」(みどり選書・A5判156頁・10000円)渡辺和尾・佐野裕子序文。

■川柳自選作品集「吉備団子」四十三集(川柳岡山社刊・A5判124頁・15000円)大森風来子序文。

■合同文集「花飛行」(文章を学ぶ鳥影の集い刊・A5判260頁・25000円)▽志芳志△

▽お詫び△

■小林トメ子さん(同人・大阪市)から金婚内祝として金一封を拝受しました。

▽お詫び△

■3月号掲載・本社4月号の兼題予告で「字」とあったのは「家」の誤りでした。ご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。

5 月 各 地 句 会 案 内

	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	1日(土)午後1時から 出る・突然・怪しい・隙	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河円天笑
尼 崎 いくしま	7日(金)午後1時から 杉・鼻・傾く・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 まつえ	8日(土)午後1時半から 現役・世渡り・青い鳥	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	9日(日)午後1時から 鉄・出る・天狗	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	10日(月)午後1時から 紫・座る・偽・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ
八尾市民 川 柳 会	11日(火)午後6時から 叱る・新・期待・スポーツ	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
京 都 塔 の 会	16日(日)午前11時集合 麦・掘る・習慣	春の吟行句会 会費1000円 P103参照 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的
川 柳 ねやがわ	16日(日) 正午から 運転・艶・ベテラン・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	17日(月)午後1時から 土・観音・おろおろ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	19日(水)午後6時から 援助・欠陥・責任・手触り	寺田町高松会館 JR還状線寺田駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
高槻川柳 サークル 卯 の 花	20日(木) 正午から 灯・人形・約束・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島風云児
富 柳 会	20日(木)午後1時から 周辺・鮮やか・となり	富田林中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
南 海 川 柳 会	21日(金)午後6時から 不明・連続・勝気・刺激	玉造老人憩いの家 JR還状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
東大阪市 川 柳 会 同 好 会	22日(土)午後6時から 投げる・パン・奇跡・面	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市 川 柳 会	23日(日)午後1時から 悲しい・催促・ウインク・(無駄)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
岸 和 田 川 柳 会	27日(木)午後6時から サーカス・涼・せつない・即日	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地理村

★日時・会場などが変更になる場合は、西出楓楽(06-762-4408)へご連絡ください。

編集後記

★「均等法 男の方がすねている」わけではないが、三月号の女性同人特集に対抗して「男百句」を特集した。スタッフの協力で集めた三年間に男を詠んだ句は五〇五句、作った人は二

二一人で、一人で十句、十句の人が多いが、女性で八句の人もある。この中から独断と偏見で選んだ百句の作者は男性七七・女性三三とここでは圧倒的に男性優位となっている。

★黒澤明の映画に「七人の侍」というのがある。何時見ても新しい発見があるがこの七人のキャラクター、六人ではやや物足りない。八人は多すぎる。どうして七人でなければならぬのは、「男の性格」を個性

あふれる人物像として描くのに必要にしてかつ十分な数だからだろう。男と言え

ば、日本の父を見事に演じつづけた笠智衆が亡くなった。誰よりも好きな役者だった。心から冥福を祈る。

★映画というところ、何回も映画化された壺井栄の『二十四の瞳』の大石学級。二十四の瞳なら十二人で、それら大石先生はすべての子ども達の心をつかむことができただけの学級人員であつたか。また、帝国陸軍を持ち出して恐縮だが、その最小単位である分隊も十二人であつた。分隊は戦闘単位であるとともに、教育単位でもあつた。ついでに数字をあげると、陸軍士官学校へ進み幼年学校の学級人員は二十五人であつたという。落ちこぼれを出さないための十分にしてかつ必要なる人数だろう。

(正)

ひとこと

川柳は大衆文芸か

全日本川柳協会が社団法人という法的性格を持った団体として再発足したことは、柳人のひとりとして喜びにたえない。ところで最近、協会の定款を見る機会があつたが、その第四条(目的)に「この法人は、大衆文芸としての川柳の普及向上を図り」と記されているのに奇異な感じを受けた。

ある作家が「小説には純文学も

大衆小説もない。あるのはよい小説か悪い小説かだけだ」と述べているように、マイナスイメージを伴う大衆文学・大衆文芸という言葉自体、あまり用いられなくなりつつある今日、自らの文芸にあえて「大衆」を名乗るのは如何なものであろうか。もし何らかの言葉

を冠したいのであれば、国民文芸とでもしてほしいものである。

三条 三吉

★「血液型は？」と聞かれることがある。「A型」と

答えると、「やっぱり」と言われる。本当に血液型で性格が分かるのだろうか。

誰でも几帳面な面もあるし頑固なこともある。時には気紛れなこともある。

★医学的に言うと、ABO式だけでなく、MN式とかRh式など何万種の血液型に分けられるから単純にA型即几帳面とはならない。

それよりも、体型で性格が分かるらしい。しかし、内向的と言われる瘦型の人が肥ってきたら、性格も社交的で、のんびり屋さんに変わるのかどうか怪しい。

★人間、誰でも褒められると嬉しい。思いがけない事を褒められることがある。反対に、良いと思つてした事を、悪意にとられることもある。仮に、廊下

に捨てたとする。或る人はいい事をしたと思い、また或る人は、善人ぶつて嫌味だと思つかも知れない。その事実が問題なのではなくそれを見る人の心が投影されるから怖い。立派な事をしても、他人の目に立派に映るとは限らない。他人の目までコントロールすることはできないのだから。★マンシヨンの庭でも鶯が無心に啼いている。(み)

作品募集

川柳塔 (10句) 西尾 栞選
水煙抄 (10句) 黒川 紫香選
銀河系 (3句) 河内 天笑選
茴香の花 (3句) 小出 智子選
「根」 小白金 房子選
「部屋」 坂口 公子選
課題吟 (3句) 「濡れる」 植村 客遊子選
初歩教室「和やか」 (3句) 吉岡美房担当

7月号発表 (5月15日締切)

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

5月号 課題吟 「ソース」「這う」「のどか」
初歩教室「水着」

本社5月句会

日時 5月7日 (月) 午後5時半
会場 メンズファッションセンター3階
中央区内本町1-1 電話06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角
おはなし
兼題 「はやばや」 河内 天笑選
「比較」 岩佐 丹吉選
「攻める」 江口 吐度選
「鈍い」 榎本 来選
「軒」 野村 太茂津選
「西尾 栞選」
投句費 1題 当日発表 各題2句以内
500円
柳箋 (4cm×19cm) 1葉に1句を書き、
投句料310円 (62円切手5枚) 同封のこと

本社6月句会 7日 (月)

兼題 「ぶらぶら」「吸う」「毎日」「字」「朱」

夜市川柳募集

第12回「客」 西尾 栞選
ハガキに3句 5月末締切
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題「澄む」 橘高 薫風選
ハガキに3句 5月10日締切
投句先 〒540 大阪市中央区馬場町3-43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表 5月23日 (日) ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「味方」 橘高 薫風選
ハガキに3句 5月15日締切
投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

〒545

発行所

川柳塔社

電話 (06) 691-6914 番

振替口座大阪8133368番

定価 六百元 (送料51円)

半年分 三千八百円 (送料共)

一年分 七千五百円 (同)

平成五年五月一日発行

編集兼 西尾 栞

発行人 藤原 童心

印刷所 大阪阿倍野区三好町二丁目一六

ウエムラ第2ビル202号室

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店



豊津住宅株式会社

本社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊津店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14
TEL (06) 330-0006(代)
FAX (06) 388-6102

関大正門前店

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21
TEL (06) 388-6166(代)
FAX (06) 388-6886



白島海岸

潮騒のリズムに
身をゆだねて
心地よくつろぎを

国立公園 隠岐の島

きん ぶ そう
旅館 金峰荘

施設のごあんない

収容人員 45名

客室 13室

舞台付広間 42畳

駐車場 乗用車10台

冷暖房完備

〒685 島根県隠岐郡西郷町

TEL (08512) 2-1427 FAX (08512) 2-2330